

第15章 枝松遺跡4次調査

1. 調査の経緯

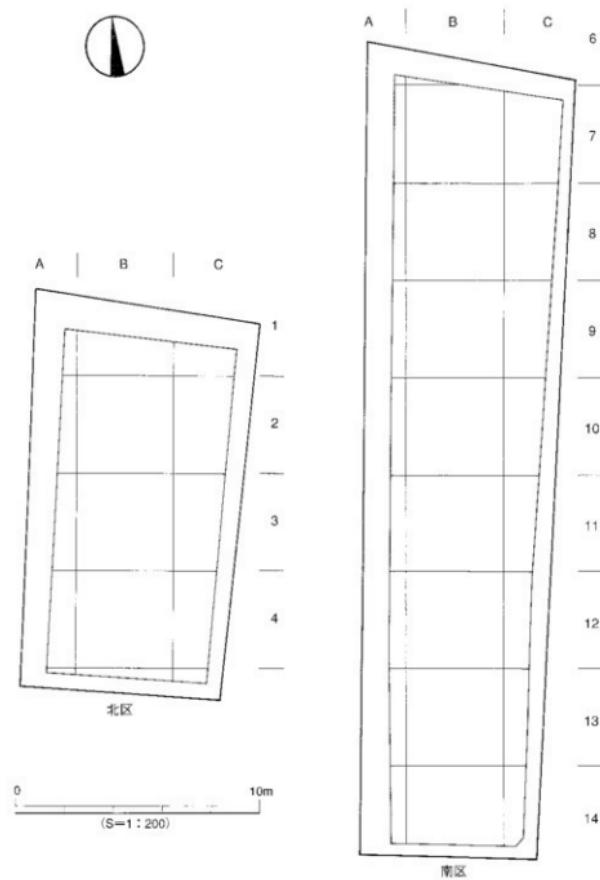
調査は、調査区のはば中央を東西に流れる用水路がある為、調査区を二つに区分して実施した。用水路より南側を南区、北側を北区とした。また、排土置場のスペースをそれぞれの調査区の東側（幅12m）と、南区の南側（約20×32m）に設定した。最終的な調査面積は401m²である。なお、南区の排土置場及び調査事務所部分の調査は、南区と北区を埋め戻し後に行った。

10月1日より重機を使用して表土の掘削作業を開始する。まず、南区と北区の西壁沿いに幅1mの南北先行トレーニングを設定した。トレーニングの深度は土層の堆積状況などから、褐色土上面までは重機にて掘削を行う事とした。そして、褐色土以降は手堀り作業を行い、火山灰堆積層（A T火山灰）確認のため、最終的には約2.5~3mの深さまで掘削を行った。同月21日南・北両調査区の遺構検出を終了、遺構配置図を作成する。同月27日、航空写真撮影を行い、つづいて高所作業車を使用して遺構の個別撮影を行った。同月29日調査区を埋め戻し、調査事務所を撤去した。事務所跡に延長トレーニングを掘り、アカホヤ火山灰とA T火山灰の確認作業を行い、土層図の作成を完了する。30日、トレーニング及び土層の写真撮影を行い、トレーニングを埋め戻し調査を終了する。調査区は北より、4m四方の杭を打ち西から東にA・B・Cとし、北から南に1・2・3…12・13と番号を付けグリッド分けを行った。

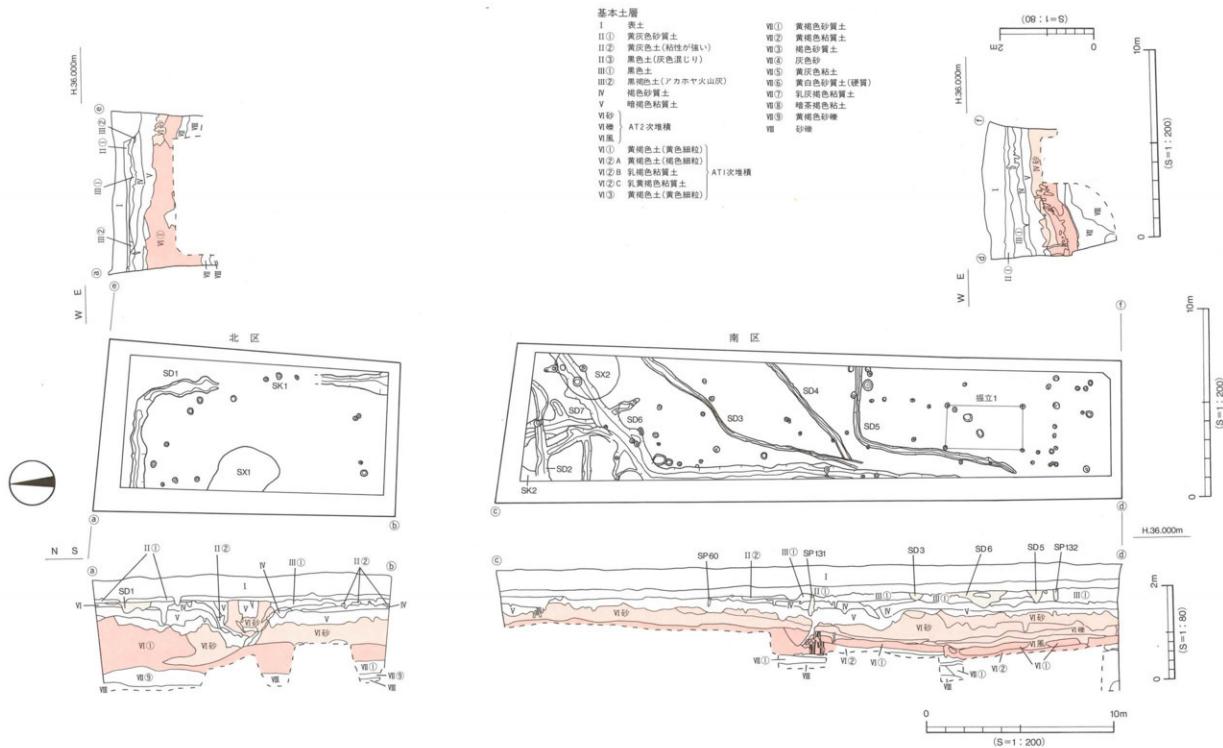


第187図 調査区位置図

枝松道跡 4 次調査



第188図 区割図



第189図 遺構配置図

2. 層位 (第190図)

本調査地の基本層位は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層灰黄褐色土、第Ⅲ層黒色土、第Ⅳ層明黄褐色土、第Ⅴ層黄褐色土である。第Ⅵ層はA T火山灰で、火山灰層は1次堆積層と2次堆積層に分別される。

第Ⅰ層—今回の道路事業による基礎用の造成土と近現代の農耕による耕作土、及びそれに伴う床土である。

第Ⅱ層—白色の粗い粒砂を含んだ灰黄褐色土である。南・北調査区全域で見られる。中世の遺物が少量出土している。

第Ⅲ層—若干の土色の違いにより第Ⅲ①層黒色土、第Ⅲ②層暗褐色土に分層される。第Ⅲ①層は南区北側を除く全域に10~20cmの厚さを測る。第Ⅲ②層は北区で5~10cmを測り部分的に途切れ、南区では中央から南側に2ヶ所、厚さ10cm、長さ3cmを検出した。

第Ⅳ層—褐色土である。南区中央から北側を除く全域に10~20cmの厚さを測る。

第Ⅴ層—暗褐色粘質土である。調査区全域で10~30cmの厚さを測る。

第Ⅵ層—暗黄褐色土である。火山灰の堆積過程を基準にすると、1次と2次の2回の堆積層に区分される。また、その要因や土色、土質の違いなどにより、さらに細かく分層される。

〈A T 2次堆積〉

第Ⅵ層砂：黄褐色の粘質土である。土層中に若干暗褐色土が混じる。調査区全体で、厚さ25~30cmを測るが、南区中央部で4m途切れるところがある。

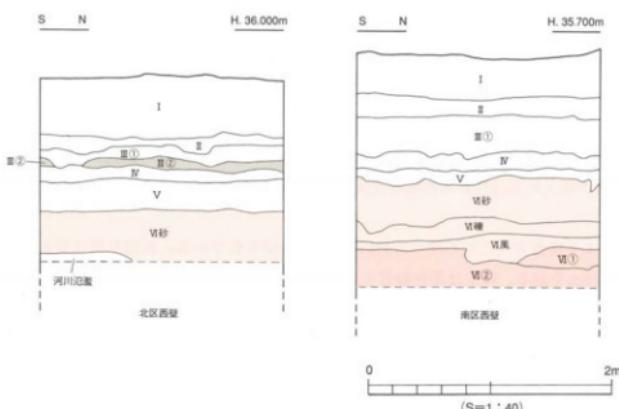
第Ⅵ層礫：黄褐色の粗い砂礫である。南区中央から南側に厚さ5~10cmを測る。

第Ⅵ層風：小礫を若干含む明黄褐色土である。南区、中央から南側に5~10cmの厚さを測る。

〈A T 1次堆積〉

第Ⅵ①層：南区中央から南側に5~10cmの厚さを測る。部分的に途切れるところがある。

第Ⅵ②層：南区中央から南側に厚さ3~8cmを測る。



第190図 土層柱状図

3. 遺構と遺物

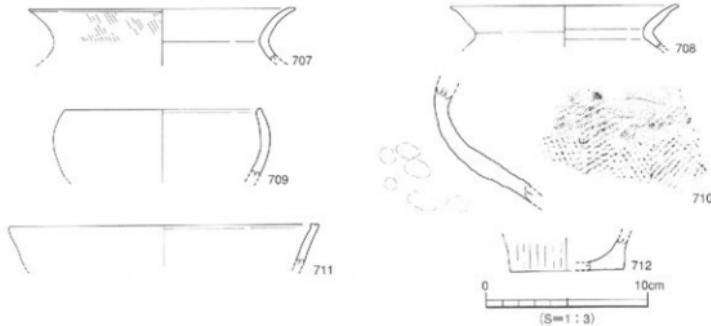
〔1〕古墳時代以降

1) 溝 (SD)

SD 6 (第189図)

南区東壁C7区から南西方向に流れ、A8区で南に屈曲し、A12区西壁に続く。断面形態は舟底形を呈し、上場幅60~70cm、深さ30cmを測る。埋土は黒色砂質土である。埋土中から、弥生土器片と土師器片、それと須恵器が出土した。時期は出土遺物から古墳時代後期以降に埋没したものと見られる。

出土遺物（第191図）707・708は土師器の壺の口縁部片である。707の口縁部はやや内溝し、調整は内外面ともヨコナデを施す。708は口縁部外面に刷毛目調整を施す。709は土師器の塊口縁部片である。710は須恵器の壺の肩部片である。内面に指彫り压痕が見られる。711は弥生の壺の口縁部片。内外面共にヨコナデ調整。712は弥生の壺の底部片である。底部は平底である。



第191図 SD6出土遺物実測図

SD 3

南区東壁C8区よりC9~A11区を南西方向に走り、A11区でSD4を切る。断面形態は皿状を呈し、上場幅40cm、深さ20cmを測る。埋土は黒色砂質土である。埋土中からの遺物の出土はない。南端での平面プランの途切れは先行トレンチ掘削時に消失してしまったものである。なお、プランの延長が想定される西壁土層からは断面形態が確認できない事より、本遺構は本来はA11区でおわるものである。時期はSD6との埋土の共通性から古墳時代後期以降に埋没したものと考える。

SD 4

南区C10区より南西方向に走る溝でA11区でSD3に切られている。断面形態は皿状を呈し、上場幅40cm、深さ15cmを測る。埋土は黒色砂質土である。埋土中から摩滅の著しい土師器の小片が出土している。時期は出土遺物などから古墳時代後期以降に埋没したものと見られる。

SD 5

南区C11~A13区に位置する。平面形態はB11区で南に屈折し、「L」字状を呈する。断面形態は皿状を呈し上場幅40~50cm、深さ15cmを測る。埋土は黒色砂質土である。南端部分の平面プランの途切れはSD3と同じ理由によるものである。なお、延長プランが想定される箇所であるA13区西壁土

層にて断面プランを確認しているため、SD5は西へ続くものである。埋土中からの遺物の出土はない。時期はSD3と同様に埋土の共通性などから古墳時代後期以降に埋没したものと考える。

SD7

南区北壁B6~8区にかけて検出した。断面形態はレンズ状を呈し、上場幅40cmを測る。埋土は黒色砂質土である。遺物の出土はない。時期はSD6との埋土の共通性や切り合い関係から古墳時代後期以降に埋没したものと考える。

〔2〕古代～中世

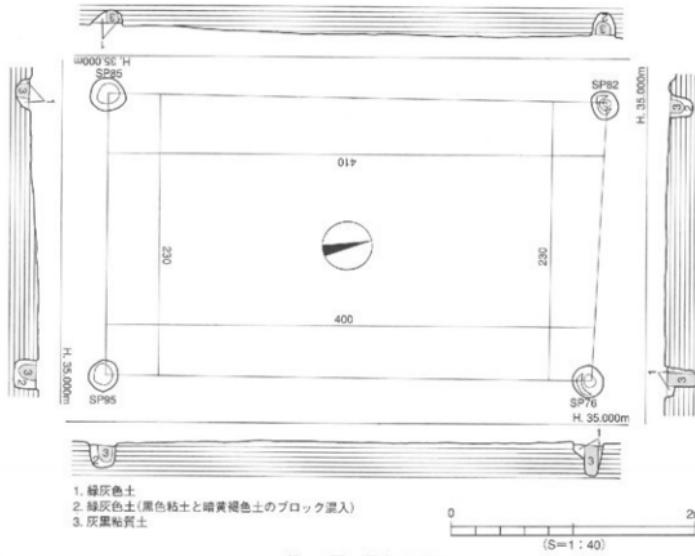
今回の調査で確認した遺構は掘立柱建物址1棟、溝2条、土坑2基である。検出したのは第IV層上面であるが、本来は第III層上面から掘り込まれたものである。

1) 掘立柱建物址（掘立）

掘立1（第192図、図版126）

北区B12~13区に位置し、1×1間の南北棟となる。規模は桁行長4.1m、梁行長2.3mを測る。柱穴は円形を呈し、径20~25cm、深さは10~20cmを測る。埋土は緑灰褐色土で、柱痕は灰黑色土の粘質土である。SP95より完形の土師器の皿が出土している。時期は出土遺物から中世の建物址と思われる。

出土遺物（第193図、図版128）713土師器皿の完形品。底部は回転糸切り技法によるものである。口縁部はやや内湾して立ち上がり、口縁端部は外反し尖り気味である。



第192図 掘立1測量図



第193図 掘立1出土遺物実測図

2) 溝 (S D) (第194図)

S D 1 (図版127)

北区に位置し、A1区より東に伸び、C1区で南に屈曲しL字形を呈している。断面形態はレンズ状を呈し、上場幅50cm、深さ20cmを測る。埋土は砂粒を含んだ灰褐色土である。なお、図中に見える平面形態の途切れは平面プランの検出の遅れによるものである。遺物は埋土中から土師器土釜の脚部や須恵器の東幡系擂鉢の口縁部片などが出土している。

時期：出土遺物から中世以降に埋没したものと考えられる。

出土遺物（第195図）715は東幡系擂鉢の口縁部片。内外面共にヨコナデ調整を施している。716は上師器土釜の口縁部。口縁部は内湾し、口縁端部は鈍い断面三角形の凸帯を貼付している。717・718三足付土釜の脚部。共に外面に焼付が見られる。721は土師器皿。底部外側にヘラ切り痕が残る。

S D 2 (第195図、図版128)

南区C7区より南に流れ、同区で西に屈曲し、A7区でS K2に切られている。断面形態はレンズ状を呈し、上場幅50cm、深さ20cmを測る。埋土は砂粒を含んだ緑灰褐色土である。遺物は備前擂鉢の口縁部片や土師器の細片が出上している。

出土遺物（714・719・720）714は備前擂鉢の口縁部片である。端部は上方に立ち上がる断面三角形を呈し、内面には9条の横描条文を施す。719は瓦片。須恵質の焼成がなされている。720は土師器の皿の底部片。回転糸切り痕が残る。出土遺物などから中世以降に埋没したものと思われる。

3) 土坑 (S K)

S K 1 (第196図、図版127)

北区B2区に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は長軸36cm、短軸29cm、深さは33cmを測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は、緑灰褐色土である。遺物は土師器の茶釜の完形品が床面に伏せた状態で出土した。

出土遺物（第197図、図版128）土師器茶釜（722）口縁部の一部を僅かに欠くが、ほぼ完形品である。口縁部はほぼ直立し、端部は平坦で面をもち、やや内傾する。体部は偏平で全体に指頭圧痕が見られ、鉢下半部全体には煤が付着していた。器壁は底部のみやや薄いつくりになっている。

時期は茶釜の形態から14～15世紀に埋没したものと見られる。

S K 2

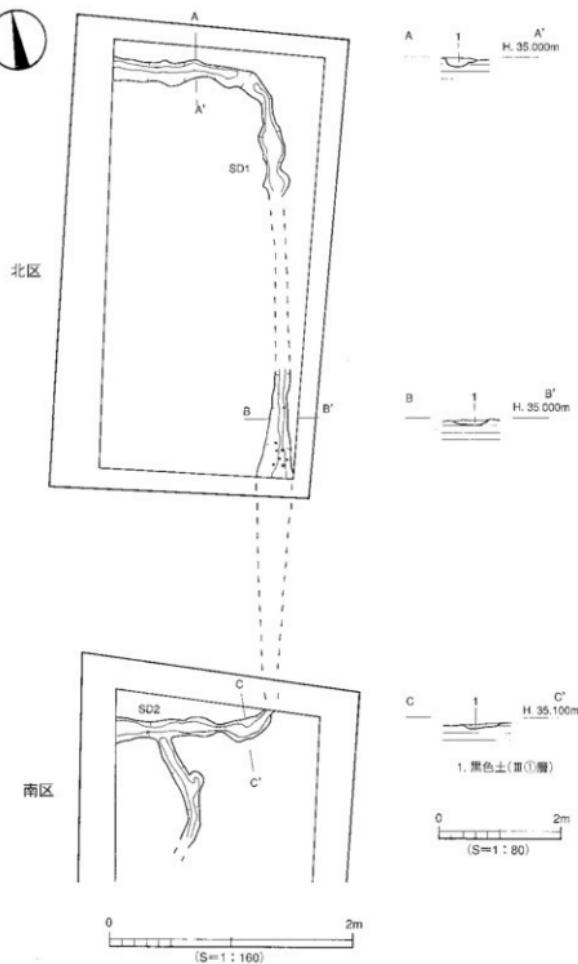
南区A6～7区に位置し、S D2を切る。西側～北側は調査区外へと続き、全容は検出できなかつたが、平面形態は南北に長い橢円形を呈するものと考えられる。規模は検出した範囲では長軸80cm、短軸40cm、深さ20cmを測っている。埋土は緑灰褐色土で、遺物は磨滅した土師器の細片が出土している。S K1や切り合い関係にある S D2との埋土の共通性から考えて中世以降に埋没したものと思われる。

〔3〕 その他の遺構と遺物

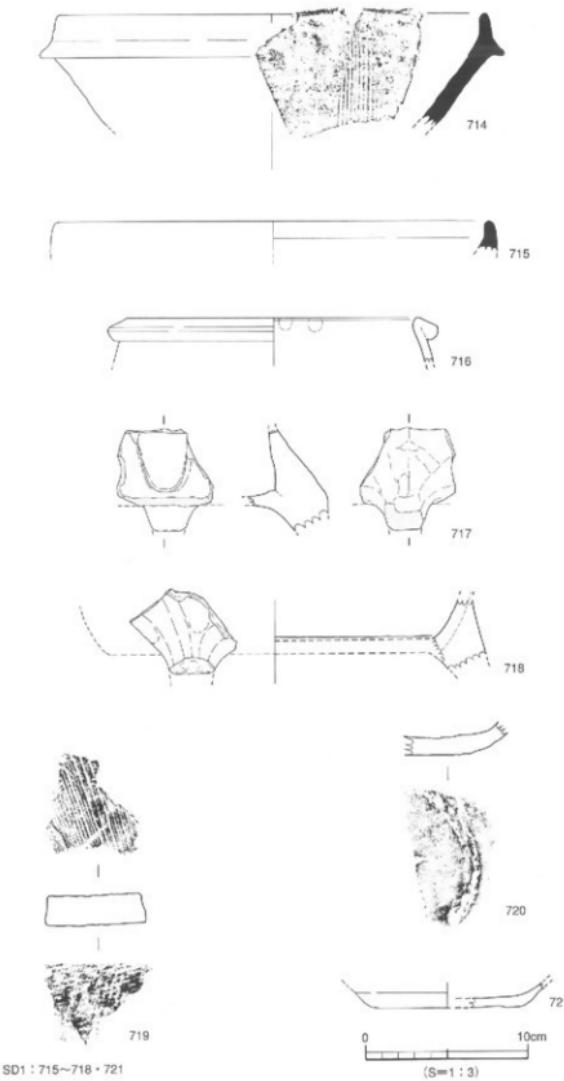
本調査において検出した遺構は柱穴134基と倒木址2基である。柱穴は全て第IV層上面からの検出である。

1) 柱穴 (S P)

これら柱穴の埋土は緑灰褐色と黒色のものとに分けられる。先に述べてきた溝や土坑などの所見や埋土の共通性などから埋没時期を考えると、緑灰褐色の埋土は古代以降、黒色の埋土は古墳時代以降に時期比定できる。



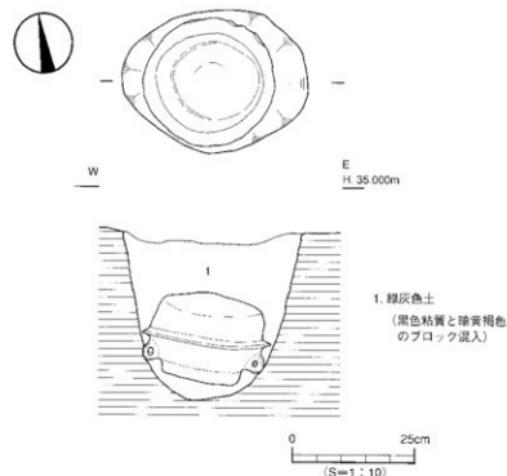
第194図 SD1-2測量図



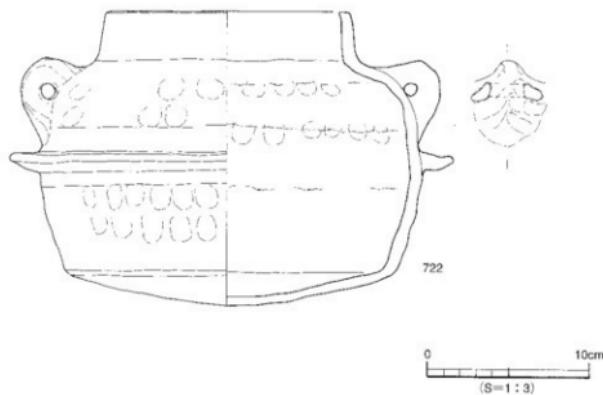
第195図 SD1-2出土遺物実測図

遺構と遺物

各柱穴内の遺物の出土はごく僅かで、その殆どは腐滅した土師器の細片で、全て緑灰褐色土の埋土上の柱穴よりの出土である。



第196図 SK1測量図



第197図 SK1出土遺物実測図

柱穴内出土遺物（第198図）土師器の皿の底部3点。723・724はいずれも平底で切り離しは回転糸切りによるものである。

2) 倒木址（S X）

倒木址（S X1・2）を2基確認している。これらの倒木の調査は調査期間の関係上、平面形態の規模と倒壊方向の認定をするにとどめ、完掘は行っていない。

S X 1

北区A2区に位置する。西側のプランを先行トレーニングで欠いているが、平面形態は東西に長い橢円形を呈するものと考えられる。規模は長軸300cm、短軸280cmで倒壊方向は南東である。

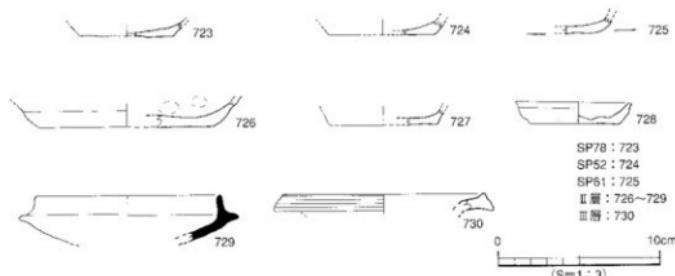
S X 2

南区C7区に位置する。平面形態は東側が調査区外に続くために、全容は検出できていないが、直径3mの円形を呈するものと考えられる。倒壊方向は南東である。

3) その他の遺物

第II層出土遺物（第198図、図版128）土師器の皿3点。726は外面ヨコナデ調整。727は内外面にナデ調整が見られる。底部は平底。728はやや上げ底の底部で、切り離しは回転糸切りによるものである。

第III層出土遺物（第198図）729は須恵器の坏身片。口縁部は内傾して立ち上がり、受部は水平にのび、端部はやや尖り気味に丸く仕上げられている。730は弥生の壺の口縁部片。縁部に2条の凹線を持つ。



第198図 SP・その他の出土遺物実測図

4. 小 結

今回検出した遺構の中で時期を特定できるものはない。ただし、遺構の埋没時期は二つに分類し、時期を推定することができる。一つは第III層包含層の黒色粘質土を埋土に持つもので、弥生後期～古墳後期の遺物が出土するものである。もう一つは第II層包含層の緑灰褐色土を埋土に持ち、古代～中世の遺物が出土するものである。

古墳時代の遺構と考えられるものはSD3～7である。遺物の出土状況と埋土から自然流路の可能性が強く、古墳時代後期以降に規模の大きな河川の氾濫があったことが考えられる。

古墳時代の遺構は溝5条であり、住居址は検出されなかった。しかし土師器や須恵器が出土しており、周辺地域に古墳時代の集落が存在していたと思われる。

古代～中世の遺構は掘立1、SD1・2、SK1・2がある。SD1と2は埋土、出土遺物、平面形態、検出位置関係などから、「コ」の字状になる同一の溝と考えられる。遺物は須恵質の瓦片や土釜の脚部片などが出土している。SD6の遺物出土状況と同様に時期に幅がみられる。性格は、樽味跡2次調査で確認された小規模な区画か、水田関連の施設と考える。

掘立1は、1×1間という小さい規模であり、簡易的な建物と考える。

今回の調査では掘立柱建物址、土坑、溝を検出した。とくに、溝SD1・2は、居住区の区画及び水田関連の溝と考えられ、周辺地域に集落が広がるものと思われる。

また、注目される出土遺物としては、SK1から完形品の土師器茶釜が出土している。茶釜は底部に煤の付着が見られ生活用品として、使用されていたものである。出土状況は床面より底部を上に向かって傾いた状態で出土している。これは非日常的であり、松山平野では類例がない。出土状況より、祭祀が行われた可能性が考えられる。また、茶釜は完形品であり、14～15世紀の茶釜を研究する上で一資料となる。

遺構・遺物一覧 一凡例一

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

遺構一覧は志賀、遺物観察表は大森が作成した。

(2) 遺物観察表の各掲載について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長(1～4)、多→「1～4mm大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表123 掘立柱建物址一覧

掘立	規模 (間)	方位	横行		縱行		床面積 (m)	時期	備考
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)			
1	1×1	東北	4.06	12.3	2.31	7	9.37	中世	

表124 溝一覧

(1)

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	A 1～C 6	レンズ状	17.5×0.5×0.2	灰黄褐色土	土器・須恵	中世以降	
2	B 7～8	レンズ状	5.0×0.5×0.2	灰黄褐色土	土器	中世以降	

枝松道路4次調査

溝一覧

(2)

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
3	C 8 ~ B11	直 状	14.0 × 0.4 × 0.2	黑色砂質土		古墳時代以降	SD4 を切る
4	C 10 ~ B11	レンズ状	6.7 × 0.4 × 0.15	黑色砂質土		古墳時代以降	
5	C 11 ~ A13	直 状	12.6 × 0.5 × 0.15	黑色砂質土		古墳時代以降	
6	C 7 ~ A12	舟 底 状	25.2 × 0.7 × 0.13	黑色砂質土	先史・須恵・土師	古墳時代以降	SD3 を切る
7	B 7	レンズ状	4.2 × 0.4 × 0.25	黑色砂質土		古墳時代以降	SD2・6 に切られる

表125 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平 面 形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	B 2	円 形	U 字 状	0.35 × 0.29 × 0.33	褐色土	土 坑	古 史	
2	B 6・7	円 形	レンズ状		灰黃褐色土		中世以降	SD2 を切る

表126 SD 6 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(m)	形 态・施 文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 燒 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
707	甕	口径(16.4) 残高 3.0	外反する口縁部。 U字縫部は尖り気味である。	ハケ(4~5本/cm) +ナデ	痕跡の為不明	乳白色	石・長(1) ○		
708	甕	口径(14.0) 残高 2.1	口縁部は尖り気味である。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色	石・長(1) ○		
709	甕	口径(12.0) 残高 4.1	内凹するU字縫部の端部は丸く仕上げる。	ナデ	ナデ	乳灰褐色 灰褐色	石・長(1) ○		
710	甕	口径 7.3 残高 2.3	頭部~体部にかけての小片。 剥きがあまい。	タタキ	凹頭痕	乳白色	石・長(1~2) △		
711	甕	口径(18.9) 残高 2.4 つ。	外反する口縫部の縫部は面を持ち 過ぎがある。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・黄褐色 乳白色	青(歩道) ○		
712	甕	口径(7.0) 残高 1.9	平底の小片。	ヘラケズリ +ナデ	ナデ	乳灰褐色 灰褐色	石・長(1) ○		

表127 掘立1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形 态・施 文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 燒 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
713	甕	口径 11.3 残高 2.8	U字縫部は尖り気味に丸い。 底部わずかに上げ底。 回転系切り底が残る。	痕跡の為不明	痕跡の為不明	乳白色	石・長(1~2) ○		128

表128 SD 1・SD 2 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形 态・施 文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 燒 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
714	瓶詰	口径(26.2) 残高 6.8	帶接縫線をり条施す。	豆板ヨコナデ	同様ヨコナデ	赤青灰色 青灰色	石絆(3) ○	SD2	128

出土遺物観察表

SD1・SD2 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)	油土 焼成	備考	圖版
				外 面	内 面				
715	盃鉢	口径(26.2) 残高 1.8	口縁端部を丸く仕上げる。 内面に模様あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	青灰色 灰色	石・長(1~2) ○	SD1	
716	羊	口径(18.0) 残高 2.9	口縁端部に下垂れの凸部が付く。 内面に指痕痕。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳黄色	石・長(1~2) ○	SD1	
717	釜	口径 6.2	三足付土釜の脚部。	ナデ	ヨコナデ	乳白色 乳黄色	石・長(1~2) ○	SD1	
718	釜	底径(20.0) 残高 4.3	三足上蓋の脚部。脚部との接合部分のみヨコナデしている。	ナデ	ヨコナデ	乳白色	石・長(1~2) ○	SD1	
719	瓦	小片	平瓦。	タタキ	素切り板	灰色	○	SD2	
720	瓦	残高 2.0	小片。	素切り板	磨滅の為不明	乳白色	少數(1~2) ○	SD2	
721	瓦	底径(8.7) 残高 1.5	平瓦。僅かにハラ切り痕を残す。	素切り板	磨滅の為不明	乳白色	石(1~2) ○	SD1	

表129 SK1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)	油土 焼成	備考	圖版
				外 面	内 面				
722	茶釜	口径 20.3 右側 17.9 左側 13.8	ほぼ直立に立ち上がる口縁部。 縁部は多く凹を持つ。外部は扁平で底部は浅い丸底。	①ヨコナデ ②ヨコナデ (指痕痕)	③ヨコナデ (指痕痕) ④ナデ	乳白色	薄焼 ○	深付巻	128

表130 SP 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)	油土 焼成	備考	圖版
				外 面	内 面				
723	皿	直径(5.5) 残高 0.8	小片。平底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳白色	砂焼 (1) ○	SP78	
724	皿	直径(6.6) 残高 0.6	小片。平底。 笠縁素切り。	ナデ	ナデ	乳白色 乳黄色	少數 (1) ○	SP52	
725	皿	残高 1.0	小片。笠縁下部に僅かに焼あり。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳白色	長(1~2) ○	SP61	

表131 その他の出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)	油土 焼成	備考	圖版
				外 面	内 面				
726	皿	直径(10.6) 残高 1.1	平底。	ヨコナデ	ヨコナデ (油頭既燒る)	乳白色 灰色	長 (1) ○	II 善	
727	皿	直径(6.5) 残高 0.9	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 灰褐色	長 (1) ○	II 善	
728	皿	直径 7.1 残高 5.5 底部 1.4	平底。素切り底あり。 体部2箇に枝あり。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	灰白色	石・長 (1) ○	II 善	128
729	環形	口径(14.0) 残高 2.8	上縁部の立ち上がりはやや内傾し、 端部は丸い。底部は水平にのびる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色	長 (1~2) ○	II 善	
730	壺	口径(12.0) 残高 1.0	上縁部に2条の内腹を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶色	石・長 (1~2) ○	II 善	

第16章　ま　と　め

今回の調査では先土器時代～縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代～中世の遺構と遺物を検出した。

〔1〕土　層

本調査では上層を8層確認した。以下、下部層より年代についてまとめを行う。

第Ⅸ層～第V層は無遺物層である。第VI層はAT火山灰であり1次堆積層と2次堆積層に分層できることが明らかになり（第4・17章）、第VI層以下の上層は23,000年以前の堆積層である。第IV層からは焼土が出土し、第IV層上面からは石器が出土している。第III②層はアカホヤ火山灰で、6,300年前の縄文時代早期の堆積層である。第III①層は無遺物層である。第III②層と第III①層は、放射性炭素による年代測定を行い、第III②層は5,000年前、第III①層は3,700年前の結果がえられた。なお、第III②層がアカホヤ火山灰であるため、第V層と第IV層はAT火山降下以降、アカホヤ火山灰降下以前の堆積層となる。第II②層は弥生土器、須恵器、土師器が出土していることより、古墳時代から古代の堆積層である。第II①層は現代の水田床土、第I層は現代の水田及び客土であった。

今回の調査では、アカホヤ火山灰層とAT火山灰層を検出し、特にAT火山灰層が1次堆積層と2次堆積層からなることを確認した。本例は、松山平野の旧石器文化研究の一資料となるものであり、重要な資料といえるだろう。

〔2〕先土器時代～縄文時代

今回検出した遺構・遺物にはピット1基と石器10点、焼土がある。

1) 遺構

ピットは2南区の第VI層上面で検出した。ピットは土層確認のためのトレーナーを掘削していた時に偶然検出したものであり、検出後周囲を拡張し他のピットの検出につとめたが、さらなるピットは確認できなかった。調査は時間的な関係で狭い範囲であったが、調査を調査区全域に行えば、幾つかの遺構が確認できるものと思われる。

2) 遺物

1区から6区までの第III②層中及び第IV層上面では石器10点が出土した。これらの遺物は形態より先土器時代末から縄文時代早期のものである。縄文時代早期以前の石器が一遺跡でアカホヤ火山灰にともなって多数出土するのは松山平野では初めてである（註1）。

1区と3区の第IV層中からは焼土を検出した。焼土の検出は第IV層中において、生活が営まれていたことを示す痕跡となるものである。

石器と焼土が確認されたことにより、本調査地には先土器時代～縄文時代早期の遺跡が存在したと想定される。松山平野では同時代の資料は初例であり重要な資料である。今後の周辺地域の調査には細心の注意をはらう必要があろう。

〔3〕弥生時代の遺構

本調査では、弥生時代に比定される遺構は堅穴式住居址19棟、溝16条、土坑11基である。

1) 住居址：弥生時代後期後葉から末までの堅穴式住居址は19棟である。住居址は、平面形態より円形と方形に分かれ、さらには規模により直径及び一边が7m以上を大型、4m以上を中型、4m未満



第231図 東本遺跡4次調査構造配置図

を小型として分類ができる。分類の結果、円形住居址には大型が2棟あり、方形住居址には大型が1棟、中型が5棟、小型が7棟ある。また、規模が明確でない方形住居址は4棟である。

①大型円形住居址にはS B203とS B302がある。

S B203とS B302は周壁溝と炉（副次的）をもつことを共通するが、主柱の構造と付帯施設に違いが見られる。主柱穴はS B203が2重に巡る構造であり、S B302は単純構造である。付帯施設ではS B203は外側の主柱穴から壁体に向う8条の小溝と周壁帶をもち、S B302は床面に凹地と貼床をもっている。

②大型方形住居址にはS B304がある。S B304は主柱穴と周壁溝をもっている。S B304は部分的な検出であり内部施設は定かではない。

③中型方形住居址にはS B401、S B403、S B502、S B601、S B602がある。5棟の住居址には主柱穴4本と周壁溝・炉がある。このうち、S B403とS B502の2棟には副次的炉がある。

④小型方形住居址にはS B202、S B204、S B205、S B301、S B303、S B501、S B603の7棟がある。このうちS B202、S B204、S B205、S B303、S B603の5棟からは炉を検出し、また、6棟からは主柱穴と周壁溝は検出されなかった。ただし、S B303では主柱と支柱を1本づつ検出している。

以上より、本調査で検出した住居址には、規模と内部構造に一定の関係があることがわかる。

円形住居址は大型に限られ、方形住居址は面積に違いがみられ、大型・中型・小型がある。また、大型住居址は主柱穴と周壁溝をもち、中型は主柱穴4本と周壁溝と炉をもち、小型は炉をもつが、主柱穴と周壁溝をもたないことになる。のことより、規模と主柱穴・周壁溝・炉の施設には一定の関係が求められるのである。

次に、上記の結果をもとにし、住居址の規模が確定できなかった4棟について分類を試みる。

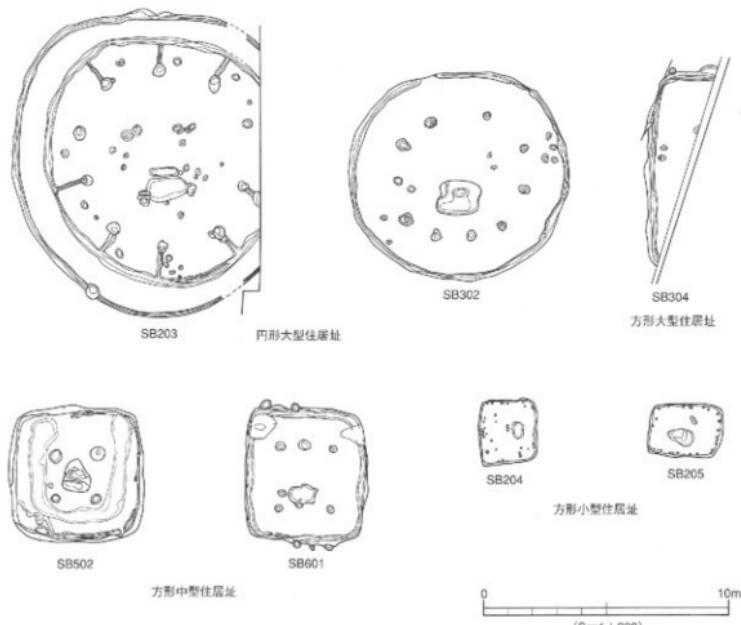
⑤中型以上と思われる方形住居址にはS B201、S B305、S B402、S B404の4棟がある。S B201、S B305の2棟は検出長が4mを測り、周壁溝をもつことより中型以上と認定し、S B402は検出長は3.2mを測るにとどまるが、周壁溝を検出したため中型以上と認定する。S B404は、検出した2ヶ所のコーナー間の長さは4.4mであり、主柱穴は3基を検出したことより中型以上と認定する。よって、規模が明確でない方形住居址は全てが中型以上の住居址になるものである。

2) 溝：溝は16条を検出した。S D203の北側からは弥生時代の遺構を検出していないために、S D203は、本調査で検出した弥生時代遺構の北端に位置することになる。S D203からは、土器が多数出土しており、時期は弥生時代後期に比定する。溝底には砂の堆積もなく、土器も磨滅を受けていないため流路ではなく、集落の境界をなす区画的な役割をもつ溝と考えている。

S D304とS D519はL字状に折れ曲がる溝であり、小さな範囲を区画する溝と考えられる。他の13条の溝は断面形態がレンズ状である。遺物の出土が少なく時期と性格はわからない。

3) 土坑：土坑は11基を検出した。S B302の北側で検出したSK305とSK306の2基は、円形で径70cmを測り、弥生時代後期の完形の鉢形土器が出土している。また、S B502の南東に位置するSK511（長軸50cm、短軸27cm）からは弥生時代後期後葉～末の高杯形土器が鉢形土器2点の上にかさなる状態で出土している。3基は住居に近く、規模が小さく、完形品の土器が出土することより、住居に伴う収納施設と考える。

その他土坑には円形7基、方形1基がある。8基の土坑からは遺物が出土していないために、土坑の時期と性格はわからない。



第232図 壁穴式住居址の規格

表188 東本遺跡4次調査の壁穴式住居址の規格と構造

平面形	規格	主柱	周壁溝	戸	副次的戸
円形	大 焱	○	○		○
方 形	大型	○	○		
	中型	○(4)	○	○	○(2戸)
	小型			○	

〔4〕弥生時代の遺物

ここでは、SB203、SB502、SD203から出土した遺物について検討する。

1) 上器：SB203出土品は壺形土器はタタキ痕が底部まで残り、壺形土器は口縁端部が「へ」字状を呈するものである。支脚形土器には角状突起をもつものが出土している。よって、SB203出土資料は弥生時代後期末に比定されるものである。

SB502出土の壺形土器はタタキ痕は見られず、底部は平底である。これは、弥生時代後期後葉～末の特徴を示すものであり、SB502出土資料は同時期に比定される。

SD203出土品は、壺形土器の底部は球形でタタキ痕が顕著に残る。壺形土器は底部にタタキ痕が

残り、口縁部端部が「へ」字状を呈するものがある。支脚形土器には、角状突起をもつものが出土している。よって、S D203出土資料は、弥生時代後期末に比定されるものである。

これら出土遺物は、現在までに松山平野ではまとまって出土した例が少ない弥生時代後期後葉～末の遺物であり、松山平野の弥生後期の土器編年を捕捉する好資料である。

2) 石器：石鎌・石庵丁・石錘・砥石が出土している。弥生時代後期末のS B302からは石鎌1点、S B203からは石庵丁2点と有溝石錘1点が出土し、弥生時代後期後葉～末のS B502とS B603からは石庵丁1点、S B502からは砥石が2点出土している。弥生時代後期末の住居址出土の石器は松山平野では出土例が少なく、本資料は同時期の石器研究の貴重な資料である。

3) 青銅器：弥生時代後期末のS B302からは破鏡が出土している。推定直径14.2cmを測り、縁は三角縁に近い斜縁である。破鏡は、文様と直径より方格規矩鏡か内行人花鏡と考えられる。松山平野での破鏡の出土例は、2例が報告されている。伊予郡砥部町水満田遺跡7次調査地（註2）と松山市文京遺跡10次調査地（註3）である。2例はともに包含層からの出土であり、住居址内からの出土例は本資料が初例となる。

4) 鉄器：弥生時代後期末の住居址からは鍬・刀子・鉄片が出土している。石器と同じく同時期資料は出土が少なく、当該研究の貴重な資料といえる。

〔5〕弥生時代の集落構造

本調査で検出した弥生時代の住居を出土遺物より検討するとS B403、501、502、601、602、603は後期後葉～末の竪穴式住居址であり、S B201、202、203、204、205、301、302、303、304、401、404は、後期末の竪穴式住居址と考えられる。住居址には時間的な差が見られ、二時期のものに分かれる。

集落の範囲は、後期後葉～末の時期では、4南区から6北Cの範囲で住居址を検出しており、後葉から末にかけての集落は調査地の南側にあると考えられる。後期末の時期は、2北区から4北区で住居址を検出している。北限は2北区S D203とするが、南限は溝などの境界をばす造構がなく明らかでない。

次に住居址の組合せを見る。後期後葉～末の住居址は、5区・6区で検出され方形中型と方形小型がある。後期末は、3区に大型円形住居址1棟（S B302）、大型方形住居址1棟（S B304）、小型方形住居2棟（S B301・303）が一組となる1群があり、2区には大型円形住居址S B203、中型以上の方形住居址S B201、小型方形住居址S B202・204が一組となる1群がある。よって、後期末には2区と3区に各々円形大型1棟、方形中～大型1棟、方形小型2棟が一組となる単位があることが分かる。また、出土物より2・3区の住居址群は同時期のものと考えられ、東本の地域には幾つかの住居単位があるものと考えられる。さて、2群の中心を占める円形大型住居址は、S B203は石垂・石庵丁などの農工漁具が出土し、S B302は青銅鏡、線刻上器、高环形土器、ガラス玉などの祭祀的遺物が出土しており遺物に違いがみられる。このことからS B302は当地区の弥生時代末における集落の中心的な位置をしめる住居址と考える。

集落の変遷について考える。東本遺跡は4区中央に東西に走る谷があり、1～3区、5～6区は各々が微高地でなる。今回検出された住居址は後葉～末のものは4区の南にある微高地上にあり、末のものは北にある微高地上にある。よって、住居域は南から北に移動したものと推定される。ただし、2区の北東には後期後葉～末の住居址を検出した桑原高井遺跡があり、この住居址群の移動は今後の調査により検討したい。

〔6〕古墳時代以降

1) 古墳：明確な古墳時代の遺構は、6世紀末のS D301に限られる。古墳時代以降と考える遺構は、掘立柱建物址3棟と溝27条である。なお、古墳時代以降の竪穴式住居址は検出されていない。今回の調査によって、本調査地は古墳時代から古代の間には集落域ではあるが、竪穴式住居址が集中するような住居址域ではない事が明らかになった。

出土遺物には、須恵器・土師器・石器・鉄器がある。この中で特筆するものは、溝S D503（古墳時代～古代）出土の鉄製の摘鏃である。摘鏃の出土は松山平野では、伊予郡松前町出作遺跡（註4）で2例報告されているだけであり、鉄製品を研究する上での一資料となるものである。

2) 中世：中世と特定できる遺構は検出されなかった。ただし、遺物がわずかに出土したことにより、本調査地一帯は中世においても集落経営がなされたものと考える。

出土遺物は土師器が出上している。その中で枝松遺跡S K1（14～15世紀）からは茶釜が出土している。この茶釜は松山平野では検出例がないものであり、土師器茶釜を研究する上での一資料となるものである。

〔7〕柱 穴

ここでは各調査区で検出した柱穴について時代ごとに整理を行う。弥生時代の柱穴埋土には3種類あり、黒色土、黒色土に略茶色土が混じる土、黒褐色土であることを確認した。古墳時代の柱穴埋土は灰黄色土を埋土にもつものであり、中世の柱穴埋土は明灰褐色土、黒色土に明褐色土が混じる土、茶褐色土、茶灰色土である。ただし、埋土が上記のものとは異なり時期が特定できない柱穴がある。今回の調査で明らかとなった柱穴埋土と時期の関係が確かなものであるかは、今後の周辺調査で比較検討し、究明していきたい。

〔8〕自然科学分析

今回の調査では、①火山灰（テフラ）、②放射性炭素、③珪藻、④珪酸、⑤樹種、⑥花粉の自然科学分析を行った。以下、分析の結果を略記する。

①火山灰 本調査地では2種類の火山灰を検出し、第VI層は始良Tn火山灰（A T、約2.2～2.5万年前）、第III②層は鬼界アカホヤ火山灰（K・An、約6,300）であることを確認した。特にA T火山灰は、野外調査において1次堆積層と確認できた。

②放射性炭素年代測定 基本層位第III②層は約5,000年前の年代がえられた。

③珪藻 本調査地は、第VI層1次堆積層では、淡水湖沼沼澤環境であり、2次堆積層の風・疊・砂層では陸化したものと推定される。

④珪酸 基本層位の第V層より下部はイネ科植物の生育には適さない環境であり、第IV層はヨシ属が繁茂する湿地、第III層は森林で覆われたような状況ではなく開かれた環境であったことがわかった。また、弥生後期後葉～末の住居址の周辺では、イネやムギ類の栽培が行われていたことが判明した。

⑤樹種 弥生時代末に本調査地周辺には、暖温帶性の照葉樹林が分布していたことがわかった。

⑥花粉 弥生時代末の住居址からはヨモギ属の花粉が検出され、周辺地が乾燥した環境下であることが判明した。

これらの分析結果は、周辺の調査が行われ資料が充実すれば、旧石器～弥生時代の古環境復元が可能である。

ま と め

(註)

- (1) 1995年度の(財)愛媛県埋蔵文化財調査センターでは愛媛県伊予郡双海町東峰遺跡で3万年前の石器がアカホヤ火山灰とセットで出土している。
- (2) 宮崎泰好 1991 「水滴田遺跡調査報告書-6・7次調査-」砥部町教育委員会
- (3) 愛媛大学埋蔵文化財調査室 1991 「文京遺跡10次調査」愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ
- (4) 谷若倫郎 1993 「出作遺跡Ⅰ」松前町教育委員会

表189 東本遺跡4次調査地及び周辺遺跡の竪穴式住居址一覧

(1)

遺構名 (S番)	時 期	規 格	平面図	規 横(m) 長軸 短軸	面 横(m) 突出面積 想定面積	壁 高 (m)	主柱穴 数			内 部 施 設				備 考
							内	外	総	高床部	貼り床	炉	窓	
201	古 砂 貝付木	中以上 方 形	(1.0) (0.75)	0.14	-	0.22						○	○	トレンチに落ちる。薄瓦2枚に 底付。縫合は4cm弱。
202	古 砂 灰付木	小 正六角形	2.90	2.90	11.31	-	0.07					○		小六角形台石。
203	古 砂 灰付木	大 门 形	11.50	(9.30)	72.40	75.39	0.60	4	10	14		○	○	性から薄瓦2枚に向かって少 量有り。薄瓦2枚。
204	古 砂 灰付木	小 開丸方 形	2.52	2.22	5.59	-	0.16					○		
205	古 砂 灰付木	小 反方 形	2.88	2.11	6.08	-	0.15					○	○	
301	古 砂 灰付木	小 方 形	3.70	(1.90)	5.50	-	0.22	-	(1)	(1)	○			
302	古 砂 灰付木	大 门 形	8.87	8.36	68.29	-	0.20	-	10	10	○	○	○	トレンチに落ちる。壁底付に袋く。 底付。
303	古 砂 灰付木	小 長方形	3.80	2.91	11.06	-	0.17	-	2	2		○		底付。調査十箇所。系生土。
304	古 砂 灰付木	大 方 形	7.06	(3.30)	8.12	(6.21)	0.30	-	(1)	(1)		○		下部のみS D30に切られた。
305	古 砂 灰付木	大 月 形	-	-	-	-	0.40					○		高瓦2枚とし。
401	古 砂 灰付木	中 月 形	4.45	(3.90)	17.36	-	0.27	-	(3)	(3)	○	○	○	トレンチに0.1m未満在貯蔵での 壁付。縫合は4.5cm。
402	古 砂 灰付木	中 月 形	(3.20)	(2.07)	7.26	-	0.18					○		調査X軸に起く。
403	古 砂 灰付木	中 開丸方 形	4.90	4.65	22.79	-	0.17	-	4	4	○	○	○	調査X軸に起く。
404	古 砂 灰付木 底付 - 4 底付壁付	中以上 方 形	(4.40)	(4.20)	-	-	0.11	-	(3)	○				ほとんど復元できず、裏裏区分へ 壁付。
501	古 砂 灰付木	小 帯えん形	3.00	(2.29)	6.87	(8.10)	0.12							
502	古 砂 灰付木	中 帯えん形	5.15	5.10	29.43	-	0.70	-	4	4	○	○	○	調査X軸へ起く。
601	古 砂 灰付木	中 带えん形	5.40	4.90	26.16	-	0.32	-	4	4	○	○	○	周圍に日々状の溝有り。大整縫合 と複数点。
602	古 砂 灰付木 底付 - 1 底付壁付	中 開丸方 形	5.00	(4.20)	33.55	(21.20)	0.28	-	4	4	○	○	○	
603	古 砂 灰付木	小 陰丸方 形	3.63	2.82	19.24	-	0.06					○	○	トレンチに落ちる。

東本遺跡4次調査地及び周辺遺跡の竪穴式住居址一覧

(2)

遺構名	規 格	時 期	平面図	規 横(m) 長軸 短軸	面 横(m) 突出面積 想定面積	壁 高 (m)	主柱穴 数			内 部 施 設				備 考
							内	外	総	高床部	貼り床	炉	窓	
東本遺跡2次	S B01	古 砂 灰付木	方 形	30.0	9.7	76.20	-	0.10	4	6	10	○	○	
+	S B02	古 砂 灰付木	方 形	30.0	7.2	64.80	-	0.30	1	6	7	○	○	壁穴。
東本遺跡3次	S B01	古 砂 灰付木	方 形	4.7	3.5	16.45	-	0.10	-	(5)	(5)			周辺に瓦片穴。
底付前型跡跡	1	ワ サ ス	方 形	8.6	7.9	53.46	-	0.20	2	9	11	○		主柱穴間に小溝有り。
+	2	ワ サ ス	方 形	2.3	3.0	9.00	-	0.05	-	2	2			
底付前型跡跡	S B01	古 砂 灰付木	内丸方 形	5.7	5.1	29.20	-	0.32	(1)?	(6)?	(7)?	○		人口・凹面・溝入り・ビツ ト溝有り。
+	S B02	古 砂 灰付木	方 形	8.1	7.1	50.50	-	0.20	1	6	7	○	○	戸口・土坑有り。
+	S B04	古 砂 灰付木	丸方 形	5.8	5.5	31.96	-	0.07	-	4	4			壁面部分に柱上を筋状に付けて いる。二段の施設ドア。
+	S B05	古 砂 灰付木	方 形	3.8	2.6	9.88	-	0.02	-	-	-			5.5才の付随施設、横穴は中 央に位置する。
底付後跡3次	S B1	古 砂 灰付木	開丸方 形	(3.4)	(6.0)	(22.66)	(25.20)?	0.20	(1)?	4	5 (5)?	○		周辺区画へ接く。
底付後跡5次	S D1	古 砂 灰付木	方 形	(3.2)	(4.0)	(17.60)	(20.80)	0.15	-	4	4			周辺に接らぬ構造です。

(-) 内は無計長 () 内の面積は+ a m²

○は既次の事

第17章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 東本遺跡4次調査の土層とテフラ

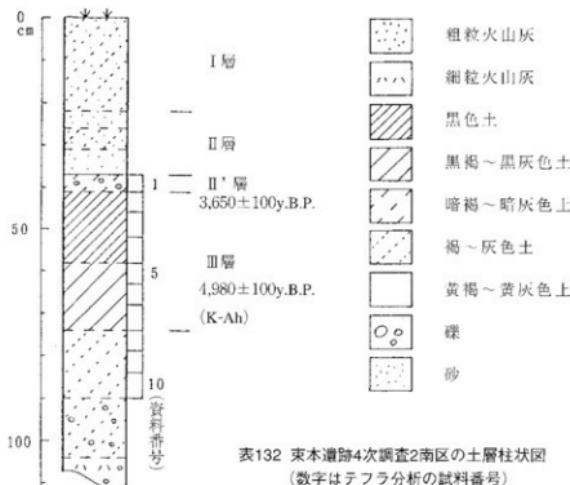
1. はじめに

松山市域には、姶良カルデラ、鬼界カルデラなど九州地方の火山から噴出したテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が多く分布している。これらのテフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされているものがあり、それら示標テフラとの層位関係を求ることにより、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代に関する資料を収集できるようになっている。そこで東本遺跡においても地質調査、火山ガラス比分析さらに屈折率測定を合わせて行い、示標テフラの層位を明らかにして、遺跡の土層の形成年代に関する資料を求ることになった。調査の対象となった地点は、2南区、1区北壁、5区B、5区C、6区Aの5地点である。

2. 土層の層序

(1) 2南区

ここでは、亜円礫混じり黄色ガラス質細粒火山灰層（層厚3cm以上、礫の最大径3mm以上）の上位に、下位より亜円礫混じり灰褐色土（層厚14cm、礫の最大径6mm）、灰褐色土（層厚16cm）、黒灰色土（層厚16cm、III層）、黒色土（層厚17cm、III層）、礫混じり暗灰色土（層厚4cm、礫の最大径3mm、II'層）、砂混じり黄灰色土（層厚6cm）、砂礫混じり灰色土（層厚5cm、礫の最大径3mm）、砂礫混じり黄灰色土（層厚4cm、以上II層）、灰色沙質土（層厚22cm、I層）が認められた（表132）。



(2) 1区北壁

ここでは、下位より黄灰色砂層（層厚15cm以上）、砂混じり褐色粘質土（層厚18cm）、成層したテフラ層、黄褐色粘質土（層厚14cm）、礫混じり黄色土（層厚14cm、礫の最大径17mm、VI層）、灰色がかった暗褐色土（層厚14cm、V層）、褐灰色土（層厚11cm、IV層）、黒褐色土（層厚15cm、III②層）、黒色土（層厚9cm、III①層）、暗灰色土（層厚6cm、II層）、盛土（層厚10cm、I層）が認められた（表133）。

これらのうち成層したテフラ層は、下位より黄白色細粒火山灰層（層厚0.7cm）、褐色粗粒火山灰層（層厚6cm）、黄灰色細粒火山灰層（層厚8cm）から構成されている。これらのうち上部2層の層界は漸移的である。このテフラ層は、層相から約2.2～2.5万年前に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰（AT、町田・新井、1976）に同定される。

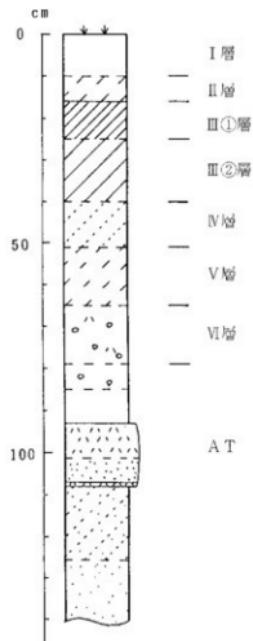
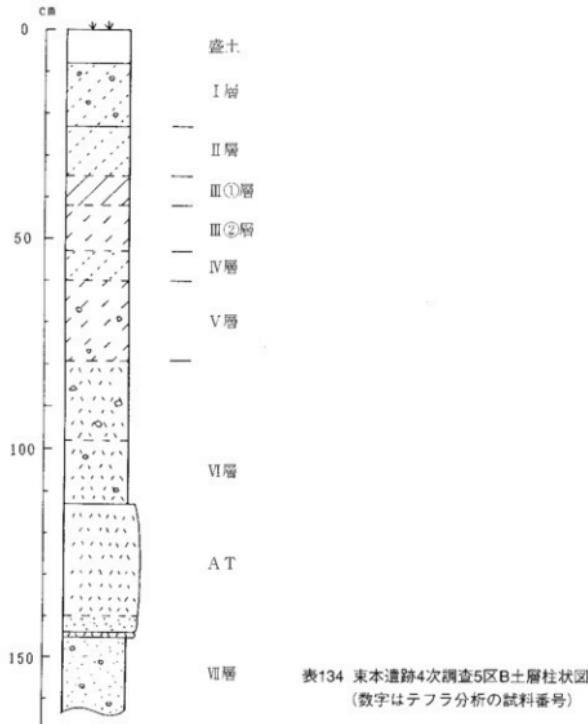


表133 東本遺跡4次調査1区北壁土層柱状図
(数字はテフラ分析の試料番号)

(3) 5区B

ここでは、亜円礫混じり灰色砂層（層厚18cm以上、礫の最大径37mm以上）の上位に、下位より成層したヒテフラ層、礫混じり黄色細粒火山灰層（層厚15cm、礫の最大径8mm）、礫に富む黄色細粒火山灰層（層厚19cm、礫の最大径8mm）、暗褐色粘質土（層厚19cm、V層）、灰褐色土（層厚7cm、IV層）、褐色がかった暗灰色土（層厚11cm、III②層）、黒褐色土（層厚6cm、III①層）、礫混じり褐灰色土（層厚12cm、礫の最大径6mm、II層）、礫混じり灰色土（層厚12cm、礫の最大径6mm、I層）が認められる（表134）。

これらのうち成層したヒテフラ層は、下位より黄色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、褐灰色粗粒火山灰層（層厚4cm）、黄色細粒火山灰層（層厚27cm）から構成されている。これらのうち上部2層の層界は漸移的である。このヒテフラ層も、層相からATに同定される。



(4) 5区C

この地点では、亜円礫混じり灰色砂礫層（層厚8cm以上、礫の最大径45mm）の上位に、下位より成層したテフラ層、礫混じり黄色細粒火山灰層（層厚7cm、礫の最大径5mm）、礫に富む黄色細粒火山灰層（層厚15cm、礫の最大径7mm）、暗褐色粘質土（層厚15cm、V層）、灰褐色土（層厚14cm、IV層）、褐色がかった暗灰色土（層厚12cm、III②層）、黒褐色土（層厚11cm、III①層）、黄褐色土（層厚3cm、II層）、礫混じり灰色土（層厚11cm、礫の最大径4mm、I層）が認められる（表135）。

これらのうち成層したテフラ層は、下位より黄色細粒火山灰層（層厚0.4cm）、褐色火山灰層（層厚25cm）から構成されている。このテフラ層も、層相からATに同定される。

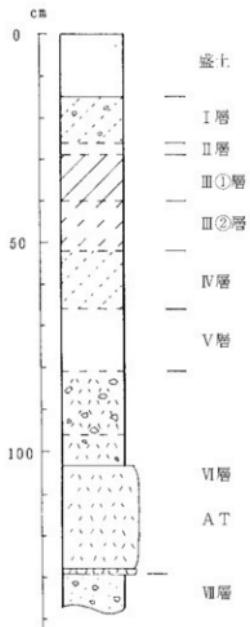


表135 東本遺跡4次調査5区C土層柱状図
(数字はテフラ分析の試料番号)

(5) 6区A

ここでは、亜円礫混じり灰色砂礫層（層厚16cm以上、礫の最大径51mm）の上位に、下位より成層したテフラ層、礫をわずかに含む黄色細粒火山灰層（層厚13cm）、礫に富む黄色細粒火山灰層（層厚12cm、礫の最大径8mm、以上VI層）、黒褐色粘質土（層厚12cm、V層）、礫混じり灰褐色土（層厚14cm、礫の最大径6mm、IV層）、暗褐色土（層厚7cm、III②層）、礫混じり黄灰色土（層厚6cm、礫の最大径3mm、II層）、砂混じり灰色土（層厚12cm、礫の最大径5mm、I層）が認められる（表136）。

これらのうち成層したテフラ層は、下位より黄色細粒火山灰層（層厚0.5cm）、褐色火山灰層（層厚24cm）から構成されている。このテフラ層も、層相からATに同定される。

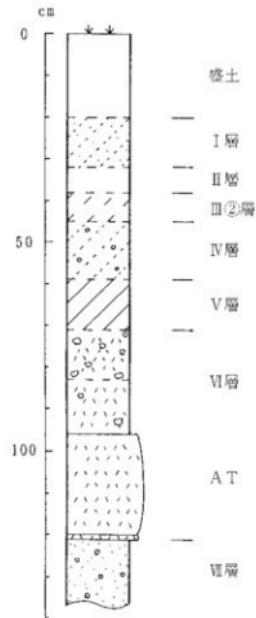


表136 束本遺跡4次調査6区A土層柱状図
(数字はテフラ分析の試料番号)

3. 火山ガラス比分析

(1) 分析試料と分析方法

2南区において5cmごとに採取された試料(表132)のうちの5点について、火山ガラスの形態別比率を求める火山ガラス比分析を行い、肉眼で確認できない示標テフラの降灰層準を求めるにした。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析筒により1/4~1/8mmの粒子を簡別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの形態別組成を求める。

(2) 分析結果

分析結果をダイヤグラムにして表137に、その内訳を表138に示す。最下部の試料番号9に最も多くの火山ガラスが認められたが、透明で平板状のいわゆるバブル型ガラスがほとんどで、下位のATに由来するものと考えられる。試料番号6には、比較的多くの透明バブル型ガラス(6.8%)のほか淡褐色型ガラス(0.8%)が認められた。またその下位の試料番号7についても同様な傾向が認められた。従って試料番号6あるいは7の層準に、透明や淡褐色のバブル型ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準の可能性が考えられる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

示標テフラとの同定のための資料を増やし、精度向上させるために、火山ガラスに富むテフラの降灰層準の存在が指摘された2南区の試料番号6について、位相差法による屈折率測定(新井, 1972)を行った。

(2) 測定結果

火山ガラスの屈折率(n)は1.509~1.513である。重鉱物としては、斜方輝石や單斜輝石さらに磁鉄鉱がごく少量含まれている。この火山ガラスは、その色調、形態、屈折率、さらに層位などから、約6,300年前に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(町田・新井, 1978)に由来すると考えられる。



表137 東本讃跡4次調査2南区の火山ガラス比ダイヤグラム

表138 東本遺跡4次調査2南区における火山ガラス比分析結果

試料	Bw(Tr)	Bw(Pb)	Bw(Br)	Md	Pm	その他	合計
5	2	0	0	0	0	248	250
6	17	2	0	0	0	231	250
7	12	1	0	0	0	237	250
8	9	1	0	2	0	238	250
9	23	0	0	3	0	224	250

数字は粒子数。Bw(Tr)：バブル型（透明）、Bw(Pb)：バブル型（淡褐色）、
Bw(Br)：バブル型（褐色）、Md：中間型、Pm：軽石型。

5. 小 結

松山市東本遺跡4次調査の発掘調査区において、土層の形成年代に関する資料を収集するために、地質調査、火山ガラス比分析さらに屈折率測定を合わせて行った。その結果、VI層下部に始良Tn火山灰（AT、約2.2～2.5万年前）が認められた。またⅢ層の中部あるいは下部付近に鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約6,300年前）の降灰層準があると考えられた。

〔文献〕

- 新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究、第四紀研究、11, p.254-269。
 町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—、科学、46, p.339-347。
 町田 洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラー鬼界アカホヤ火山灰、第四紀研究、17, p.243-263。
 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス、東京大学出版会、276p.

II. 放射性炭素年代測定結果

2南区地点の土壤試料について年代測定を行った。その結果を表139に示す。なお、年代値は1950年よりの年数（B.P.）である。

年代値の算出には¹⁴Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。また、付記した誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代である。また、試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値（B.P.）として表示してある。また、試料の β 線計数率と現在の標準炭素（MODERN STANDARD CARBON）についての計数率との差が 2σ 以下のときは、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C} \%$ を付記してある。

表139 放射性炭素年代測定結果

試料	層準	種類	年代値	コードNo.
No.1	Ⅲ層上面	土壤	3,650±100 (1700B.C)	GaK-17985
No.2	Ⅲ層下部	土壤	4,980±100 (3030B.C)	GaK-17986

(学習院大学理学部年代測定室)

III. 東本遺跡4次調査地における珪藻分析

1. はじめに

珪藻は、珪酸体の殻を持つ顕微鏡サイズの单細胞藻類である。珪藻類全体の分布域は淡水域から海水域にわたるが、個々の種は様々な環境要因に適応をみせ、それぞれ特定の生息場所を持つ。珪藻殻の化石は、水成堆積物中から普遍的に多産し、また化石群集の種の組成は堆積環境をよく反映するため、古環境の復元の指標としてよく利用してきた。ここでは、1区北壁から得られた計4試料について珪藻分析を行い、堆積古環境の推定および復元を行う。

2. 分析方法

土壤から珪藻分析用に採取した試料を風乾後、秤量する。この試料に約15%の過酸化水素水を加え加熱し、有機物の分解、漂白および一般堆積物と珪藻殻の分離を行う。反応終了後蒸留水を注ぎ、遠心分離をかけて上澄みを捨てることにより珪藻殻の濃集を行う。この操作を数回繰り返した後、適當な濃度に調整した珪藻懸濁液0.5ml程度をカバーガラスに滴下し乾燥させる。乾燥した試料上にブリュウラックス等の封入剤を滴下し、スライドグラスに張り付け永久プレパラートを作成する。

検鏡は、油浸1000倍で行った。珪藻化石群集の組成を把握するために、メカニカルステージを用いて任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、珪藻殻が半分以上破損したものについては計数・同定は行っていない。珪藻の同定については、Hustedt (1961~1966)、K. Krammer & Lange-bertalot (1985~1991)などを参考にした。また古環境の復元のための指標としては、小杉 (1989)、安藤 (1990) の環境指標種群や黒沢 (1993) ほかを主に参考にした。

3. 結 果

珪藻化石の産出が認められたのは、試料2~4の3試料である。それら産出した珪藻化石の内容は、汽水種が7属8種、淡水生種が21属15種であった。この珪藻化石の産出状況の層位の変化について環境指標種の産出に着目し、分帶の設定を行った。その結果、下位層よりⅠ~Ⅲ帯に設定した。Ⅰ帯は淡水生種によって、Ⅱ帯は汽水種および淡水生種の産出によって、Ⅲ帯は無産出によって区分される。以下に各分帯ごとの特徴を述べ、推定される堆積環境について述べる。(表140・141、第199図)

[I 帯]

試料3および4からなる。ここでは中～下流性河川指標種群〔K〕の*Melosira varians*、*Synedra arcus*、湖沼浮遊性指標種群〔M〕の*Cyclotella comta*、*C. stelligera*、*Melosira granulata*、湖沼沿沢湿地指標種群〔N〕の*Fragilaria construens*、*Melosira ambigua*、*M. distans*の特徴種からなる。完形率は60%程度と淡水湖沼沼澤において典型的な値を示している。

のことから、淡水水路を有する淡水湖沼沼澤環境が展開したと推定される。また、*Hantzschia amphioxys*が高率で産出することから、大型植物群落がかなり水域に侵入した水深のごく浅い水域と考えられる。

[II 帯]

汽水砂質干潟指標種群〔D2〕の*Achnanthes haukiana*や*Navicula salinarum*が認められる。他はI帶とほぼ同様の淡水生種からなる。

この*Achnanthes haukiana*や*Navicula salinarum*などの汽水種とI帶のような湖沼沼澤環境を示唆するような群集組成はあまり一般的ではなく、水田などの耕作地およびその周辺に認められる場合があるが、確証はない。

[III 帯]

珪藻化石が全く産出しない。のことから、この層準においては陸化したものと推定される。

〔参考文献〕

- 安藤一男(1990) 淡水産糸藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42-2, p.73-109
 小杉正人(1989) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, (1), p.1-20
 黒澤一男・村田泰輔・鈴木里江・小杉正人(1993) 国分谷の古環境の変遷. 松戸市立博物館, p.63-90
 Krammer, K. and H. Lange-Bertalot (1986) Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa, 2(1), p.1-876.
 Krammer, K. and H. Lange-Bertalot (1988) Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa, 2(2), p.1-596.
 Krammer, K. and H. Lange-Bertalot (1991) Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa, 2(3), p.1-576.
 Krammer, K. and H. Lange-Bertalot (1991) Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa, 2(4), p.1-436.

表140 束本遺跡における珪藻化石一覧表
(各環境指標群の分類は、小杉(1989b)、安藤(1990)に基づく)

分類群	種群	1	2	3	4
Achnanthes brevipes	?	—	1	—	—
A. haukiana	D1	—	3	—	—
Amphora ventricosa	?	—	1	—	—
Gyrosigma spp.	?	—	5	—	—
Melosira sp.-1	?	—	2	—	—
Navicula salinarum	D2	—	2	—	—
Nitzschia punctata	E2	—	1	—	—
Thalassiosira bramaputrac	?	—	6	—	—
Achnanthes exigua	W	—	1	10	12
A. lapidosa	W	—	3	5	6
A. lapponica	W	—	—	7	5
A. lineariformis	J	—	3	2	2
Amphora ovalis	W	—	8	11	12
A. ovalisvar.libyca	W	—	8	6	10
Anoeneonis vitrea	W	—	10	8	9
Calonectris nipponica	W	—	—	1	1
C. ventricosa	W	—	—	3	3
Cyclotella comta	M	—	7	11	15
C. stellifera	M	—	5	12	15
Cymbella amphioxys	W	—	3	8	6
C. lancolate	W	—	5	8	7
C. minuta	W	—	1	8	9
C. obtusa	W	—	2	13	11
C. tumida	W	—	2	2	—
Diploneis finnica	W	—	2	2	—
D. ovalis	W	—	2	3	3
Epithemia sorae	W	—	2	1	—
Eunotia faia	W	—	3	1	—
E. monodon	W	—	1	3	—
Fragilaria constiens	N	—	13	10	12
F. leptostauron	W	—	5	1	—
Gomphonema biceps	W	—	1	3	3
G. parvulum	W	—	3	4	4
Gyrosigma spp.	?	—	2	1	—
Hantzschia amphioxys	Q	—	6	11	10
Melosira ambigua	N	—	21	13	12
M. distans	N	—	10	5	6
M. granulata	M	—	6	16	16
M. italica	W	—	12	3	—
M. varians	K	—	11	2	2
Navicula cuspidea	W	—	—	1	—
N. protracta	W	—	21	1	—
N. radiosa	W	—	1	1	3
N. tokyoensis	W	—	1	5	—
N. viridula	W	—	1	1	—
Nicidium iridis	O	—	1	2	6
Nitzschia angustata	W	—	1	2	—
Pinnularia borealis	Q	—	1	2	3
P. nodosa	O	—	11	5	2
Rhopodium gibberula	W	—	1	1	—
Synedra arcus	K	—	1	6	8
S. elna	W	—	1	1	3
Thalassiosira bramaputrac	W	—	1	2	—
汽水砂質干潟	(D2)	—	2	—	—
汽水砂質干潟	(B2)	—	1	—	—
不定または不明	(?)	—	15	—	—
上流域河川	(J)	—	3	2	2
中～下流域河川	(K)	—	12	8	10
湖沼浮遊生	(M)	—	18	39	46
湖沼沼澤地	(N)	—	44	28	30
沼澤並地付着生	(O)	—	12	7	8
陸域	(Q)	—	7	13	13
広布種	(W)	—	102	126	107
不明	(?)	—	2	1	—
珪藻总数		0	221	224	216

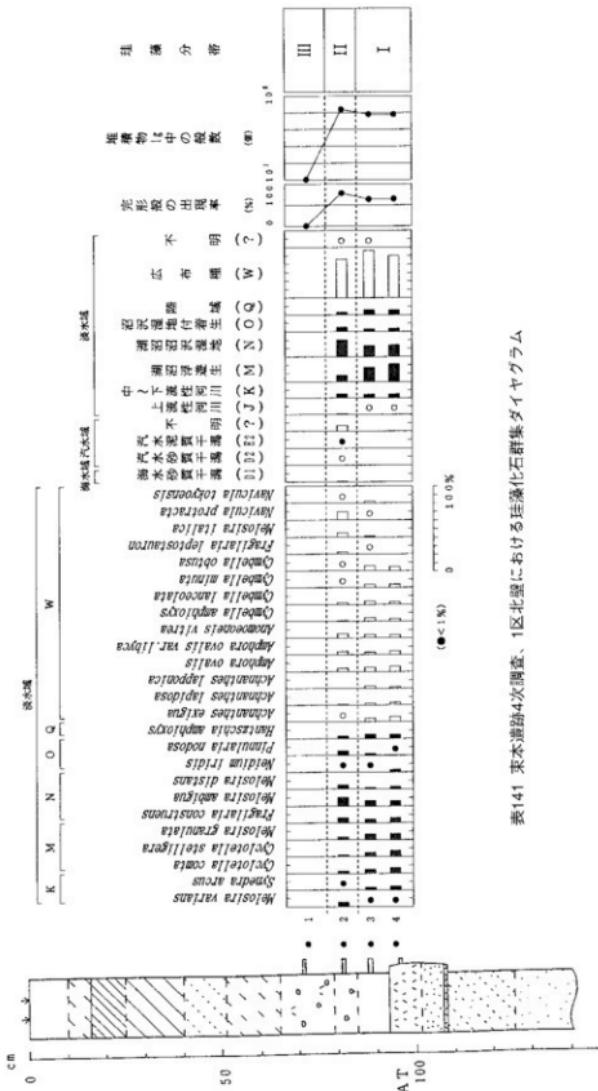
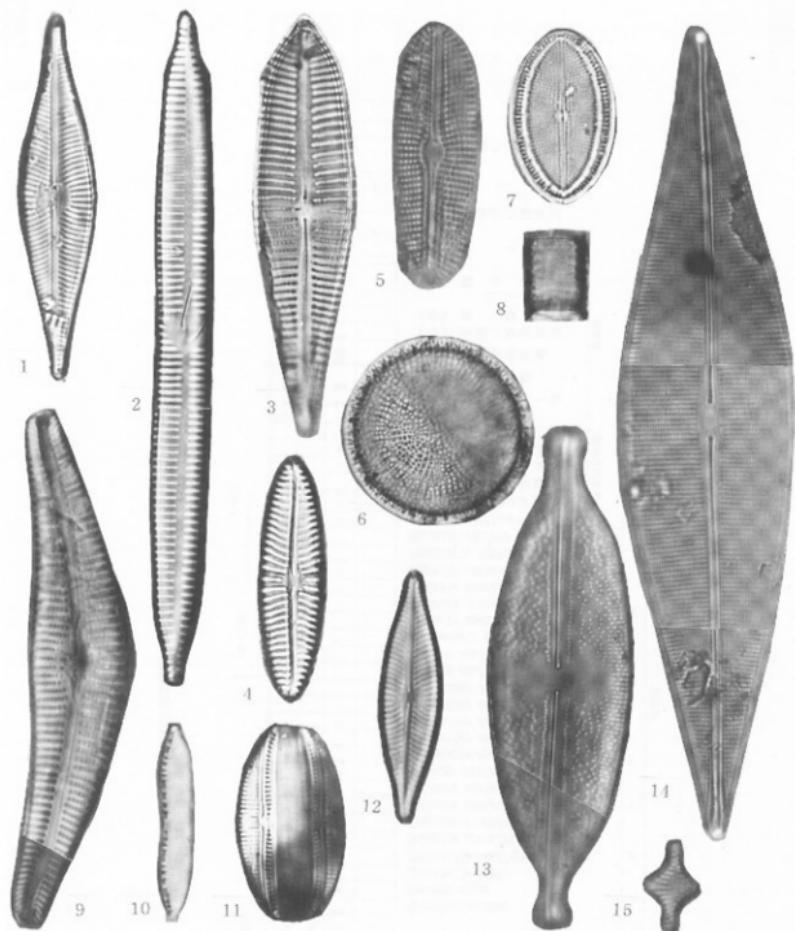


表141 東本造踏4次調査、1区北壁における柱状化石群集ダイヤグラム



1.*Navicula radiosa* 2.*Synedra arcus* 3.*Gomphonema parvula* 4.*Navicula viridula*
 5.*Diploneis ovalis* 6.*Thalassiosira bramaputorae* 7.*Cocconeis placentula* 8.*Melosira italica*
 9.*Cymbella tumida* 10.*Hantzschia amphioxys* 11.*Amphora ovalis* 12.*Navicula protracta*
 13.*Neidium iridis* 14.*Navicula cuspidata* 15.*Fragilaria construens*

IV. 東本遺跡における種実同定

1. 試料

試料は、東本遺跡4次調査出土のNo188（SB204、種No1）、No189（SB204、種No2）、No190（SB601、下層種）の3試料である。

2. 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって種の階級で示した。

3. 結果

学名、和名および、個数を表142に示す。

表142 種実同定結果

No.	遺傳	分類群(学名／和名)	部位	個数
No.188	SB204種No.1	<i>Prunus persica</i> Batsch モモ	核	1
No.189	SB204種No.2	<i>Prunus persica</i> Batsch モモ	核	1
No.190	SB601下層種	<i>Prunus persica</i> Batsch モモ	核	1

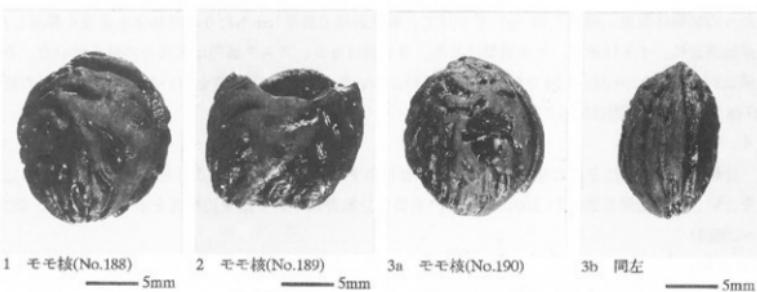
モモ *Prunus persica* Batsch 核 パラ科 (第200図)

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。表面がなめらかで多孔にならず、西日本を中心に弥生時代以降普通に検出されるタイプのモモ核である。

計測可能なものは2点で長さ×幅×厚さ (mm) はNo188で17.7×15.8×13.8、No190で16.2×14.1×10.4である。

〔参考文献〕

金原正明・金原正子・湯川昭平 (1990) 和爾遺跡出土種実と花粉分析、天理市和爾・森本遺跡第5次 発掘調査報告、奈良県遺跡調査概報1989年版、奈良県立橿原考古学研究所、p.20-26。



第200図 東本遺跡4次調査出土種実

V. 東本遺跡4次調査の植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとでも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出する方法であり、イネを中心とするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 1987）。

2. 試料

試料は、2南区のI層～VI層、1北壁のVI層、6区AのI層～Ⅴ層から採取された36点および住居跡（弥生時代末）の埋土や焼土などから採取された97点の計133点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の乾燥 (105°C・24時間)
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスピース添加 (直徑約40μm・約0.02g)
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法 (550°C・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散 (300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子 (20μm以下) 除去、乾燥
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピース個数に、計数された植物珪酸体とガラスピース個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁵g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヒエ属型はヒエ、ヨシ属はヨシ、ススキ属型はススキの値を用いた。その値は2.94、8.40、6.31、1.21である。タケモ科については数種の平均値を用いた。ネザサ節型の値は0.48、クマザサ属型は0.75である。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表143～159に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。（表160、第201～205図）

[イネ科]

機動細胞由来：イネ、ヒエ属型、キビ族型、ジュズダマ属、ヨシ属、ススキ属型（ススキ属、チガヤ属）、ウシクサ族型A（大型）、ウシクサ族型、シバ属、Aタイプ（くさび型）、Bタイプ、Cタイプ

ブ、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、タケ亞科（未分類等）

穂の表皮細胞由来：イネ、オオムギ族

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、莖部起源、未分類等

[シダ類]

[樹木]

ブナ科（シイ属）、クスノキ科（バリバリノキ？）、マンサク科（イスノキ属）、その他

5. イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、キビ族型A（アワが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクヒエが含まれる）、モロコシ属などがある。このうち、本遺跡の試料からはイネ、オオムギ族、ヒエ属型、ジュズダマ属が検出された。以下に各分類群・各地点ごとに栽培の可能性について検討を行った。

（1）イネ

1) 2南区（表132・144）

イネは、I層上部（試料1）からII'層（試料6）までの各層から検出された。このうち、I層（試料1、2）では密度が10,000個/g以上と極めて高い値である。これは、調査区の現況が水田であることと符合している。II層上部（試料3、4）では密度が7,000個/g以上と高い値であり、稻作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを上回っている。したがって、同層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。II'層（試料6）では密度が2,100個/gと比較的低いことから、ここで稻作が行われていた可能性は考えられるものの、上層などからの混入の可能性も考えられる。

2) 6区A（表145）

イネは、I層（試料1）からIII②層上部（試料3）までの各層から検出された。このうち、II層（試料2）では密度が11,000個/gと極めて高い値であり、明瞭なピークが認められた。また、I層（試料1）でも密度が6,700個/gと高い値である。したがって、これらの層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。III②層上部（試料3）では、密度が700個/gと低いことから、ここで稻作が行われていた可能性は考えられるものの、上層などからの混入の可能性も考えられる。

3) 弥生時代末の住居跡（表146～149）

イネは、SB203の炉内（試料2、3、4、6）、SB203の焼土（試料14）、SB205の炉内（試料17）、SB302の焼土（試料31）、SB302の炉内（試料34、36、38）、SB302の焼土（試料46、47）、SB302周壁溝埋土（試料53、54）、SB302炉内（試料55、56）、SB303の埋土（試料58、59）、SB404（試料81）、SB502の焼土（試料87）、SB502の炉内（試料90、91、92）、SB603の炉内（試料128）から検出された。密度はいずれも1,000個/g前後と低い値である。これらのことから、当時は遺跡周辺で稻作が行われており、そこから何らかの形で住居跡内にイネの植物珪酸体が混入したものと推定される。なお、イネ藁が住居跡の敷料や燃料などとして利用されていた可能性も考えられるが、密度や検出率が低いことから断定はできない。

(2) オオムギ族

オオムギ族（穂の表皮細胞）は、S B403の焼土（試料71）から検出された。ここで検出されたのはムギ類（コムギやオオムギなど）と見られる形態のもの（杉山・石井, 1989）である。密度は700個/gと低い値であるが、穂（穂殼）は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。これらのことから、当時は遺跡周辺でムギ類の栽培が行われており、そこから何らかの形で同遺構に植物珪酸体が混入したものと推定される。

(3) ヒエ属型

ヒエ属型は、S B302の焼土（試料48）から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエが含まれるが、現時点では栽培種とイヌビエなどの野生種とを完全に識別するには至っていない（杉山ほか, 1988）。また、密度も700個/gと低い値であることから、遺跡周辺でヒエが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草に由来するものである可能性も否定できない。

(4) ジュズダマ属

ジュズダマ属は、S B601内（試料118）から検出された。同属には食用や薬用となるハトムギが含まれるが、現時点では栽培種と野草のジュズダマとを完全に識別するには至っていない。また、密度も700個/gと低い値であることから、遺跡周辺でハトムギが栽培されていた可能性は考えられるものの、野草のジュズダマに由来するものである可能性も否定できない。

以上の結果から、本遺跡ではⅡ層の時期には稻作が開始されていたと考えられ、その後もおおむね継続して行われて現在に至ったものと推定される。また、弥生時代末頃とされる住居跡の周辺では稻作が行われていたと考えられ、ムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の発明については今後の課題としたい。

6. 植物珪酸体分析から推定される植生・環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。

(1) 2南区・1区北壁・6区A（表150・151）

2南区のⅠ層～Ⅵ層、1区北壁のⅥ層、6区AのⅠ層～Ⅶ層について分析を行った。その結果、AT直下のⅣ層およびAT直上のⅥ層では、植物珪酸体はほとんど検出されなかった。Ⅳ層ではネザサ節型やヨシ属などが検出されたが、いずれも少量である。K-Ahより下位のⅣ層ではネザサ節型やヨシ属、棒状珪酸体が大幅に増加しており、その他の分類群も増加傾向を示している。K-Ahより上位のⅢ層下部では、ネザサ節型が10万個/g以上と極めて多量に検出され、タケア科（未分類等）も多量に検出された。また、ヨシ属やススキ属型、ウシクサ族型、クマザサ属型、メダケ節型なども検出された。Ⅲ層上部（黒ボク土層）でもおおむね同様の結果であるが、ヨシ属は急激に減少している。Ⅱ層ではネザサ節型などのタケア科が減少傾向を示し、前述のようにイネが出現・増加している。

おもな分類群の植物体量の推定値（図の右側）によると、K-Ahより下位のⅣ層ではヨシ属が圧倒的に卓越しているが、Ⅲ層下部ではネザサ節型の増加に伴ってヨシ属は減少しており、Ⅲ層上部ではネザサ節型が圧倒的に卓越している。Ⅱ層ではネザサ節型の減少に伴って、イネが出現・増加しており、Ⅰ層ではイネが圧倒的に卓越している。

以上の結果から、東本遺跡4次調査における堆積当時の植生と環境について推定すると次のよう

ある。V層より下位層の堆積当時は、テフラ層の堆積や河川の影響など何らかの原因によってイネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったものと推定される。その後、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約6,300年前）より下位のIV層の時期には、ヨシ属が繁茂する湿地が成立したものと考えられ、周辺ではネザサ節やクマザサ属などのタケ亜科植物も比較的多く見られたものと推定される。

K-Ahより上位のIII層下部では、ヨシ属の減少に伴ってネザサ節などのタケ亜科植物が急激に増加したものと推定される。これは、流路の変化など何らかの原因によって土壤の乾燥化が促進されたためと考えられる。ネザサ節は日当りの悪い森林の林床では生育が困難であることから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく比較的開かれた環境であったものと推定される。III層上部（黒ボク土層）の堆積当時は、ネザサ節が繁茂してスキ属なども見られる草原植生が継続されていたと考えられ、土壤中に多量の有機物が供給されたものと推定される。

その後、II層の時期には調査地点もしくはその周辺で稻作が開始されたものと考えられ、おおむね継続して行われて現在に至ったものと推定される。

（2）弥生時代末の住居跡（表152～159）

住居跡の埋土や炉内、焼土等の試料では、全体的にネザサ節型を主体とするタケ亜科が極めて多量に検出され、ヨシ属やスキ属型、ウシクサ族型などもほとんどの試料から検出された。おもな分類群の植物体量の推定値（図の右側）によると、ほとんどすべての試料でネザサ節型が圧倒的に卓越しており、部分的にヨシ属も多くなっていることが分かる。調査区や住居跡による比較では、2区や6区Cでヨシ属がやや多い傾向が認められたが、壇上や炉内、焼土などの試料による比較では特に大きな差違は認められなかった（表159）。

以上の結果から、弥生時代末とされる住居跡の周辺は、ネザサ節などのタケ亜科を主体としてスキ属なども生育するイネ科植生であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的などとも見られたものと推定される。また、遺跡周辺ではイネやムギ類の栽培が行われており、何らかの形で住居内にこれらの植物珪酸体が混入したものと推定される。なお、遺構や試料間で植物珪酸体組成や密度に明瞭な差違が認められないことから、住居跡における植物の利用状況については判断が困難である。今後、住居跡の床面や焼土およびその周辺の土壤について詳細な分析を行うことにより、住居跡内における植物利用の実態が解明される可能性がある。

〔参考文献〕

- 杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点、*植生史研究*、第2号、p. 27-37.
- 杉山真二（1987）タケ原科植物の機動細胞壁酸体、*富士竹類植物園報告*、第31号、p.70-83.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞壁酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用
—古代農耕追究のための基礎資料として—、*考古学と自然科学*、20、p.81-92.
- 杉山真二・石井克己（1989）郡馬県子持村、TP直下から検出された灰化物の植物珪酸体（プラント・オパール）分析、*日本第四紀学会要旨集*、19、p.94-95.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(I)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法…、*考古学と自然科学*、9、p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査…、*考古学と自然科学*、17、p.73-85.

表143 東本通跡4次調査の植物生體体分析結果(1) (遺構・試料ごとのまとめ)

分類群＼試料	2区				3区				4区				5区C				6区B				7区A				8区B				9区内						
	SB203	SB205	SB202	SB303	SB302	SB401	SB403	SB404	SB502	SB601	SB602	SB603	新内	施土	その他	イネ																			
イネ科	4	3		4					7	4						2		4																	
イネ																																			
イネ科実験室等の表皮細胞)																																			
オオムギ灰(種の表皮細胞)																																			
ヒエ属	3	2	2		5	7	4	4		4	9	4		7	17	19	10	19	14	10															
キビ属	25	42	22	21	6	11	7	5		5	7	5		1	4	4	4	5	8																
ジユズダマ族	5	5	7	1	1	2	2	2		2	4	1		4	4	4	4	1	2																
ヨシ属	3	3	3	36	53	26	52	66		57	36	39		45	50	52	50																		
ススキ属	55	82	60																																
ウシクサ属																																			
ウシクサ属																																			
Aタイプ(裸型)																																			
Bタイプ																																			
タケ属																																			
ネモチサ属	1373	940	1140	1330	1310	1016	1092	1211	778	1218	802	758	1126	1161	1179																				
クマツサ属	82	67	73	109	119	23	55	70	65	62	62	43	72	79	102																				
メダケ属	90	34	42	94	120	53	149	133	57	64	46	27	66	89	96																				
マダケ属	1																																		
未分類	1158	969	1033	1113	1153	1147	1208	1413	938	865	837	723	1045	1052	1067																				
その他のイネ科																																			
表皮毛起源	24	42	37	22	21	26	23	26	13	17	35	24	25	25	23																				
根状茎體	614	672	837	564	626	470	522	620	664	383	281	515	574	604	534																				
基部葉	3																																		
未分類等	1016	890	838	897	897	975	916	945	825	914	825	754	888	933	834																				
シダ類																																			
樹木起源																																			
フナ科(シイ属)																																			
タヌキ科(アリノキ科?)																																			
その他																																			
植物生體体積数	4455	3747	4092	4215	4324	3758	4078	4506	3421	3594	2962	2907	3890	4025	3912																				
おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m ³ ・cm)																																			
イネ	0.10	0.08		0.13		0.10	0.16	0.24	0.22	0.11																									
ヒエ属	1.58	2.67	1.42	0.31	0.27	0.09	0.27	0.07	0.14	0.21	0.09	0.06	0.08	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05		
ヨシ属	0.07	0.06	0.05																																
ススキ属	6.59	4.51	5.47	6.48	6.29	4.88	5.24	5.81	3.73	5.81	3.49	3.49	3.64	3.85	3.64	3.49	3.49	3.49	3.49	3.49	3.49	3.49	3.49	3.49	3.49	3.49	3.49	3.49	3.49	3.49	3.49	3.49	3.49	3.49	
トササギ草属	0.62	0.50	0.54	0.81	0.90	0.17	0.41	0.53	0.49	0.47	0.46	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32	

*試料の比重を1.0と仮定して算出。

表144 東本道跡4次調査の動物遺体分析結果 (2)
保山苗尾原区：×(00)箇

分類群＼試料	1区半																	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
イモ科 キビ属	154	119	87	71	43	21	7	13	15	7	31	7	7	7	7	7	7	7
ヨシ属		7	7	22	7	27	7	7	53	54	103	126	100	90	82	79		
スキ属 ウシクサ属	15	7	15	7	22	7	20	29	15	31	7	35	7	7	15	7		
シバ属																		
A.タブ(総25)	38	7	66	42	72	42	20	38	15	137	115	110	105	73	90	119	51	8
B.タブ			7											7				
C.タブ																		
D.タブ																		
E.タブ																		
ホツササ属	676	706	991	757	949	772	1009	1456	1668	1226	1408	725	503	392	357	298	66	
クマザサ属	54	37	44	57	14	57	47	44	117	99	100	124	49	33	37	37	7	
メダケ属	23	126	7	50	91	85	301	133	241	53	69	117	21	33	30	22		
木分離苔	389	728	984	762	847	984	1036	1322	1663	1049	1154	1011	545	445	457	328	125	
その他の木科																		
長柄毛足海	46	45	51	42	22	21	20	57	7	15	62	29	42	53	22	22		
他状毛足海	507	290	517	573	471	340	207	547	527	829	883	491	740	831	750	894	345	
葉部足海																		
木分離体	1045	876	882	870	941	871	956	1051	1009	1026	1098	1018	1054	910	960	849	966	15
柄木属																		
ブナ科(シ属)																		
クヌギ科(リバノキ属)																		
マンサク科(スズキ属)																		
その他																		
(海綿骨片)																		
植物遺体総量	3458	249	3659	3276	3497	3208	3655	4764	5259	4227	5219	3757	2389	2924	2797	2562	1242	15
おもな生物類の推定生産量(単位: kg/m ² ·cm)																		
イネ	4.52	3.49	2.57	2.48	1.28	0.62												
ヨシ属																		
スキ属	0.19	0.09	0.18	0.45	1.37	1.69	0.46	0.46	3.40	6.47	7.93	6.29	5.68	5.17	1.85			
エササ属	3.25	3.39	4.76	3.63	4.55	3.71	4.84	7.18	8.00	4.45	6.76	3.48	2.41	1.88	1.62	1.29	0.32	
クマザサ属	0.40	0.28	0.33	0.42	0.11	0.42	0.35	0.33	0.88	0.74	0.75	0.93	0.37	0.25	0.28	0.06		

各試料の面積を1.0と仮定して算出。

表145 東木運搬会次調査の植物性酸体分析結果(3)
検出密度(単位: ×10⁶/g)

分類群 \ 試料	10°C										25°C						
	1	2	3	4	5	6	B	A	7	8	9	10	11	1	2	1	
イネ科 イネ キビ族 ヨシ属 ススキ属 ウシクサ族(A型) ウシクサ族(B型) シバ属 Aタイプ(根) Bタイプ Cタイプ グサ科 ネズミ草属 クマザサ属 メダケ属 木分離 その他のイネ科 表皮毛起漿 極小往酸体 茎部起源 小分離等 樹木起源 アナ科(イネ) クヌギ科(ヒバノキ) マニシク科(イスノキ属) その他 (無能者)	67	119	7	22	15	7	38	126	8	23	7	8	8	120	8	8	
イネ科 イネ キビ族 ヨシ属 ススキ属 ウシクサ族(A型) ウシクサ族(B型) シバ属 Aタイプ(根) Bタイプ Cタイプ グサ科 ネズミ草属 クマザサ属 メダケ属 木分離 その他のイネ科 表皮毛起漿 極小往酸体 茎部起源 小分離等 樹木起源 アナ科(イネ) クヌギ科(ヒバノキ) マニシク科(イスノキ属) その他 (無能者)	67	119	7	22	15	7	38	126	8	23	7	8	8	120	8	8	
イネ科 イネ キビ族 ヨシ属 ススキ属 ウシクサ族(A型) ウシクサ族(B型) シバ属 Aタイプ(根) Bタイプ Cタイプ グサ科 ネズミ草属 クマザサ属 メダケ属 木分離 その他のイネ科 表皮毛起漿 極小往酸体 茎部起源 小分離等 樹木起源 アナ科(イネ) クヌギ科(ヒバノキ) マニシク科(イスノキ属) その他 (無能者)	941	1053	865	906	511	202	15	8	23	23	7	7	7	86	487	8	48
イネ科 イネ キビ族 ヨシ属 ススキ属 ウシクサ族(A型) ウシクサ族(B型) シバ属 Aタイプ(根) Bタイプ Cタイプ グサ科 ネズミ草属 クマザサ属 メダケ属 木分離 その他のイネ科 表皮毛起漿 極小往酸体 茎部起源 小分離等 樹木起源 アナ科(イネ) クヌギ科(ヒバノキ) マニシク科(イスノキ属) その他 (無能者)	39	66	73	99	59	23	7	23	23	23	7	7	7	36	647	8	21
イネ科 イネ キビ族 ヨシ属 ススキ属 ウシクサ族(A型) ウシクサ族(B型) シバ属 Aタイプ(根) Bタイプ Cタイプ グサ科 ネズミ草属 クマザサ属 メダケ属 木分離 その他のイネ科 表皮毛起漿 極小往酸体 茎部起源 小分離等 樹木起源 アナ科(イネ) クヌギ科(ヒバノキ) マニシク科(イスノキ属) その他 (無能者)	30	59	51	23	7	23	7	23	23	23	7	7	7	36	647	8	21
イネ科 イネ キビ族 ヨシ属 ススキ属 ウシクサ族(A型) ウシクサ族(B型) シバ属 Aタイプ(根) Bタイプ Cタイプ グサ科 ネズミ草属 クマザサ属 メダケ属 木分離 その他のイネ科 表皮毛起漿 極小往酸体 茎部起源 小分離等 樹木起源 アナ科(イネ) クヌギ科(ヒバノキ) マニシク科(イスノキ属) その他 (無能者)	897	847	931	946	594	372	23	7	7	7	7	7	7	36	647	8	21
イネ科 イネ キビ族 ヨシ属 ススキ属 ウシクサ族(A型) ウシクサ族(B型) シバ属 Aタイプ(根) Bタイプ Cタイプ グサ科 ネズミ草属 クマザサ属 メダケ属 木分離 その他のイネ科 表皮毛起漿 極小往酸体 茎部起源 小分離等 樹木起源 アナ科(イネ) クヌギ科(ヒバノキ) マニシク科(イスノキ属) その他 (無能者)	74	15	7	30	22	16	7	7	7	7	7	7	7	36	647	8	21
イネ科 イネ キビ族 ヨシ属 ススキ属 ウシクサ族(A型) ウシクサ族(B型) シバ属 Aタイプ(根) Bタイプ Cタイプ グサ科 ネズミ草属 クマザサ属 メダケ属 木分離 その他のイネ科 表皮毛起漿 極小往酸体 茎部起源 小分離等 樹木起源 アナ科(イネ) クヌギ科(ヒバノキ) マニシク科(イスノキ属) その他 (無能者)	622	737	433	510	504	336	61	82	37	15	30	120	863	1060	1164	899	913
イネ科 イネ キビ族 ヨシ属 ススキ属 ウシクサ族(A型) ウシクサ族(B型) シバ属 Aタイプ(根) Bタイプ Cタイプ グサ科 ネズミ草属 クマザサ属 メダケ属 木分離 その他のイネ科 表皮毛起漿 極小往酸体 茎部起源 小分離等 樹木起源 アナ科(イネ) クヌギ科(ヒバノキ) マニシク科(イスノキ属) その他 (無能者)	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	1060	1164	899	913
イネ科 イネ キビ族 ヨシ属 ススキ属 ウシクサ族(A型) ウシクサ族(B型) シバ属 Aタイプ(根) Bタイプ Cタイプ グサ科 ネズミ草属 クマザサ属 メダケ属 木分離 その他のイネ科 表皮毛起漿 極小往酸体 茎部起源 小分離等 樹木起源 アナ科(イネ) クヌギ科(ヒバノキ) マニシク科(イスノキ属) その他 (無能者)	3875	4140	3902	3607	3189	1737	388	164	222	52	33	623	3275	3875	4140	3902	3607

おもな分離酸の相対生産量(単位: kg/m³・cm)

イネ ヨシ属 ススキ属 ヨシサ属 クマザサ属	1.96 1.10 0.28 0.42 0.44	3.25 0.93 0.27 0.15 0.55	0.22 0.46 0.19 0.26 0.44	2.40 2.40 0.10 0.97 0.44	7.95 0.49 1.45 2.46 0.97	0.47 0.47 0.07 0.07 0.17	1.45 1.45 0.47 0.47 0.44	0.47 0.47 0.07 0.07 0.17	1.45 1.45 0.47 0.47 0.44	1.45 1.45 0.47 0.47 0.44	1.45 1.45 0.47 0.47 0.44	1.45 1.45 0.47 0.47 0.44	7.56 7.56 0.10 0.42 0.36
------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------

各試料の酸化量を1.0と仮定して算出。

表146 東本遺跡(次回調査) 遺構関連材料の植物性遺物分析結果(1)
検出所率(単位: ×1000個/g)

分類群 \ 試料	2 [K]												SB202	bトレンチ層						
	1	2	3	4	5	6	7	9	11	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
イネ科 イネ	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	7	7	7	7	7	7	7
イネ科 イネ粉穀(胚の表皮細胞) オオムギ族(穀の表皮細胞)																				
ヒエ属 ヒエ族型	15	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
シヌズダマ属 ヨシ属	15	8	23	54	23	16	35	7	40	38	15	36	75	15	15	23	30	8	23	8
スキ属型 ウシクサ族型A(大型)	7	15	8	8	8	13	13	6	8	7	6	8	7	8	7	8	7	8	8	8
ウシクサ族型 ウシクサ族型	37	70	85	54	62	16	42	29	60	64	83	116	68	62	74	45	59	53	76	8
Bタイプ(梗型)																				
クダラ科 ネササ属型	1424	1270	2055	1915	1783	1133	1746	1193	973	705	900	1206	732	881	1315	1213	891	1583	809	99
クダラ科 ムダケ属型	52	78	108	101	86	62	113	37	80	51	136	87	68	46	52	114	52	113	129	23
マダケ属型	2088	101	154	31	179	86	63	51	27	38	53	65	21	15	45	53	30	8		
木分離等	1469	1028	1362	1737	1177	1062	1458	1047	927	669	882	1170	794	942	882	1220	988	1244	655	61
その他のイネ科																				
麦皮毛起穀 穀粒球體 等部起穀	15	31	62	16	8	28	22	27	13	45	36	34	54	22	33	37	15	15	8	
木分離等	438	771	693	620	582	516	521	469	890	686	650	683	568	765	580	803	1129	731	620	84
アマ類 熱水泡過	1024	1137	1290	1140	912	961	951	952	873	947	1104	807	944	919	906	872	735	912	779	159
アマ類 アナ科(シイ属) クスノキ科(リバリノキ?)																				
その他																				
植物性固体總数	4743	4502	5779	5699	4891	3874	4965	3807	3877	3135	3872	4215	3311	3716	3898	4404	3965	4704	3094	418
おもな分離群の推定生産量(単位: kg/m²·cm)																				
イネ科 ヨシ属 シヌズダマ属 スキ属 ネササ属型 クダラ科	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23
0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08

※試料の仮比重を1.0として算出

表147 葉木標跡4次調査、遺傳構造試料の植物種別分析結果（2）
横川新度（中位：×100個/㎡）

分類群＼試料	3区															SB302																			
	SR303	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	
イネ科		7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	
イネ野穂（油の夷豆穂）																																			
オオムギ・黄・稻（老安細穀）																																			
ヒエ属																																			
キビ属																																			
ヨシ属																																			
ジユズダマ属																																			
ススキ属																																			
ウツクサ属（人型）																																			
ウンクサ属（虫型）																																			
アタイフ（鷺鳴）																																			
Bタイプ																																			
タケ属																																			
スサナリ属																																			
クマササ属																																			
クマササ属（人型）																																			
メダガ属																																			
メダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属																																			
マダガ属					</td																														

表148 素木標記4次調査 遺傳問題試料の植物生體分析結果(3)

分類群＼試料	3区			4区			5区						
	SB303	B+2区	SB401	SB403	SB404	SB405	81502	88	89	90	91	92	P120
イネ科	15	7	7	7	7	7	15	7	7	7	7	7	15
イネ、イネ附根(頭の未定細胞)													
オオムギ草(穀の表皮細胞)													
ヒエ属型	7	8	7	8	15	7	7	7	8	15	15		
キビ属型	7	7	22	8	37	7	22	8	7	7	7	7	7
ジユズイダマ属	7	15	22	8	7	7	7	7	7	7	7	7	7
日シ属	7	7	7	15	22	7	7	7	7	7	7	7	7
スキサ属型	44	75	36	25	67	30	23	82	30	22	50	67	59
ウシタカラ族													
アタイア属型													
B.2.4.2.													
タケ科													
タケサゲ属	1422	1625	1059	1107	790	988	1634	1170	1986	974	1289	370	921
クアガサ属型	200	97	145	105	67	7	38	45	67	51	36	22	111
メダケ節包	170	142	109	121	67	44	61	231	244	108	142	32	119
メダケ属型													
未分離	1371	1108	1254	1665	879	983	1310	1252	1863	1228	1216	429	1159
その他	50	15	22	83	37	22	31	22	7	14	15	59	15
イネ科	556	786	508	588	641	473	467	537	569	440	560	422	572
博根性	7	96	926	926	618	954	996	991	1043	931	967	770	1003
蓋部記録													
シダ類	756	889	905	905	926	926	926	926	926	926	926	926	926
尚未記録													
尚未記録													
ブナ科(シイ属)													
クヌギ科(リバノキ属)													
その他													
植物生體分析数	4564	4733	1075	4885	3564	3549	3967	4983	5746	3889	4268	4613	4556
おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m²・cm)	0.44	0.21		0.48	0.46	0.47	0.47	0.46	0.47	0.47	0.47	0.43	0.22
イネ科(イネ属)	0.15	0.07		0.46	0.39	0.47	0.47	0.46	0.47	0.47	0.47	0.38	0.22
ヒエ属型	0.96	1.37	0.68	1.23	0.88	1.28	0.88	1.28	0.88	1.28	0.88	0.88	0.15
日シ属	0.06	0.09	0.09	0.18	0.28	0.46	0.46	0.46	0.46	0.46	0.46	0.46	0.46
スキサ属型	6.83	7.80	5.88	5.31	3.79	4.96	5.62	9.16	4.68	5.80	1.78	4.42	5.39
クマガヤ属型	1.50	0.73	1.09	0.79	0.50	0.66	0.29	0.34	0.50	0.58	0.27	0.17	0.84

各試料の販売比を1.0と仮定して算出。

表149 東本連跡4次調査・構造関連試料の植物珪酸体分析結果 (4)

本試料の仮比重を1.0と假定して算出。

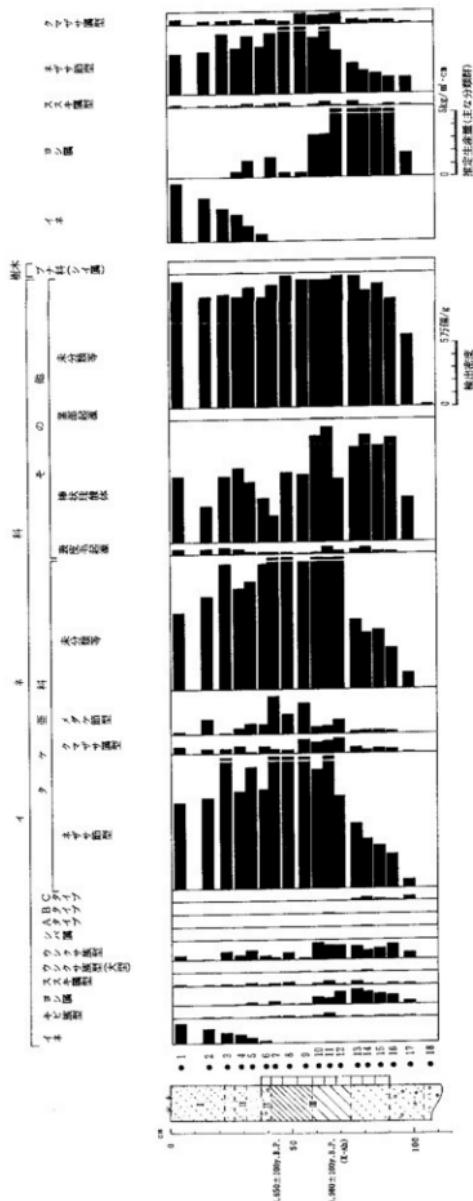


表150 東本遺跡4次調査2街区の植物生産体分析結果

植物珪酸体分析

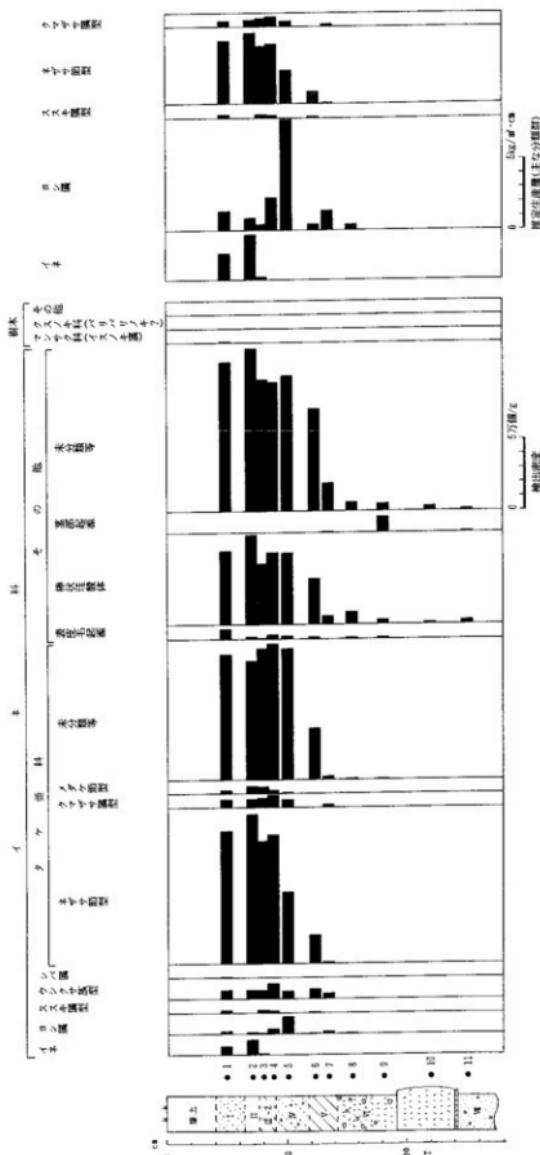


表151 東本道跡4次調査6区Aの植物珪酸体分析結果

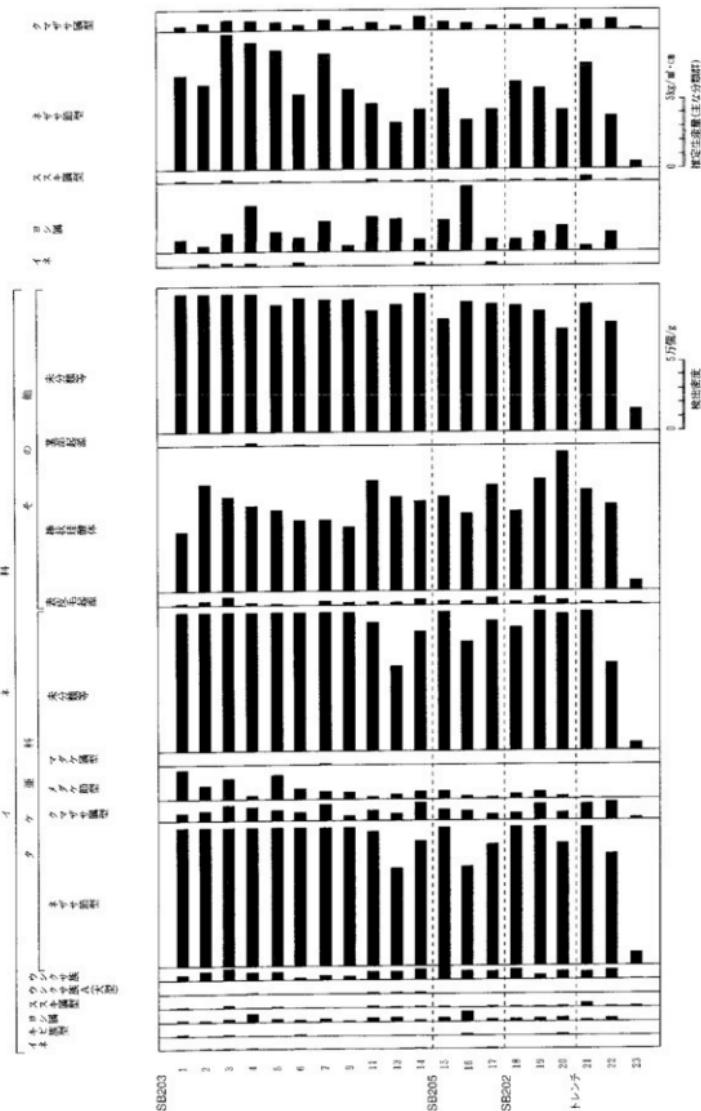


表152 東本遺跡4次調査2区の植物珪酸体分析結果

植物珪酸体分析

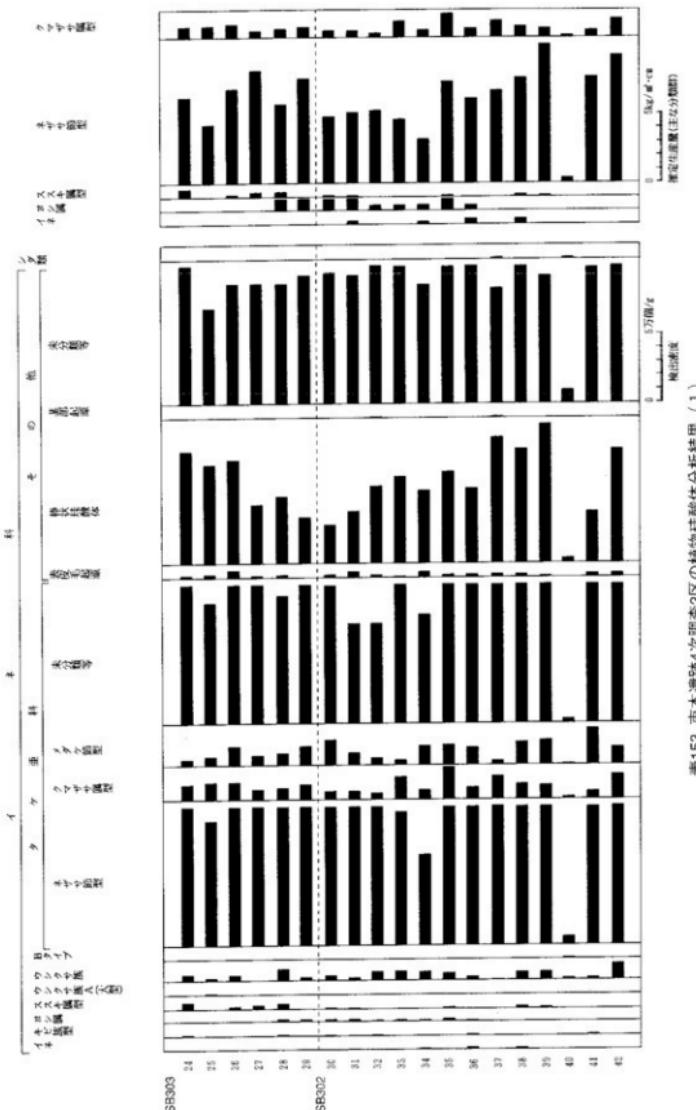


表153 東木道54次調査3区の植物珪酸体分析結果（1）

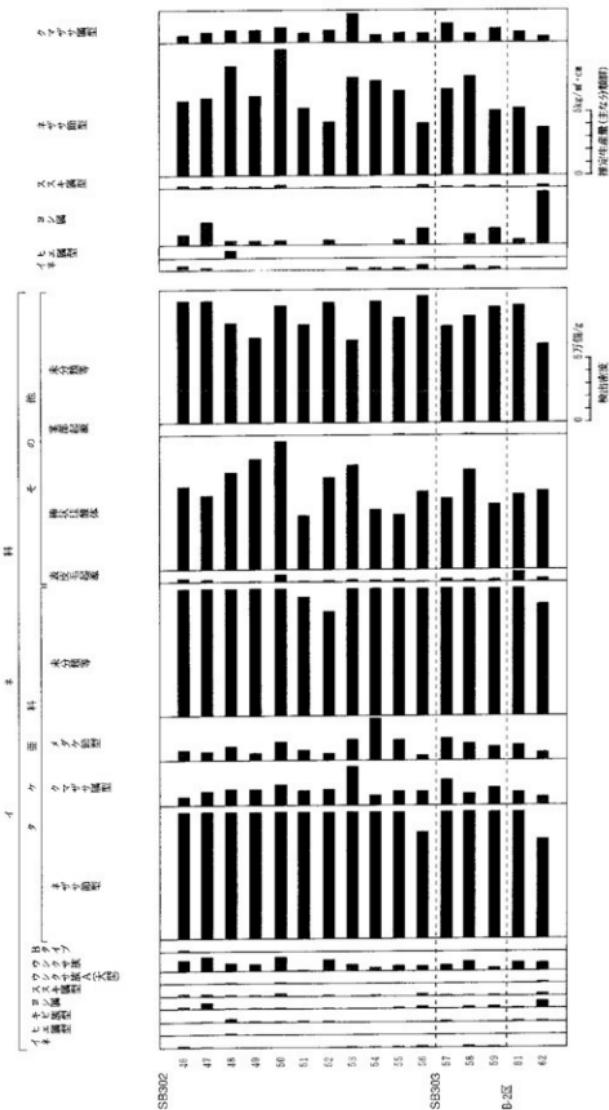


表154 東本通り4次調査3区の植物生種別分析結果（2）

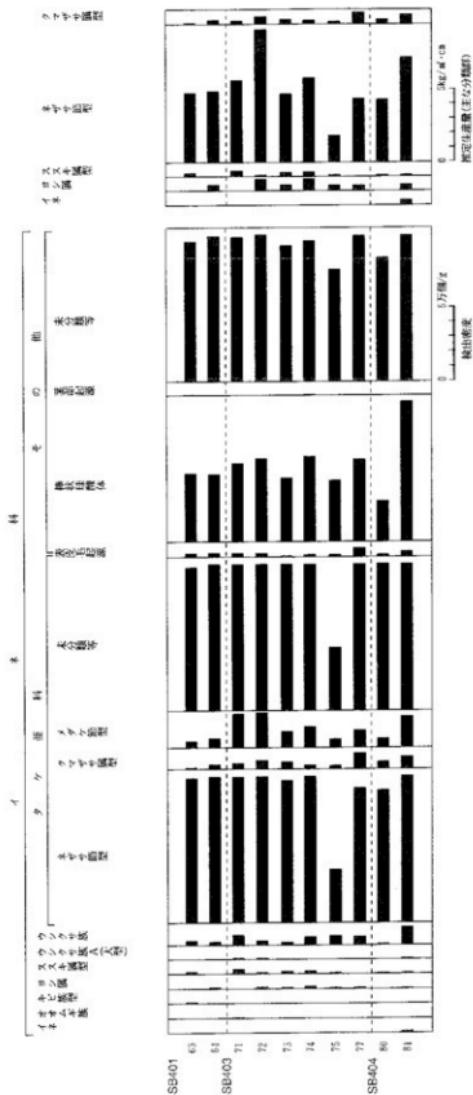


表155 東本通り4次調査4区の植物珪酸体分析結果

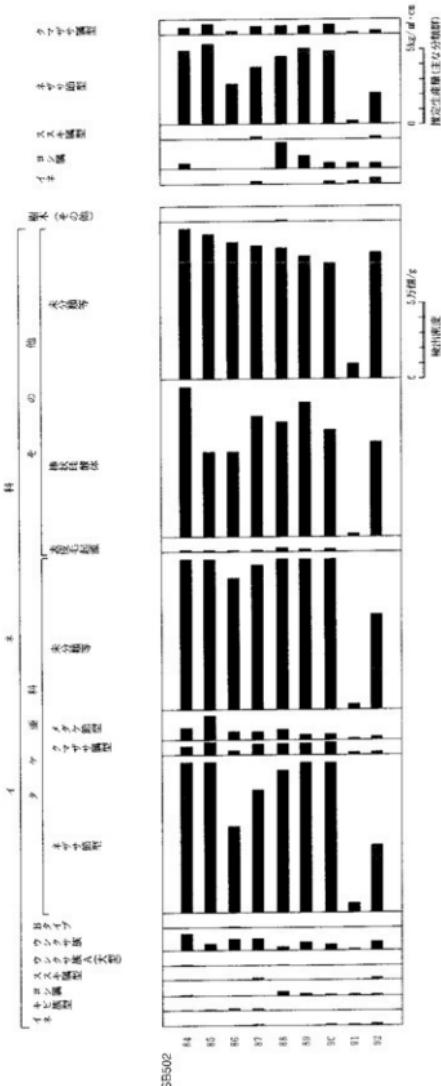


表156 来木道跡4次調査5区Cの植物生種別分析結果

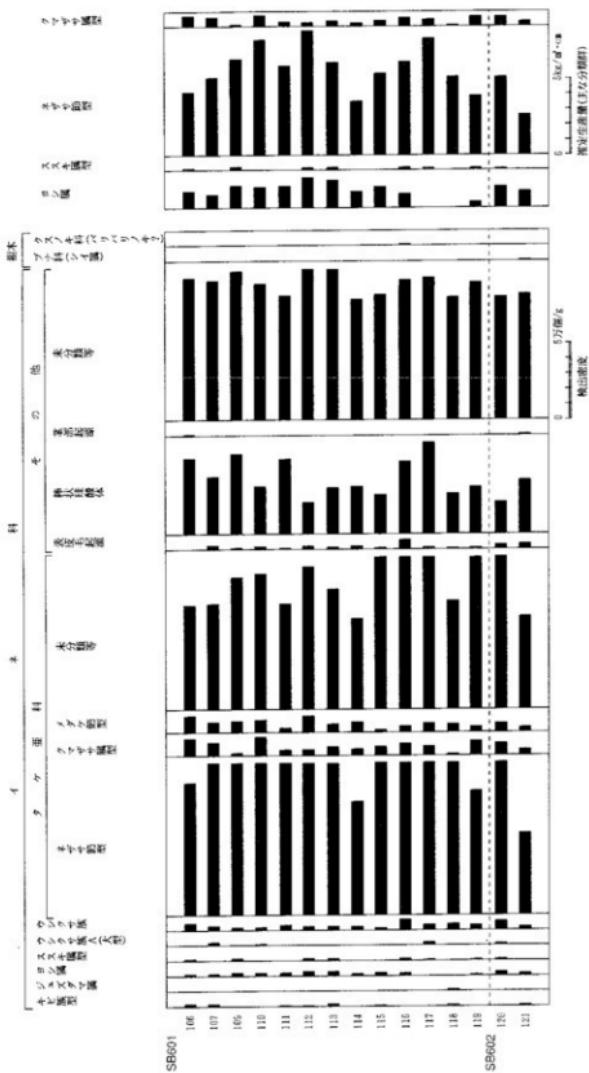


表157 東本通り4次調査6区Cの植物珪酸体分析結果

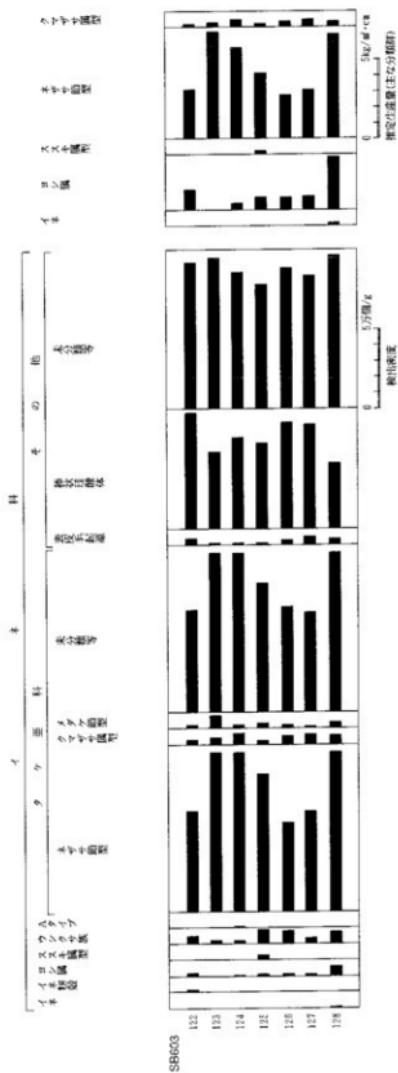


表158 東本川跡4次調査6区Bの植物珪酸体分析結果

植物珪酸体分析

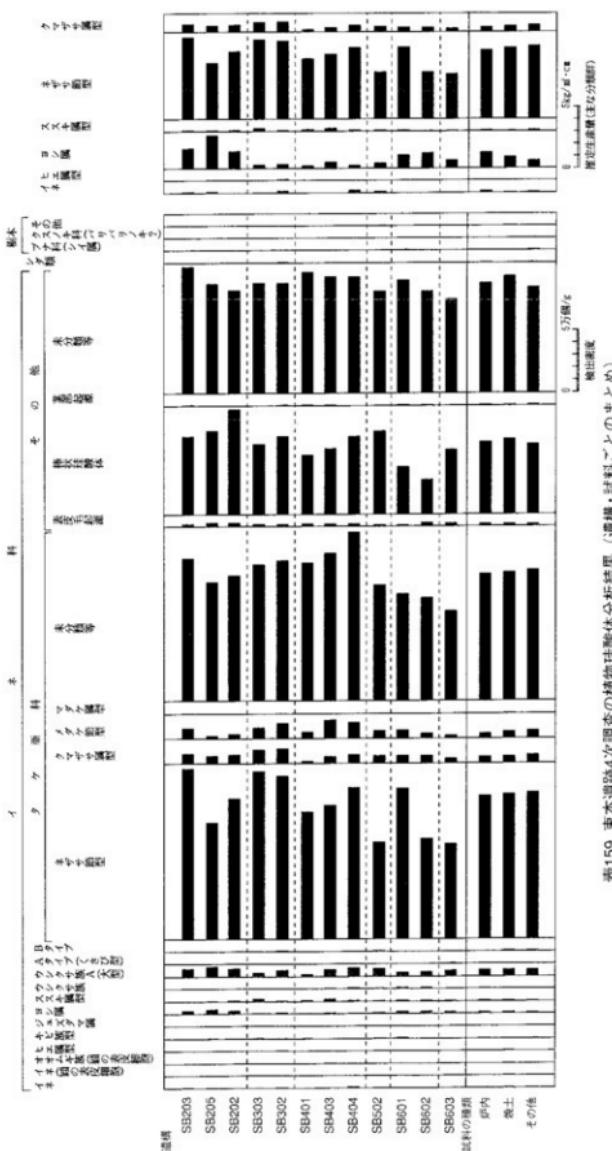


表160 植物珪酸体の顕微鏡写真

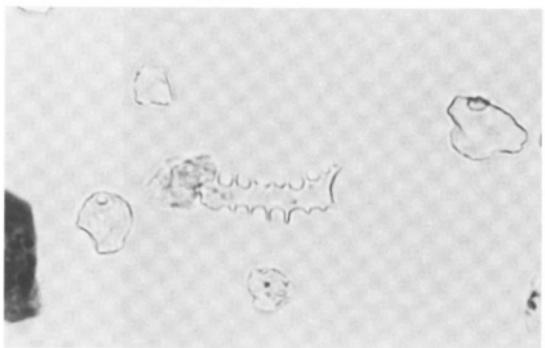
No.	分類群	地区	試料名	倍率
1	イネ	3区	53	400
2	イネ(側面)	6区A	1	400
3	オオムギ族(穂の表皮細胞)	4区	71	400
4	ヒエ属型	3区	48	400
5	キビ族型	6区C	118	400
6	ヨシ属	6区A	3	400
7	ススキ属型	3区	26	400
8	ウシクサ族型A(大型)	6区C	120	400
9	ネザサ節型	6区A	1	400
10	ネザサ節型(側面)	6区C	115	400
11	クマザサ属型	3区	27	400
12	メダケ節型	6区C	113	400
13	表皮毛起源	3区	30	400
14	ブナ科(シイ属)	6区C	119	400
15	クスノキ科(バリバリノキ?)	6区A	1	400



1 イネ

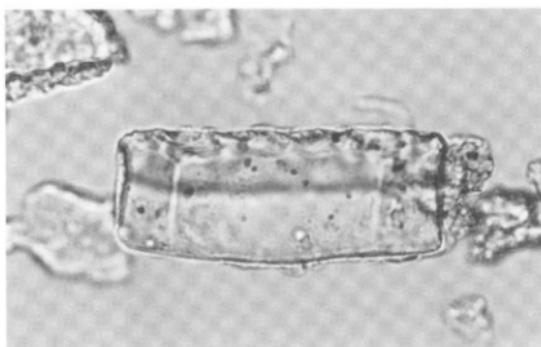


2 イネ

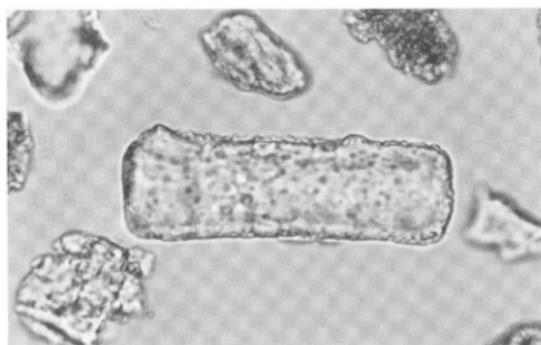


3 オオムギ族

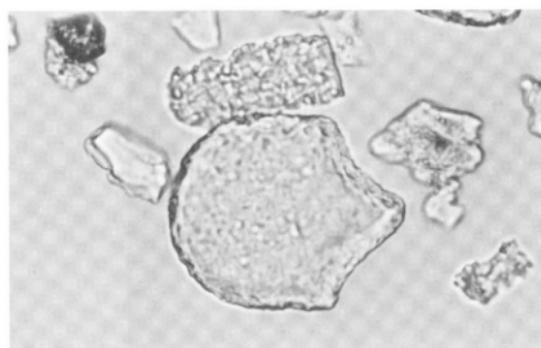
第201図 植物珪酸体の顕微鏡写真 (1)



4 ヒコ属型

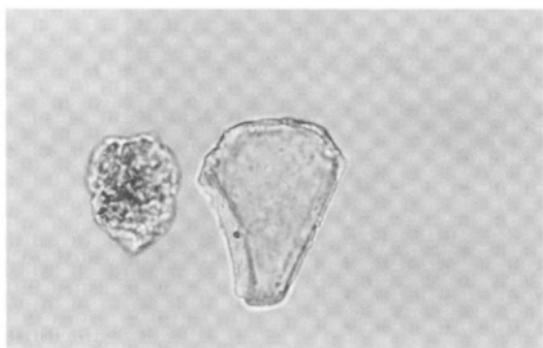


5 キビ族型



6 ヨシ属

第202図 植物珪酸体の顕微鏡写真（2）



7 ススキ属型



8 ウシクサ族型A

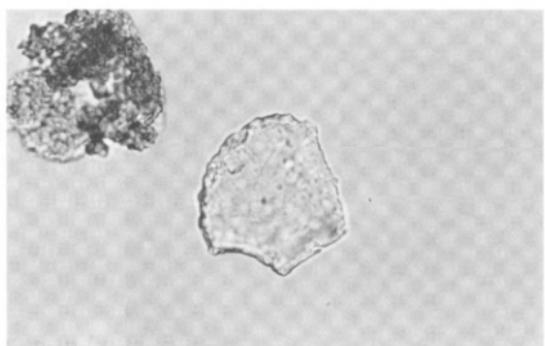


9 ネザサ節型

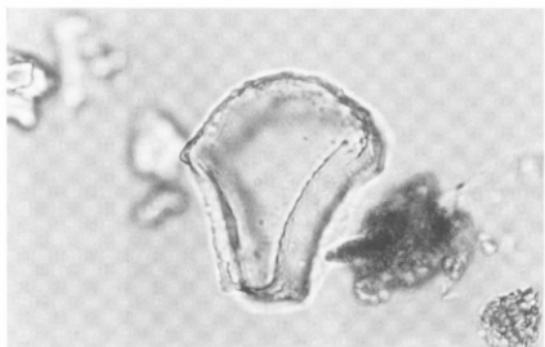
第203図 植物珪酸体の顕微鏡写真（3）



10 ネザサ節型

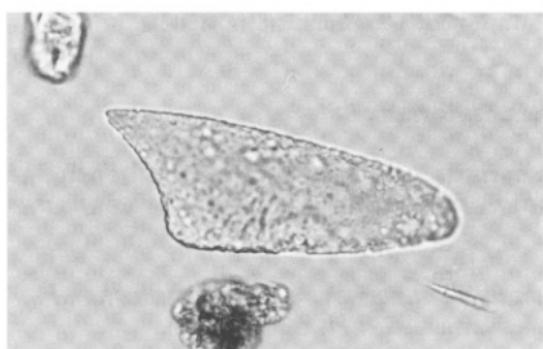


11 クマザサ属型



12 メダケ節型

第204図 植物珪酸体の顕微鏡写真（4）



13 表皮毛起源



14 ブナ科



15 クスノキ科

第205図 植物珪酸体の顕微鏡写真（5）

VI. 東本遺跡4次調査出土炭化材の樹種同定

1. 試 料

試料は、各遺構から出土した37点の炭化材である。

2. 方 法

試料は割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面・放射断面・接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定はこれらの試料標本をその解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結 果

結果を表161に示し、同定根拠となった特徴を記す。また、各断面の顕微鏡写真を示す。

1) スダジイ *Castanopsis sieboldii* Hatusima ブナ科 (第206図 試料155)

横断面：年輪のはじめに中環から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりスダジイに同定される。なお試料の内、小片のため広範囲の観察ができず、集合放射組織の有無が確認できなかったものは、ツブライジの可能性もあるのでシイ属とした。また保存状態が悪く、シイ属の特徴が断片的にしか見られなかつたものはシイ属？とした。スダジイは本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性がやや低く、現在では建築、器具などに用いられる。

2) ヤマウルシ *Rhus trichocarpa* Miq. ウルシ科 (第206図 試料170)

横断面：年輪のはじめにやや小型で丸い道管がほぼ単独、あるいは2～3個複合して数列配列して、晩材部で小道管がおもに放射方向に複合して散在する火炎状に配列する環孔材である。早材部から晩材部にかけて道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。小道管の内壁にらせん肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～2細胞幅である。

以上の形質よりヤマウルシに同定される。ヤマウルシは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の小高木で、高さ8m、径20cmに達する。材はわずかに抗などに用いられる。

3) モチノキ属 *Ilex* モチノキ科 (第206図 試料167)

横断面：小型でやや角張った道管が、単独ないし2～数個放射方向に複合して散在し、全体として放射方向につらなる傾向を示す散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～40本ほどである。放射組織は異性である。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で2～6細胞幅で上下の縁辺部の直立細胞が長くつらなる多列ものと、単列で直立細胞のみからなるものがある。

以上の形質よりモチノキ属に同定される。モチノキ属にはモチノキ、アオハダ、クロガネモチ、イヌツゲなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑または落葉性の高木または低木である。材は器具などに用いられる。

4) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 (第207図 試料166)

横断面：小型の道管が、単独ないし2個複合して均等に分布する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く100を越えることがある。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、ほとんどが単列であるが、まれに2列のものが存在する。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、通常高さ8~10m、径20~30cmである。材は強靭、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

5) ヒサカキ属 *Eurya* ツバキ科 (第207図 試料169)

横断面：小型の道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く100を越えるものもある。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1~3細胞幅であるが2列幅のものが多い。

以上の形質よりヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径30cmである。材は強さ中庸で、器具などに用いられる。

6) 草本 grass

横断面、放射断面、接線断面共に木本の特徴を示さない。

4. 樹種から推定される植生について

同定された樹種は、スダジイおよびシイ属が多く、サカキ、ヒサカキ属、モチノキ属、ヤマウルシが見られた。当時の遺跡周辺には、これらの樹種を主体とした暖温帶性の照葉樹林が分布していたものと推定される。

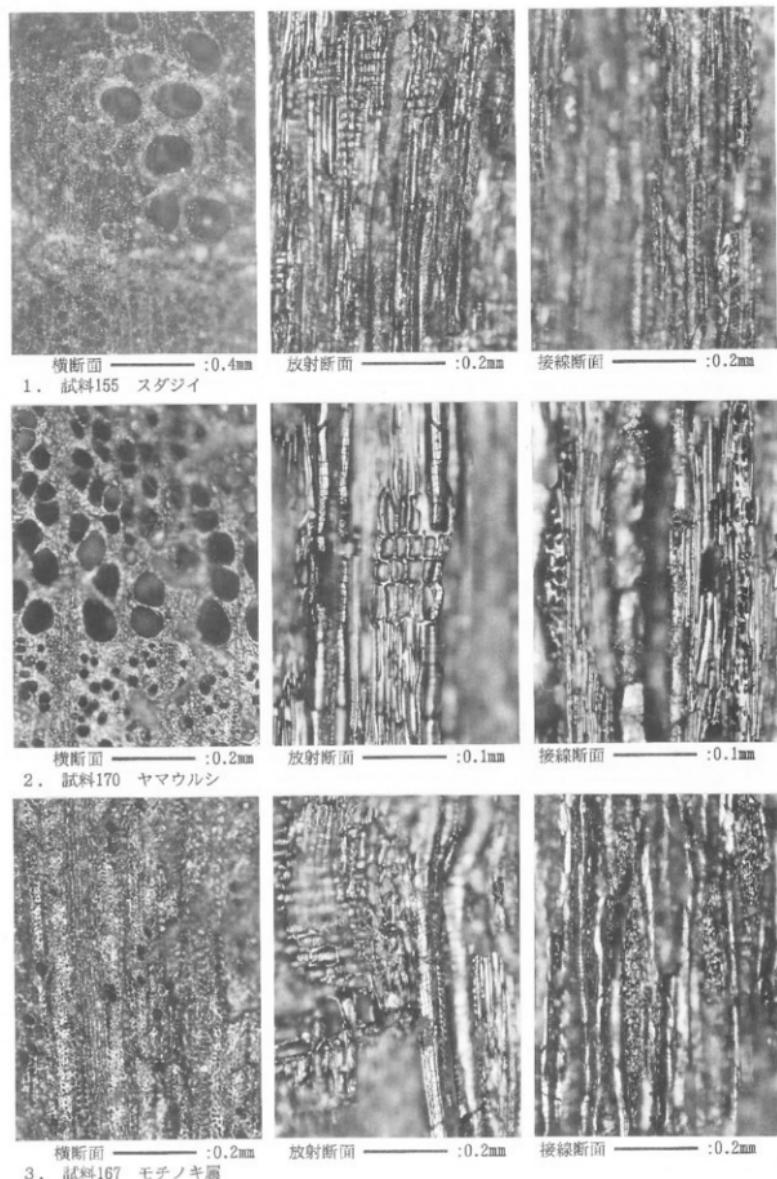
[参考文献]

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞、木材の構造、文水堂出版、P.49-100。

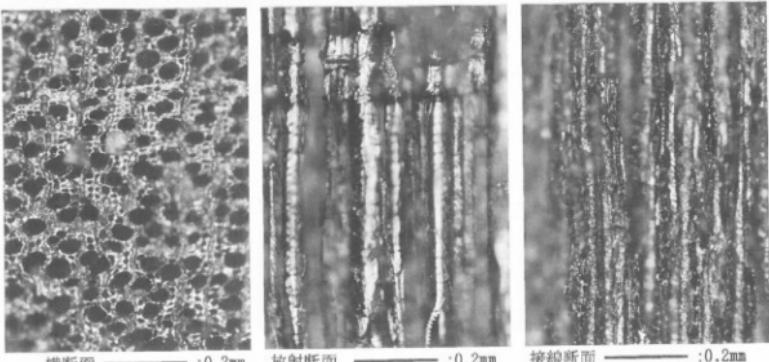
表161 炭化材の樹種同定結果一覧

試 料		樹 種 (和 名 / 学 名)	
2区			
155	SB 204	炭No.9	スタジイ <i>Castanopsis sieboldii Hatusima</i>
156	SB 204	炭No.12	モチノキ属 <i>Ilex</i>
3区			
158	SB 302	炭No.2	シイ属? <i>Castanopsis?</i>
159	SB 302	炭No.3	草本 <i>grass</i>
165	SB 303	炭No.1	サカキ <i>Cleyera japonica Thunb.</i>
166	SB 303	炭No.2	サカキ <i>Cleyera japonica Thunb.</i>
167	SB 303	炭No.4	モチノキ属 <i>Ilex</i>
168	SB 303	炭No.5	シイ属 <i>Castanopsis</i>
169	SB 303	炭No.6	ヒサカキ属 <i>Eurya</i>
170	SB 303	炭No.7	ヤマウルシ <i>Rhus trichocarpa Miq.</i>
171	SB 303	炭No.8	ヤマウルシ <i>Rhus trichocarpa Miq.</i>
172	SB 303	炭No.9	ヤマウルシ <i>Rhus trichocarpa Miq.</i>
173	SB 303	炉内炭No.1	サカキ <i>Cleyera japonica Thunb.</i>
174	SB 303	炉内炭No.2	スタジイ <i>Castanopsis sieboldii Hatusima</i>
4区			
176	SB 401	炭No.2	スタジイ <i>Castanopsis sieboldii Hatusima</i>
177	SB 401	炭No.5	シイ属 <i>Castanopsis</i>
178	SB 401	炭No.2	シイ属? <i>Castanopsis?</i>
179	SB 403	炭No.1	シイ属? <i>Castanopsis?</i>
180	SB 403	炭No.3	スタジイ <i>Castanopsis sieboldii Hatusima</i>
5区 C			
5区 A			
187	C-7	III-①層炭No.1	スタジイ <i>Castanopsis sieboldii Hatusima</i>

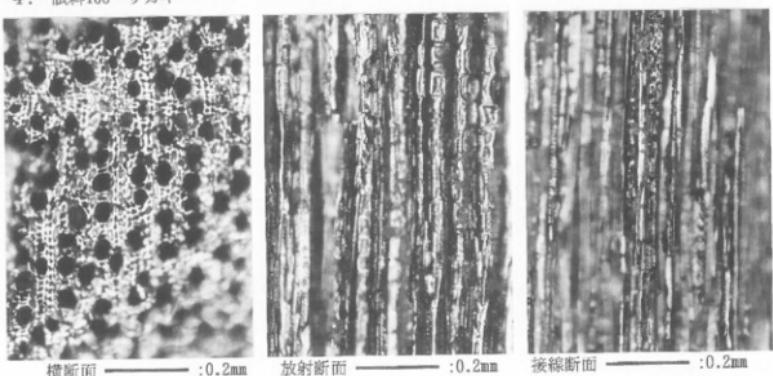
第206図 東本遺跡4次調査出土炭化材の顕微鏡写真 I



第207図 束本遺跡 4次調査出土炭化材の顕微鏡写真Ⅱ



4. 試料166 サカキ



5. 試料169 ヒカキ属

VII. 東本遺跡4次調査における花粉分析

1. 試料

炭化物および炭化材の試料に堆積物が含まれていたので花粉分析を行った。試料は、2区のNo154 (SB205、ベット埋土)、No157 (SB204、No88土器内)、3区のNo160 (SB302、粘土No1)、No161 (SB302、粘土No2)、No162 (SB302、No249土器内)、No163 (SB302、No250土器内)、No164 (SB302、No270土器内)、No175 (SB303、No303土器内)、4区のNo181 (焼土①)、No182 (SB404内SK3焼土)、5区CのNo183 (SB502、No624土器内)、No184 (SB502、No596土器内)、No185 (SB502、No618土器内)、No186 (SB502、No622土器内) の計14点である。

2. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
 - 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
 - 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
 - 4) 水洗した後、冰酢酸によって脱水し、アセトトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
 - 5) 再び冰酢酸を加えた後、水洗を行う。
 - 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレラートを作製する。
- 以上の物理・化学的各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉(1973)および中村(1980)をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科・亜科・属・亜属・節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイホン(・)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

3. 結果

出現した分類群は、樹木花粉5、草本花粉6、シダ植物胞子2形態の計13である。これらの学名と和名および粒数を表162に示し、主要な分類群を写真(第208図(1)(2))に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

マツ属複管束亞属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、アブラナ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

單条溝胞子、三条溝胞子

4. 考 察

分析の結果、いずれの試料も花粉が極めて少なかった。No157とNo183ではヨモギ属がやや多く、試料が乾燥した環境下で生成されたことを示唆している。他の試料についても、木成の堆積物ではなく、やや乾燥的な環境下で分解作用を受けて生成されたものと考えられる。

〔参考文献〕

- 中村純（1973）花粉分析、古今書院、p.82-110.
金原正明（1990）花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p.
中村純（1960）日本産花粉の標本、大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p.

表162 東木道跡4次調査における土器内堆積物および発土の花粉分析結果

学名	分類名	2区		3区		4区		5区							
		和名		154	157	160	161	163	164	175	181	182	183	184	185
<i>Arboreal pollen</i>															
<i>Pinus subgen. <i>Diploxylon</i></i>	樹木化粉														
	マツ属複雜管状亞属														
	スギ														
<i>Cryptomeria japonica</i>				1											
<i>Taxaceae-Cyathiditese-Carexzone</i>															
<i>Quercus subgen. <i>Lepidobalanus</i></i>															
<i>Quercus subgen. <i>Cyclobalanopsis</i></i>															
<i>Nonarboreal pollen</i>															
<i>Gramineae</i>	草本花粉														
	イネ科	2	1												
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科		2												
<i>Cruciferae</i>	アブラナ科		4												
<i>Lauraceae</i>	タンボク科		1												
<i>Asteroidae</i>	キク科		1												
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属		1	7	1	2	1								
<i>Fern spore</i>															
<i>Monolete type spore</i>	シダ植物孢子														
<i>Trilete type spore</i>	單条溝孢子	2													
<i>Arboreal pollen</i>															
<i>Nonarboreal pollen</i>	樹木花粉	0	0	0	4	0	2	0	0	0	1	0	1	0	0
	草本花粉	1	17	2	5	2	5	1	2	0	0	0	14	0	2
	花粉總數	1	17	2	9	2	7	1	2	0	1	14	1	2	1
<i>Total pollen</i>	未同定花粉	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
<i>Unknown pollen</i>	シダ植物孢子	0	3	0	0	2	1	0	0	0	0	0	2	0	0
<i>Fern spore</i>															

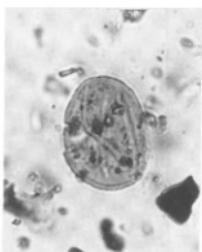
第208図 東本遺跡 4次調査の花粉遺体(1)



1 イネ科-イヌクサ科ヒメクサ科



2 コナラ属コナラ亜属



3 コナラ属アカガシ亜属



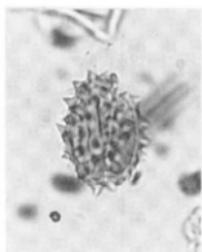
4 イネ科



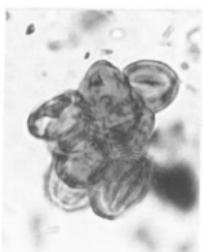
5 イネ属型



6 アブラナ科



7 キク亜科

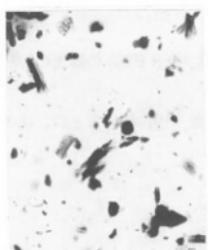


8 ヨモギ属集塊

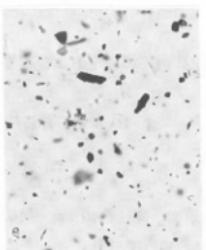
45 μ m

花粉分析

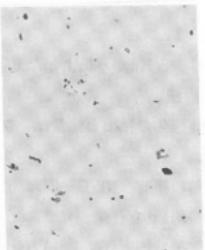
第208図 束本遺跡 4次調査の花粉遺体(2)



9 2区157



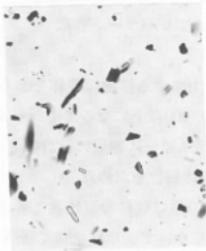
10 3区160



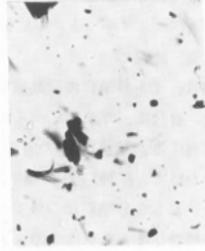
11 4区181



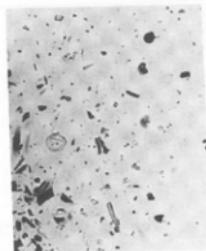
12 4区182



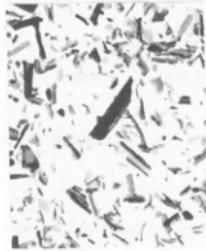
13 5区183



14 5区184



15 5区185



16 5区186

—45 μ m

VII. 枝松遺跡4次調査地の植物珪酸体分析

1. 試 料

試料は、SK1から出土した土器(722)内部の埋土および掘立1の柱穴(S P95)の埋土の2点である。

2. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1979)をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾(105℃・24時間)
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスピーブ添加(直径約40μm・約0.02g)
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散(300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子(20μm以下)除去、乾燥
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の検査に相当する。試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーブ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10⁻⁵g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。

3. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表163・164図に示した。

〔イネ科〕

機動細胞由来:イネ、キビ族型、ウシクサ族型、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(おもにクマザサ属)、メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節・ヤダケ属)、タケア科(未分類等)

その他:表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

4. 考 察

(1) SK1

中・近世とされる上器内の埋土について分析を行った。その結果、ネザサ節型や棒状珪酸体、ウシクサ族型などが検出されたが、いずれも小量である。また、イネも検出されたが、密度は800個/gと微量である。以上のことから、当時は遺跡周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形で土器内にイネの植物珪酸体が混入したものと推定される。

(2) 掘立1

中世(13~14世紀)とされる掘立1の柱穴(S P95)の埋土について分析を行った。その結果、ネザサ節型や未分類等のタケア科、棒状珪酸体が多量に検出され、イネ、キビ族型、クマザサ属型、メ

ダケ節型なども検出されている。イネの密度は5,300個／gと高い値であり、水田跡（稻作跡）の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個／gを超えており、おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、ネザサ節型が卓越しており、次いでイネが多くなっていることが分かる。

これらのことから、当時はネザサ節などのタケ亜科植物が繁茂する状況であったが、周辺では稻作が行われており、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したものと推定される。

表163 枝松遺跡4次調査の植物珪酸体分析結果
検出密度(単位: ×100個/g)

分類群／試料	SK 1	掘立 1
	722	SP 95
イネ科		
イネ	8	53
キビ族型		15
ウシクサ族型	23	61
タケ亜科		
ネザサ節型	69	710
クマザサ属型	8	92
メダケ節型	23	15
未分類等	92	671
その他イネ科		
表皮毛起源		23
棒状珪酸体	115	763
未分類等	207	1099
(海綿骨針)	8	61
植物珪酸体総数	543	3502

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m²・cm)

イネ	0.22	1.57
ネザサ節型	0.33	3.41
クマザサ属型	0.06	0.69

*試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

〔参考文献〕

- 杉山 真二 1987 タケ亜科植物の機動細胞壁珪酸体、富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83.
- 藤原 宏志 1976 プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) -イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-, 考古学と自然科学、9、p.15-29.
- 藤原 宏志 1984 プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) -プラント・オパール分析による水田跡の探査-, 考古学と自然科学、17、p.73-85.

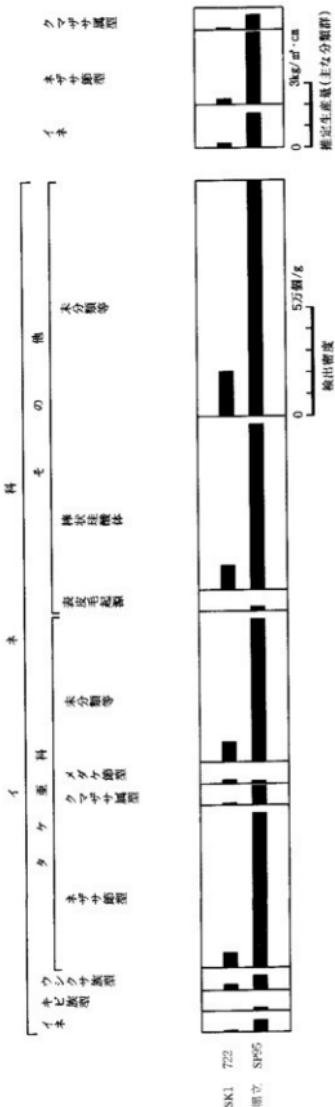


表164 杉松調査4次調査の植物珪酸体分析結果

第18章 付編 東本遺跡・桑原高井遺跡出土の弥生土器

梅木謙一

はじめに

東本遺跡では既に3次の調査が実施され、弥生時代末期の集落の存在が明らかとなっている。また、隣接する桑原高井遺跡も既に3次の調査が実施され、東本遺跡と同時期の集落関連遺構が確認されている。二つの遺跡の調査結果は松山市文化財調査報告書14集（松山市教育委員会 1980）として報告がなされ、その概要是知られるところである。

本稿では、東本遺跡4次調査の弥生集落の構造をより明らかにするため、二遺跡6調査において未報告である弥生時代資料の紹介を行い、集落構造分析の一助とするものである。

（1）東本遺跡

1) 1次調査

1976年、東木2丁目地内の道路工事に伴う調査である。堅穴式住居址の一部とみられる遺構1基と溝状造構が検出されている。第209・210図の1～17は出土品の一部である。ただし、詳細な出土地点は定かでない。

1～4は壺形土器である。1は大型品で、「く」の字状口縁と頸部に木口押圧の刻目凸帯をもつものである。2は一部を欠損するが復元完形品となるものである。長胴で、張りの弱い肩部をもつ。底部は大きい平底である。口縁部径と胴部径はほぼ等しいものである。3は「く」の字状口縁で、張りの強い肩部をもつものである。4は胴下半部片で、胴部下半がしづまり、小さく突出する底部は平底となる。

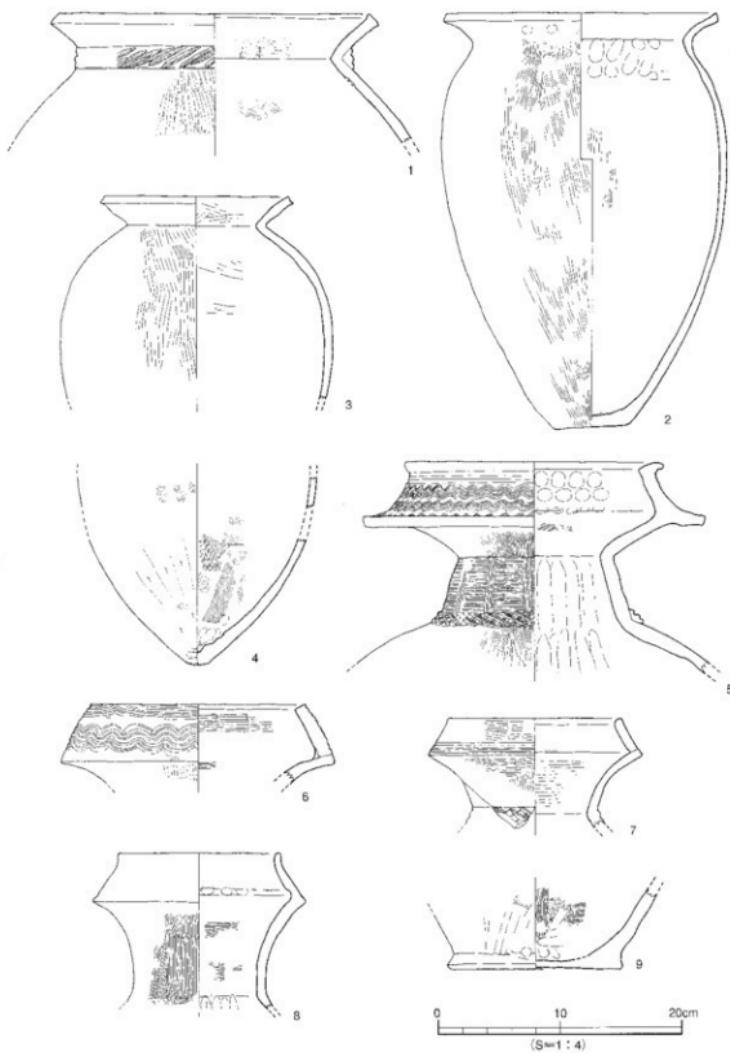
5～12は壺形土器である。5～8は複合口縁壺である。5は1次口縁と2次口縁の接合部（以下、「口縁接合部」と略記する）が「コ」の字状に突出するもので、頸部に著しい拗描文をもつ。6～8は口縁接合部が「く」の字状を呈するものである。9～12は胴部～底部の破片である。9は大型品で広い平底をもち、10～12は中～小型品で底部は立ち上がりをもち平底となるものである。

13・14は鉢形土器である。13はゆるやかに外反する口縁部、14は内湾して立ち上がる直口口縁をもつものである。

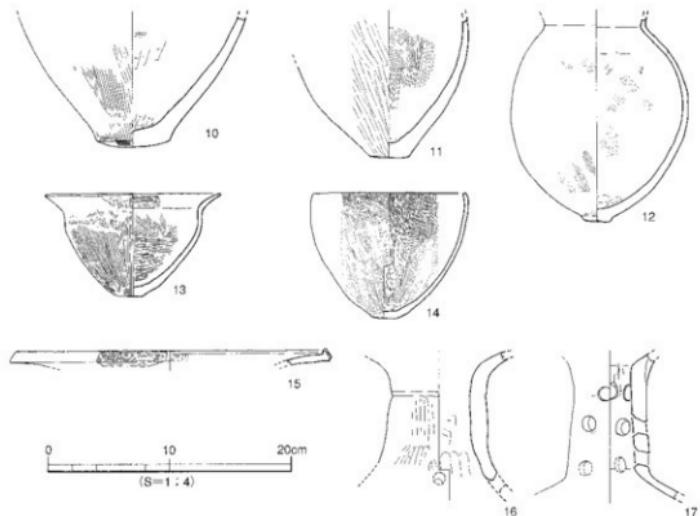
15は高環形土器の坏部である。脚部は有段で、柱部が円柱状を呈する高環形土器の坏部片である。口縁端部は拡張し、櫛模波状文と竹管文入りの円形浮文をもつ。

16・17は器台形土器である。16は瓶部に円孔をもち、柱上部に工具による段をもつものである。17は柱部に3段の円孔をもつものである。

東本遺跡1次調査資料は、壺形土器1を除くと2～17は弥生後期後葉から末に時期比定されるものである。住居址が検出されたという報告があり、住居址もこれ等の土器と時期を同じくするものと考えられる。なお、1は後期前葉に比定されるものである。



第209図 東本1次A区出土遺物実測図 (1)



第210図 東本1次A区出土遺物実測図(2)

2) 2次調査

1977年、松山市東本町98番地の造成工事に伴う調査である。主たる遺構には、竪穴式住居址2棟がある。

S B01 平面形態は円形で、直径9.7~10m、床面積78m²である。内部には、正柱穴が壁体沿いに6基、中央の炉を囲むように4基が検出されている。炉は中央にあり、炉に付帯する土坑1基がある。出土物には、弥生土器と鉄鏃（未掲載）があり、弥生土器は数点の完形品を含んでいる。

菱形土器（18~25） 「く」の字状の口縁部をもつものである。内面に稜をもって折り曲げられる口縁部は、端部は直線をなしている。胴部は肩部に張りをもつものがみられ、胴下半部はわずかに膨らみをもっている。

壺形土器（26~45） 26~32は複合口縁壺である。口縁接合部は、「コ」の字状を呈するもの26~28と、「く」の字状を呈するもの30~32がある。前者は櫛描文で加飾され、後者は無文である。33~35は長い口縁部をもつものである。34と35は直線的に立ち上がる口縁部をもつ。35~37は細かい櫛描文が施され、器壁も薄い特徴をもつ。38は胴部片で、やや太い櫛描文がみられる。39は口縁部片で、端部には凹線文を4条もつ。40~45は胴下半部~底部の破片である。40~43は底部が厚く、平底の底部はやや突出ぎみで丸みをもつ。44~45は突出する小さい平底をもつものである。

鉢形土器（46~53） 折り曲げ口縁をもつもの46~48と直口縁をもつもの52がある。49~51は底部片で折り曲げ口縁をもつものと思われる。53は平底で、梢円形を呈している。



第211図 束本遺跡 2次調査地造構配置図

高坏形上器（54～62） 54～56は坏部である。61・62は脚部片で、ゆるやかに開く裾部をもつ。56は脚部が有段となり、柱部が円柱状を呈するものである。57～60は脚部片である。59～61には円孔がみられる。

器台形土器（63・64） 63・64は受部である。63は大型品で、64は中型品である。63は端部に沈線文をもち、64は端部が上下に小さく拡張される。

S B02 平面形態は長方形で、一辺9×7.2m、床面積約64.8m²である。内部には主柱穴が6基あり、中央に焼土をもつピットが1基ある。また、中央のピットの南には、S B01と同じ形態を呈する付帯施設をもつ。出土品には弥生土器があり、いずれも小片である。

壺形土器（67） 半底の底部をもつものである。本住居からの壺形土器の口縁部片の出土はない。

壺形土器（65・66・69～72） 65は複合口縁壺で、口縁接合部は「く」の字状となる。66は扁平球の胴部をもつもので、底部は小さく突出し平底となる。69～72は器壁が薄く、櫛描文で加飾されたものである。

鉢形土器（73） 73は直口口縁をもつものである。

高坏形土器（74・75） 74・75いずれも櫛描文の細かい文様をもつものである。

このほか、出土地点は定かではないが76～78の土器が出土している。76・77は弥生前期の壺形土器である。78は筒状の部位をもつものであるが、器種と形態は不明である。

東本遺跡2次調査資料は、住居址2棟の資料を取り上げたが、出土物はいずれも同時性の高いものであり、特にS B01は出土量も多く良好な資料といえる。

S B01は、器種に壺形土器・壺形上器・鉢形土器・高坏形土器・器台形土器がある。壺形土器は全て半底で、胴下半部は叩き痕をもつものがない。壺形土器は複合口縁を主体とし、櫛描文で加飾された細長頸壺がある。鉢形土器は突出する平底でやや大きいものである。よってS B01の時期は、各種の特徴より梅木編年後期II～後期III（古相）に比定する。

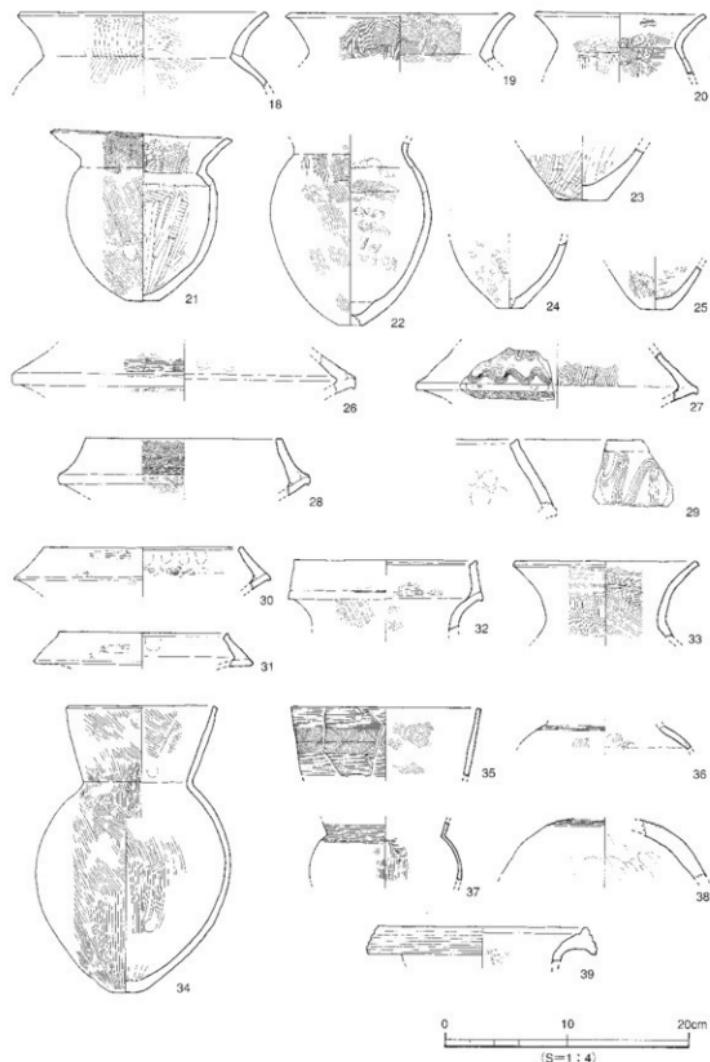
S B02は、器種に壺形土器・壺形上器・鉢形土器・高坏形土器がみられる。各種の特徴はS B01と大差なく、特に71～75にみられる細かい櫛描文様はS B01の壺35～37と同じ様相を呈するものである。よって、S B02の時期はS B01と大差ないものと考える。

さて、S B01とS B02の距離は5mと離れてない。この距離が堅穴式住居の構造上、同時に存在することが可能であるかは、確かな意見を持ち合わせない。さらに、上器による差も求められない。したがって、2棟は同時ないしわずかな時間差で存在したものと考えておき、特定の結論は保留するものである。

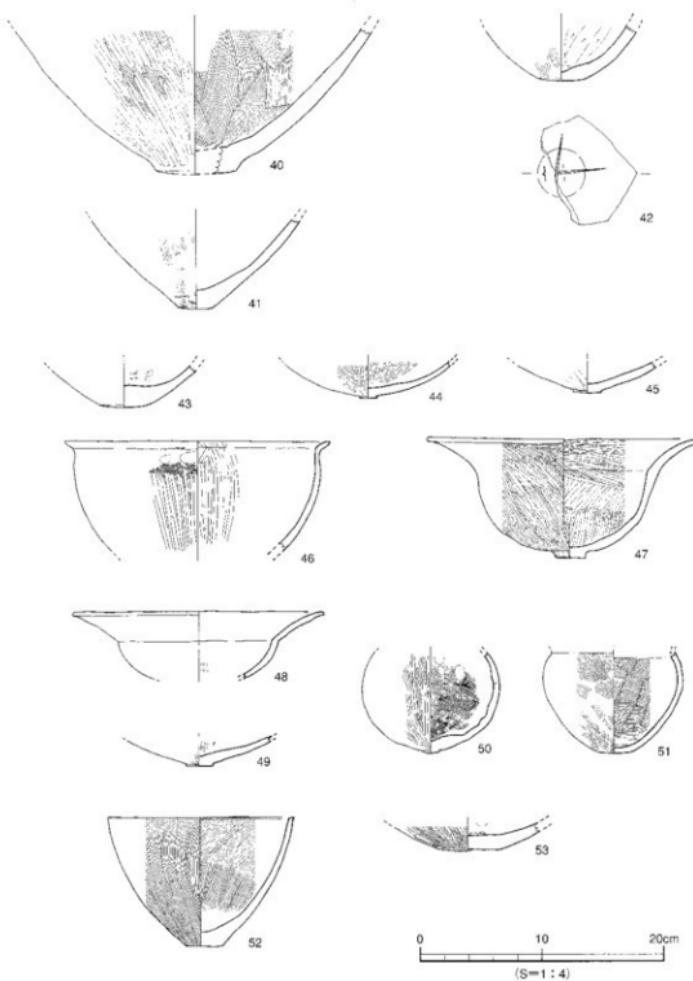
3) 3次調査

1977年、東本1丁目5内で2次調査につづいて調査を実施したものである。主たる遺構には、堅穴式住居址1棟がある。

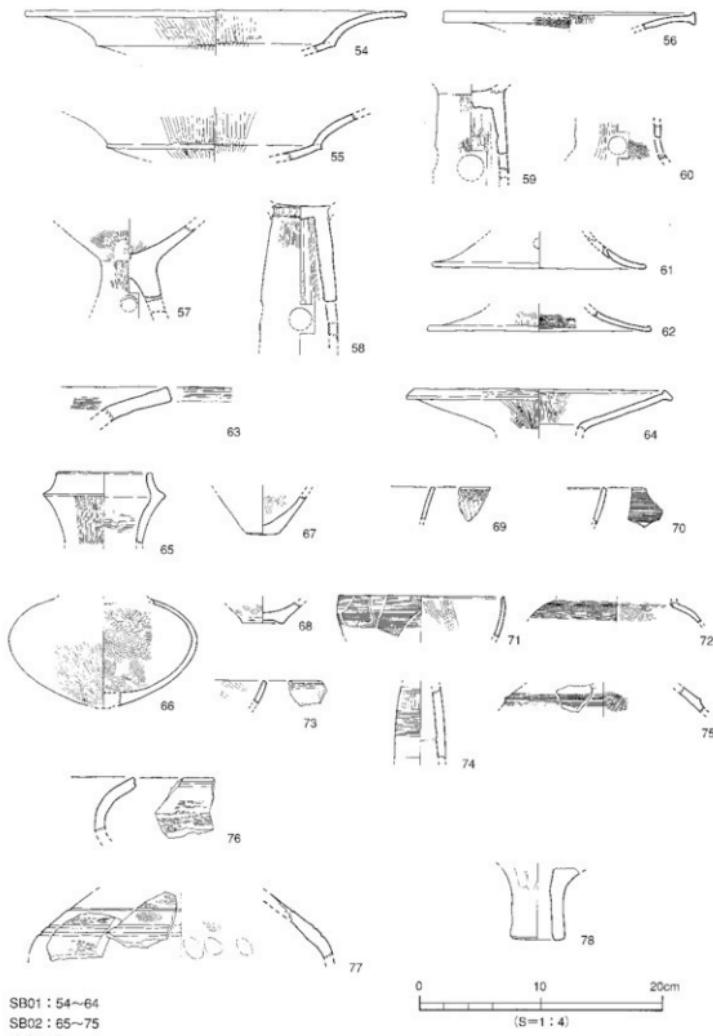
S B01 平面形態は長方形を呈し、一辺3.5～4.7m、床面積約16.4m²である。内部には主柱穴が4基あり、炉を挟むように東西に1基づつピットがみられる。出土物は、住居の南西隅にある土坑内（P13）からは完形品2点と破片2点が出土している。



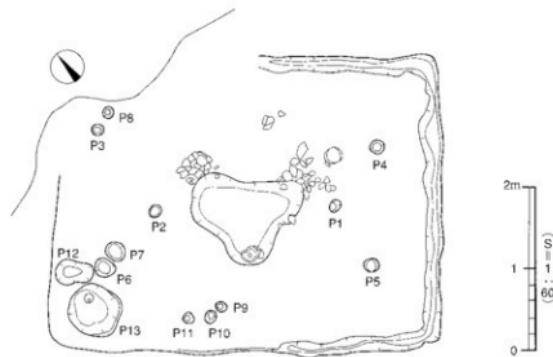
第212図 東本2次SB01出土遺物実測図（1）



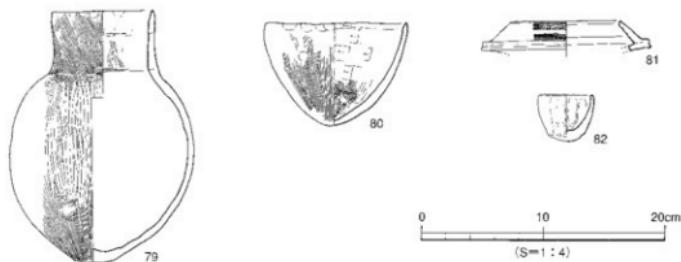
第213図 東本2次SB01出土遺物実測図（2）



第214図 束本2次SB01(3)・SB02・地点不明出土遺物実測図



第215図 東本遺跡3次調査地SB01測量図



第216図 東本3次SB01内P13出土遺物実測図

壺形土器（79・81） 79は完形品である。直口口縁に、長球形の胴部もつ。底部は曖昧な立ち上がりをもち、丸みのある平底となる。81は小片である。複合口縁壺で、口縁接合部は「コ」の字状を呈する。

鉢形土器（80） 80は完形品である。直口口縁に尖りぎみの丸底をもつ。

ミニチュア品（82） 82はミニチュア品の破片である。鉢形土器の形態を呈している。

東本遺跡3次調査SB01では、壺形上器・鉢形土器・ミニチュア品が出土している。資料が少なく時期決定は難しいが、鉢形土器が丸底であるため後期Ⅲに比定される。東本遺跡2次調査SB01・02と比べると、本住居は幾分新しい土器様相をもっている。

(2) 桑原高井遺跡

1) 1次調査

1975年、松山市桑原町782ほかにおける建物建設に伴う調査である。主たる遺構には、堅穴式住居址5棟、土坑10基、溝3条がある。

S B01 平面形態は隅丸方形を呈し、一辺5.1×5.7m、床面積29m²である。主柱穴は壁体沿いに6基と中央に1基みられる。南壁には2段に落ちる張り出しがあり、北東隅にも張り出し部をもつ。南壁のものは人口的な性格をもつものであるが、北東隅のものは性格が不明である。出土物は、弥生土器と石器がある。弥生土器は北東部の土坑と住居内から出土し、完形品を含む多くの上器が出土している。

① 83～85は北東部の土坑から出土したものである。

壺形土器（83・84） 83・84は肩部が張る胴部に、わずかに凹む底部をもつものである。84は83に比べ胴部下半に膨らみをもつ。

鉢形土器（85） 85は直口口縁をもつものである。厚い平底となる。

② 86～113は住居内出土品である。

壺形土器（86～90） 86は大型品、87は中型品、88～90は小型品である。87は完形品で、長胴で平底をもつものである。88～90は完形及び一部を欠損するものである。88は頭部の綺まりが弱く平底、90は頭部が強く綺まり尖底となる。

壺形土器（91～95） 91・92は複合口縁壺である。92は口縁接合部が「く」の字状となる。93・94は口縁部が短く外反するものである。95は大型品の底部で、平底となるものである。

鉢形土器（96～105） 96・97は大型品、98～104は小型品である。口縁部は折り曲げ口縁のもの96～99と直口口縁のもの100～104がある。105は台付鉢の台部である。

高坏形土器（106） 106は坏部片で、大きく聞く口縁部をもつものである。

器台形土器（107） 107は受部で、口縁部片である。端部は上下に拡張され、端面に半截竹管と円形浮文（竹管入り）をもつ。

支脚形土器（108～112） 108は柱部が中空、109～112は中実となるものである。

ミニチュア品（113） 113は底部片でくびれの上げ底をもつ。

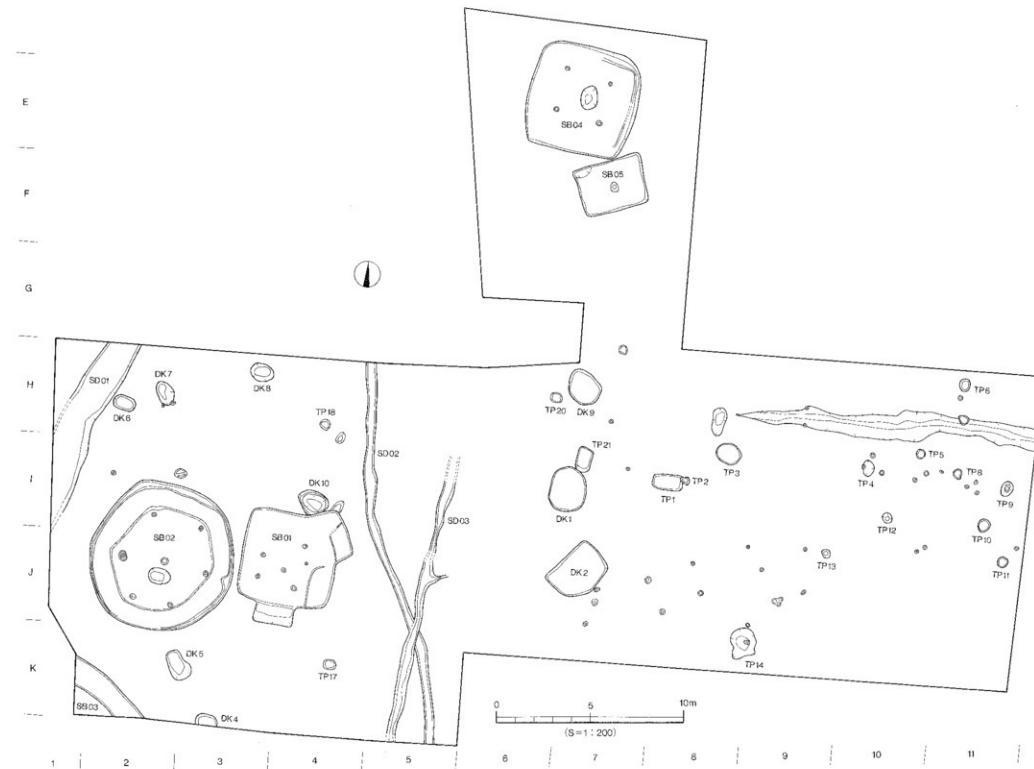
S B02 平面形態は隅丸六角形を呈し、直径7.7～8.1m、床面積約50.5m²である。主柱穴は壁体に沿うように6基と中央に1基がある。炉は中央ピットの南に1基あり、このほか広い高床部をもつ。出土物には弥生土器と石器があり、土器は完形に近い大きな破片も含まれる。

壺形土器（114～122） 114～116は内面に稜をもって外反する口縁部をもつものである。117は一部を欠損するもので、小さく突出しやや広い平底をもつ。118～122は底部片で、いずれも平底となる。

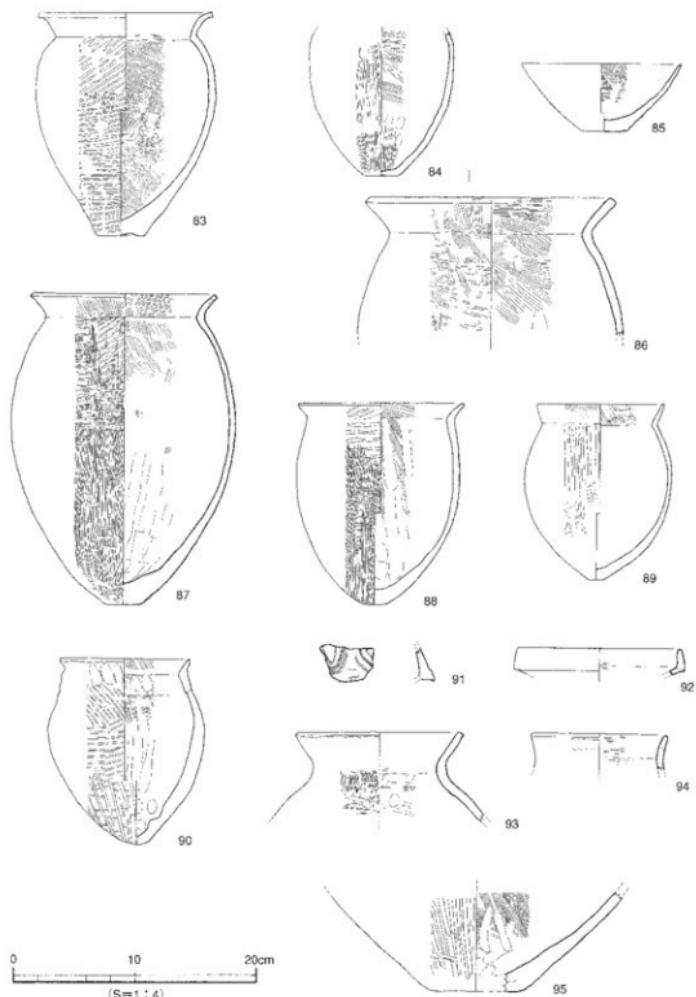
壺形土器（123～137） 123・124は複合口縁壺である。125～129は口縁部が外傾外反するもので、128・129は口縁端部が垂下するものである。130は頭部に沈線文、131は2条1組の沈線（線刻）がみられる。133～137は胴下半部で、底部は小さく突出し、平底133～136と丸底137がある。

鉢形土器（138～148） 折り曲げ口縁をもつもの138～140と直口口縁のもの141～144がある。145～148は底部片で、丸みをもつ底部145～147と小さい立ち上がりをもつ底部148がみられる。

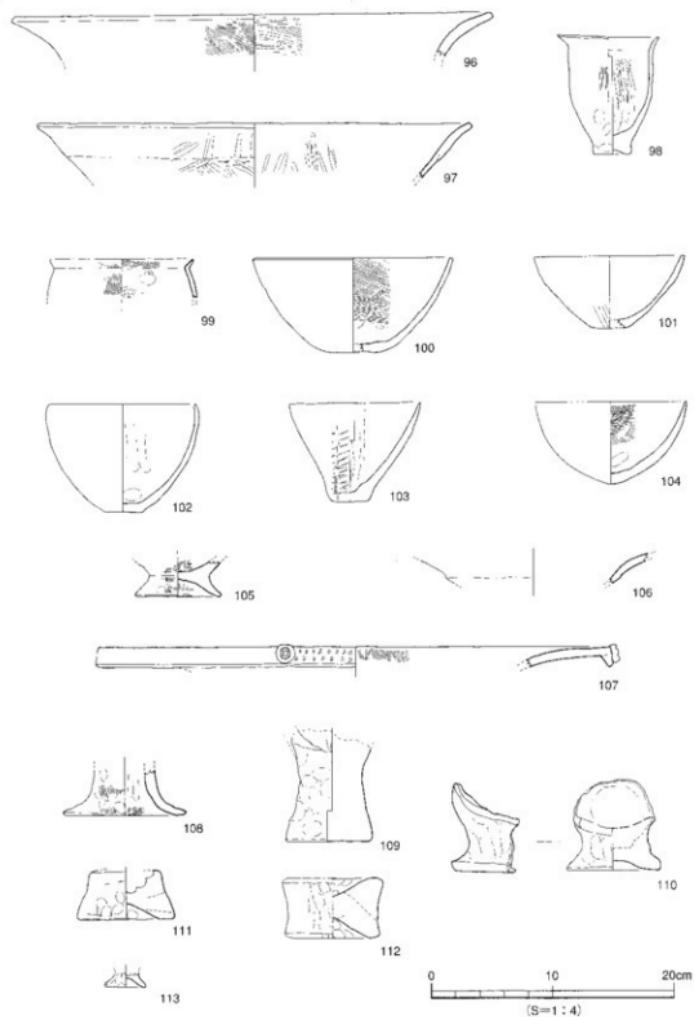
高坏形土器（149） 149は坏部片で、大きく聞く口縁部をもつものである。



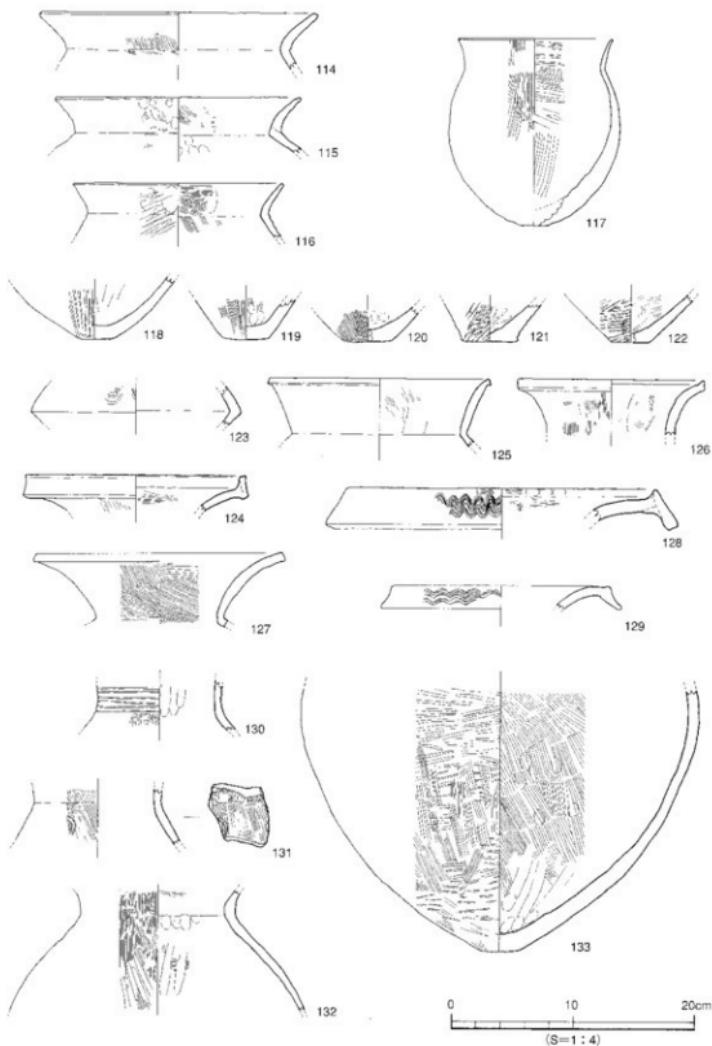
第217図 桑原高井遺跡1次調査地道構配置図



第218図 桑原高井1次SB01出土遺物実測図 (1)

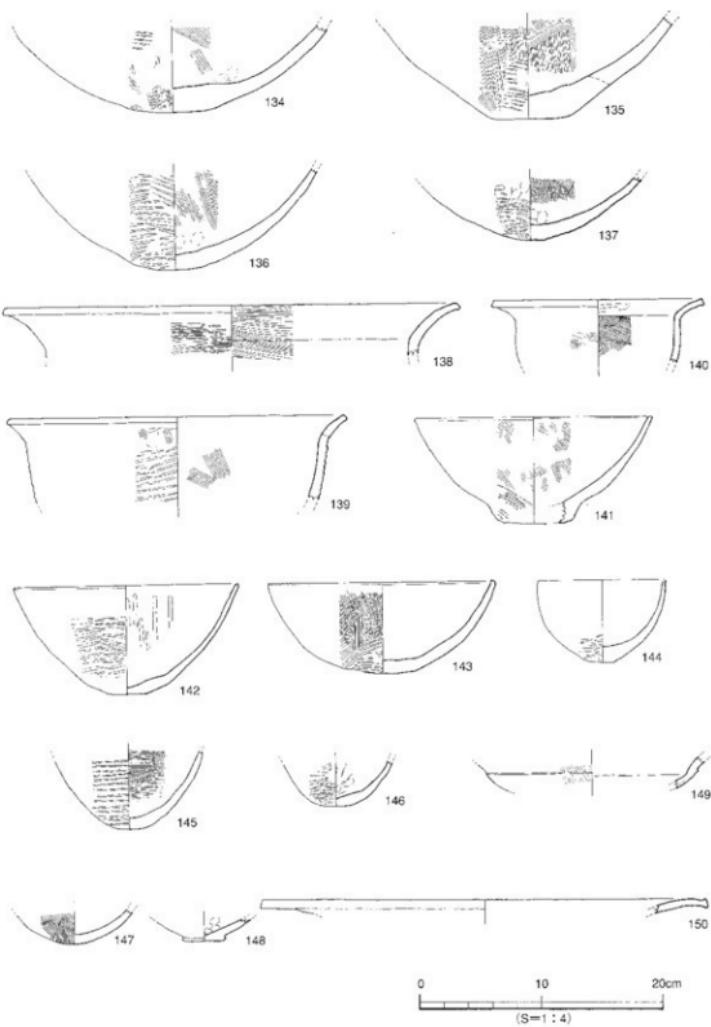


第219図 桑原高井1次SB01出土遺物実測図(2)



第220区 桑原高井1次SB02出土遺物実測図(1)

付編



第221図 桑原高井1次SB02出土遺物実測図（2）

器台形土器（150） 150は受部の口縁部片である。大きく開き、端部がわずかに拡張される。

支脚形土器（151～154） 151は受部に突起をもつものである。152は体部が中空、153・154は体部が中実のものである。

石器（156） 156は砾石である。

なお、155はSB01ないしSB02出土品である。複合口縁壺で、口縁部には櫛描の細かい波状文をもつものである。

SB03 調査区の南西隅で検出したもので、詳細は明らかではない。弥生土器と石器が少量出土している。

壺形土器（157～161） 「く」の字状口縁をもつもので、底部は平底になるものがある。

壺形土器（162・163） 162は複合口縁壺、163は口縁部を欠損するが、口頸部が大きく聞く特徴をもつものである。

鉢形土器（164・165） 折り曲げ口縁のもの164と直口口縁のもの165がある。

器台形土器（166） 166は受部の口縁部片である。器壁がやや厚い。

石製品（167） 167は小型で扁平な石製品である。表面は磨かれている。器種不明。

SB04 平面形態は隅丸方形を呈し、一辺5.5～5.8m、床面積32m²である。土柱穴は4基、炉は中央に1基がある。出土物には弥生土器と土製品があり、弥生土器には完形に近いものが3点含まれる。

壺形土器（168～173） 168・169は「く」の字状口縁をもつものである。169は復元完形品で、著しく長い胴部をもつものである。170～173は底部片で、いずれも平底で、173は丸みが強い。

壺形土器（174～177） 174・175は複合口縁壺である。176は頸部に細かい斜格子目の刻目凸帯をもつものである。

鉢形土器（178～181） 折り曲げ口縁のもの178と直口口縁のもの179・181がある。

高坏形土器（182～184） 182は坏部片、183・184は円孔をもつ脚部片である。

器台形土器（185～188） 185～188は受部片で、上面に櫛描波状文をもつもの185・186がある。

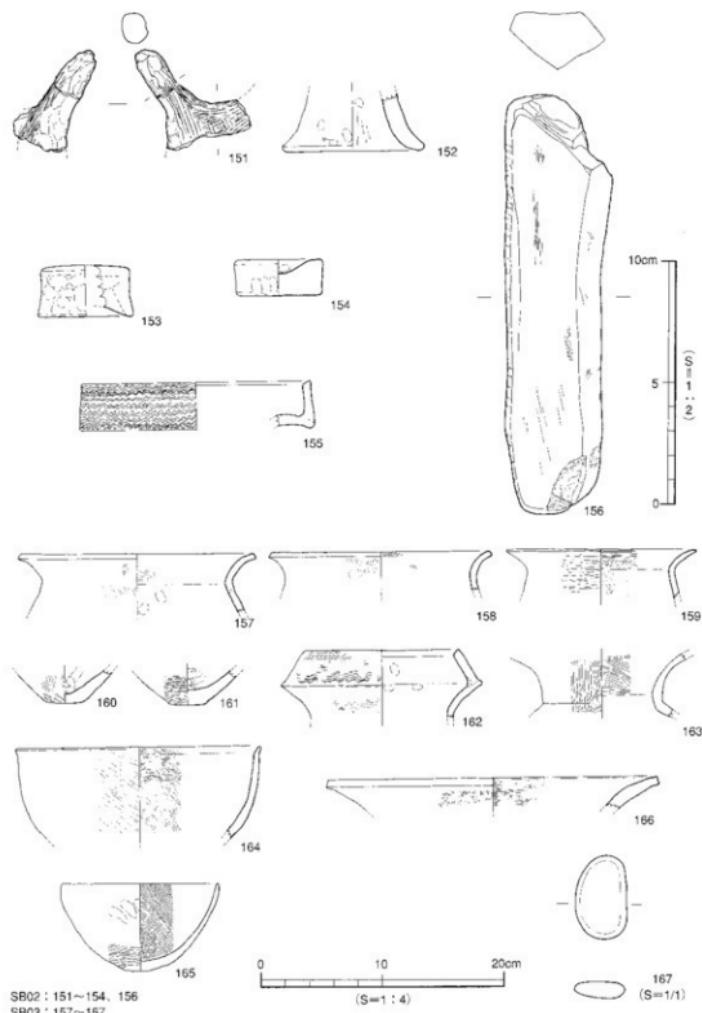
支脚形土器（189～191） 体部が中実なもの189と中空なもの190があり、受部では突起をもつもの191がある。

土製品（192） 直径1.4cmの小型品である。焼成前的小穿孔がみられる。

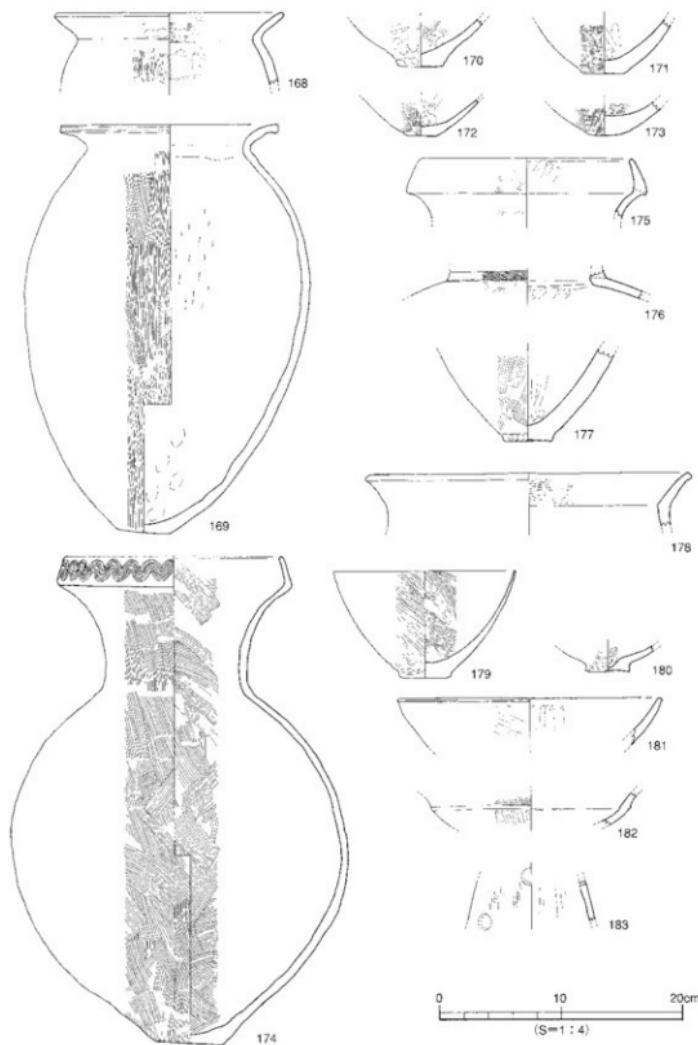
SB05 平面形態は長方形を呈し、一辺2.6×3.8m、床面積9.9m²である。中央にはピットが1基ある。出土物は弥生土器が少量ある。

壺形土器（193） 193は「く」の字状口縁を呈するものである。

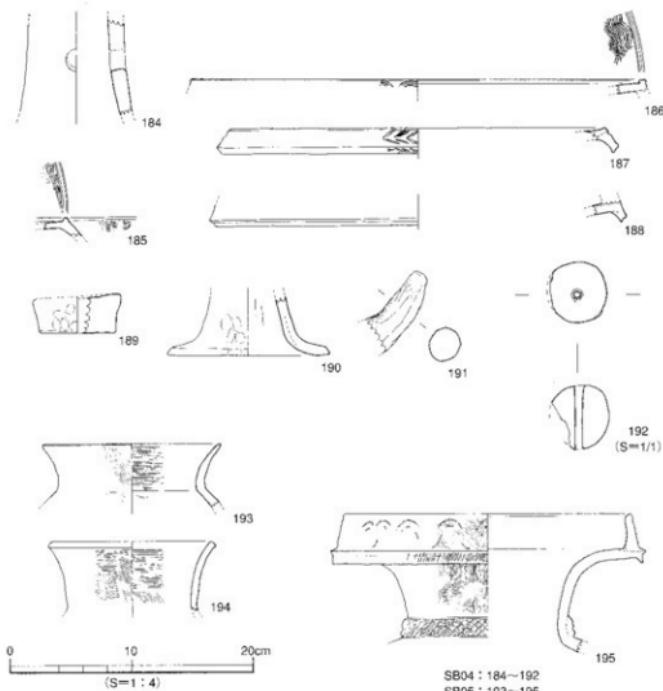
壺形土器（194・195） 194は外傾して立ち上がる口頸部をもち、195は複合口縁をもつものである。



第222図 桑原高井1次SB02(3)・SB03出土遺物実測図



第223図 桑原高井1次SB04出土遺物実測図 (1)



第224図 桑原高井1次SB04(2)・SB05出土遺物実測図

D K 4 削平された遺構の全体ではなく、平面形も不確定なものである。ただし、 $1.2 \times 0.6\text{m}$ 四方のなかに完形品を含む大型の破片が集中して出土しているものである。

甕形土器 (196~199) 196は完形品である。膨らみをもった長球形の胴部に、平底の底部をもつものである。198・199は底部片で、199は丸みをもつ平底である。

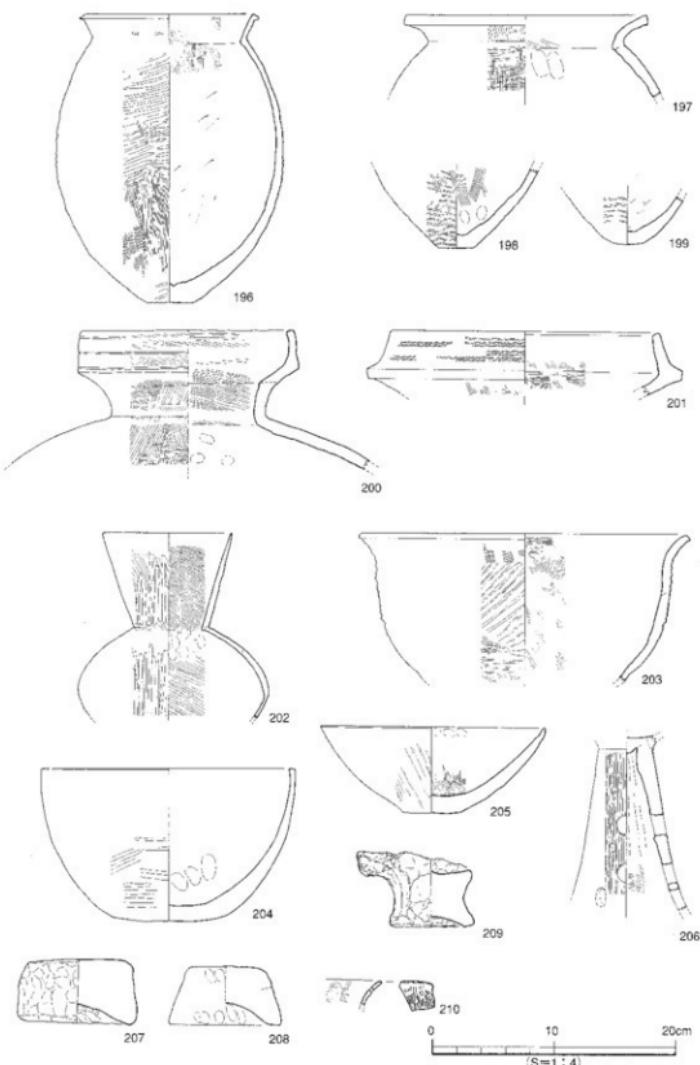
壺形土器 (200~202) 200・201は複合口縁壺、202は直口口縁壺である。202は器壁が薄く、調整も丁寧なものである。

鉢形土器 (203~205) 折り曲げ口縁のもの203と直口口縁のもの204・205がある。

高环形土器 (206) 206は脚部片であり、円孔を2段以上施すものである。

支脚形土器 (207~209) 207・208は受部が平坦なもので、209は突起をもつものである。

土製品 (210) 焼成前的小円孔をもつものである。器種不明。



第225図 桑原高井1次DK4出土遺物実測図

D K 5 平面形態は長方形を呈し、規模は0.9×2.7mである。出土物には大きな土器片が数点ある。

壺形土器（211・219） 211は「く」の字状口縁をもつものである。219は突出する平底である。

壺形土器（212・213・218・220・221） 212は複合口縁壺、213は広口のものである。218・220・221は底部で丸底を呈する。

鉢形土器（214） 214は直口口縁で、丸底を呈するものである。完形品。

支脚形土器（215～217） 受部が平坦なもの215と突起をもつもの216・217がある。

S D 01 S D01は幅1.9m、検出長10mを測る。基底面は広く、断面形態は逆台形状を呈する。圓化したものはS D01の上面にて出土したもので、グリット出土品として取り上げられたものである。S D01に伴う上器と考えられるものである（S D1関連品）。

222・223は壺形土器で、底部は平底と丸みをもつ平底がある。224～228は壺形土器で、225・226は複合口縁壺、227は口縁端部が垂下するものである。228は長頸壺の頸部片で細かい櫛描文をもつ。229・230は鉢形土器で、折り曲げ口縁のものである。231～233は器台形土器で、231は端部に櫛描文、233は柱部に円孔をもつものである。

S D 02 S D02は幅40cm、検出長20m、断面は逆台形を呈す。出土物は弥生土器が少量ある。

壺形土器（234・235・238・240） 234は複合口縁壺で、頸部に櫛描波状文をもつものである。235は大きく聞く口頸部をもち、端部は垂下するものである。238は肩部片で線刻がなされるものである。240は弥生前期の壺形土器で、頸部に沈線文を4条もつものである。

鉢形土器（239） 239は底部片で、突出する底部は小さく凹むものである。

高坏形土器（236） 236は坏部片で、大きく聞く口縁部をもつものである。

器台形土器（237） 237は受部の口縁部片である。端部は垂下し、半截竹管と円形浮文（竹管文付）をもつ。

241～253は、S D02上面で出土した土器で、本来はS D02に伴うものと考えられる資料である。

241～244は壺形土器である。「く」の字状の口縁部と半底の底部をもつ。245～248は壺形土器で、245～247は複合口縁、248は大きく聞く口頸部をもつものである。249・250は鉢形土器である。249は折り曲げ口縁、250は直口口縁のものである。251・252は高坏形土器である。251は柱部片で円孔をもち、252は裾部が有段となる。253は器台形土器である。受部の口縁端面には櫛描波状文をもつ。

S D 03 S D03は幅60cm、検出長15mを測り、断面形態は浅く、逆台形を呈する。出土物には弥生土器があり、完形品を含む大型の破片がみられる。

壺形土器（254～259） 「く」の字状の口縁部で、長い頸部は膨らみをもっている。257・258は一部を欠損するが完形品である。

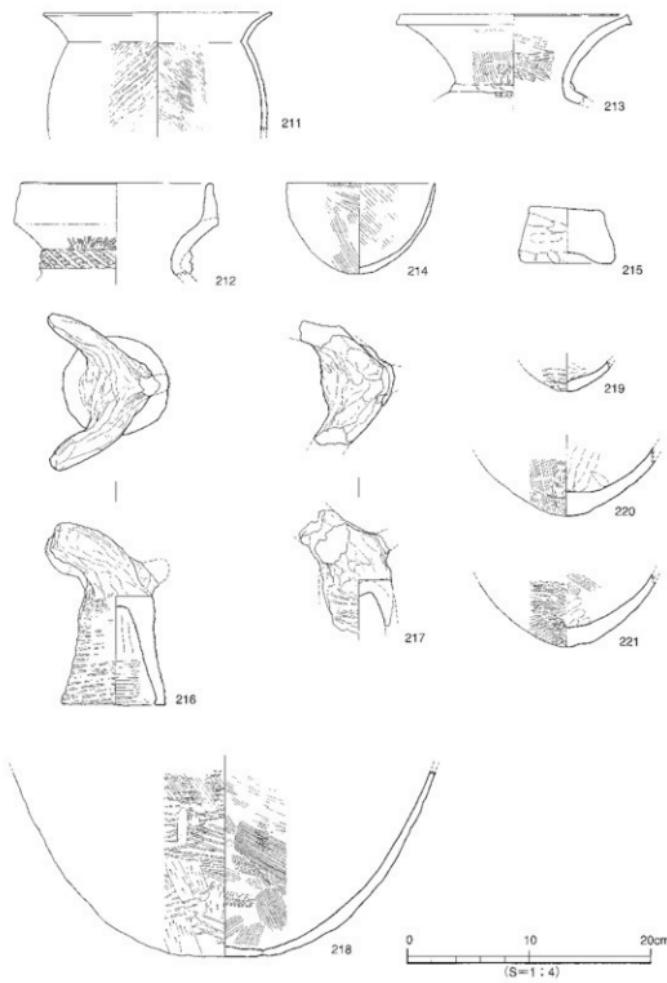
壺形土器（260・261） 260は複合口縁壺、261は大きく聞く口縁部をもつものである。

鉢形土器（262・263） 262・263は直口口縁をもつもので、262は台付鉢に属するものである。

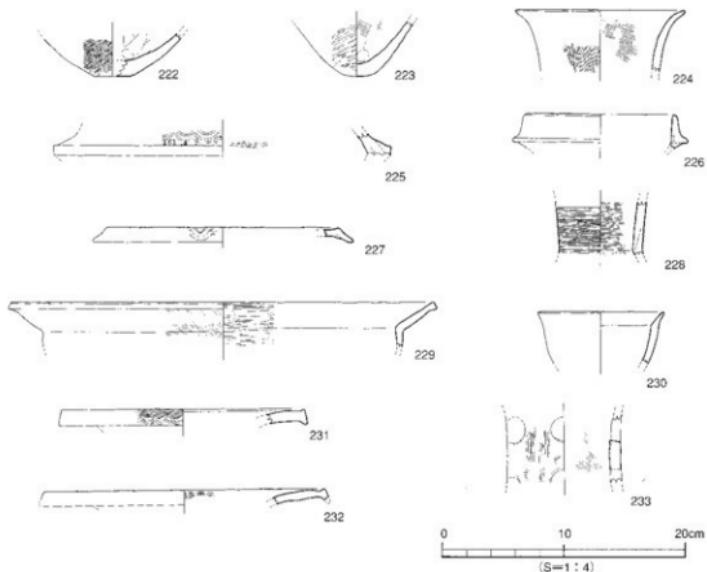
器台形土器（265） 265は受部の口縁部片で、端部は垂下し、罐面には斜線充填の三角文をもつ。

支脚形土器（266） 266は受部が「U」字状に2ヶ所抉られているものである。

コシキ形土器（264） 264は底部に焼成前穿孔をもつものである。



第226図 桑原高井1次DK5出土遺物実測図



第227図 桑原高井1次SD01開連出土遺物実測図

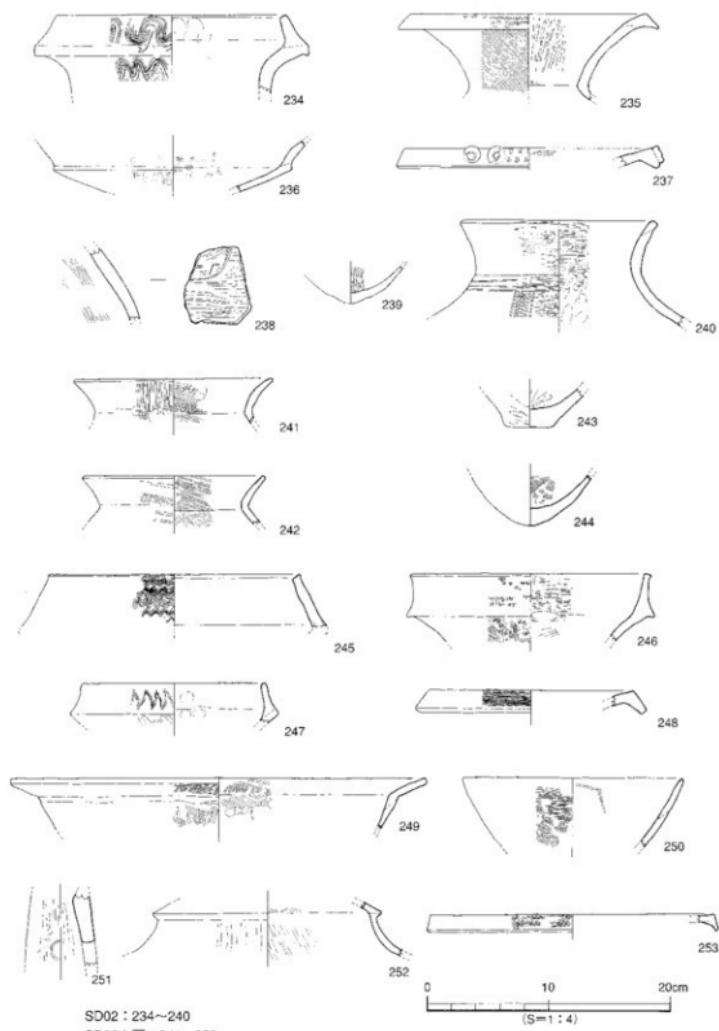
桑原高井遺跡1次調査地内出土品（267～270・273～277） 267は支脚形土器で、受部に小さい突起を4ヶ所以上もつものである。268は壺形土器の口縁部で、端部は内傾して垂下するものである。269は鉢形土器で、直口口縁と丸底の底部をもつ。270は支脚形土器で、柱部が中実になるものである。273～277は石製品である。273・274は石窓丁の未製品である。273は方形で抉りをもち、274は方形で抉りをもつ未貫通の縫部をもっている。275は右鍤で擦切りの溝をもつ。276は用途不明の石製品である。277はSB02出土品と同様で扁平で磨きのある小型石製品である。

調査地周辺の事前調査で出土した土器（271・272） 272は複合口縁壺、271は長い口縁部をもつ鉢形土器である。

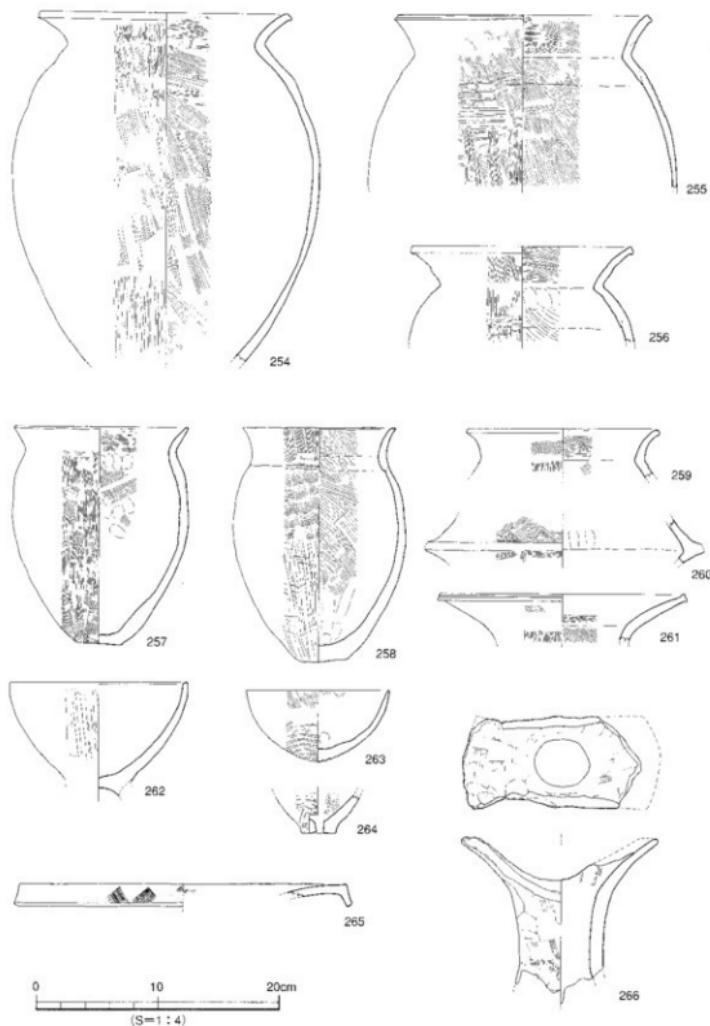
桑原高井遺跡1次調査資料は、溝に関する資料に一部関連資料を掲載しているが、今回提示した各遺構の出土物は同時性の高い資料である。以下、各遺構の出土物を分析し時期比定と遺構の新旧関係について考えてみる。

S B01は器種に壺形土器・壺形土器・鉢形土器・高環形土器・器台形土器・支脚形土器がある。壺形土器は、胴部下に叩き痕をもつものが多く、丸みのある半底や尖底にちかい土器もある。鉢形土器は、叩き痕や小さく突出する底部をもつものがみられる。出土土器の特徴は後期Ⅲに時期比定されるものである。

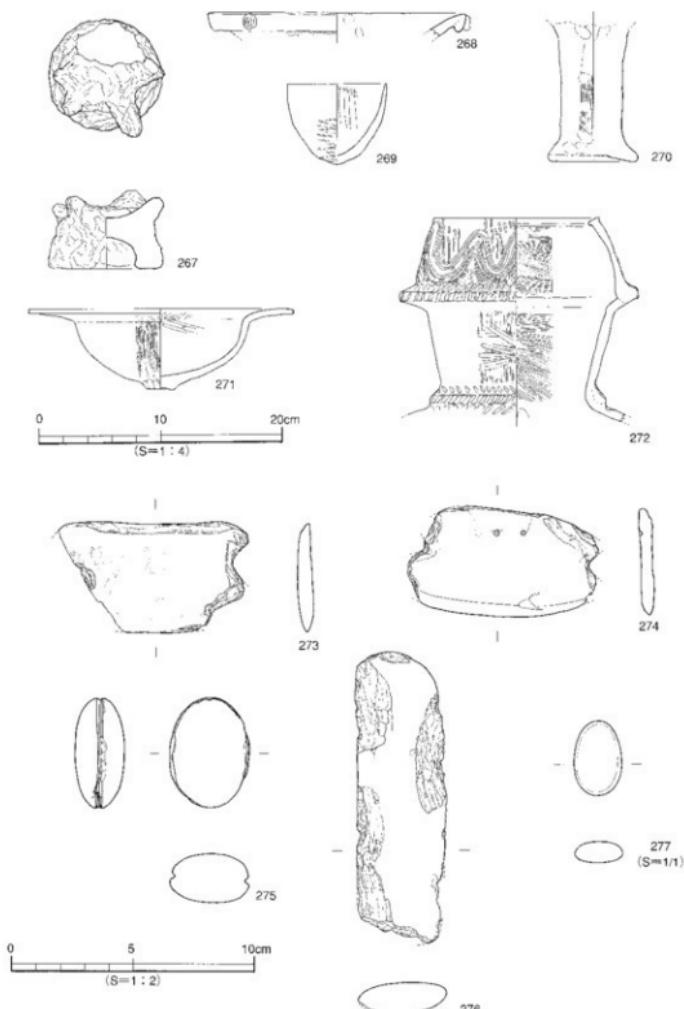
S B02は、器種に壺形土器・壺形土器・鉢形土器・高環形土器・器台形土器・支脚形土器がある。



第228図 桑原高井1次SD02・SD02関連出土遺物実測図



第229図 桑原高井1次SD03出土遺物実測図



第230図 桑原高井1次その他出土遺物実測図

壺形土器は胴部下半に叩き痕をもち、II7のように胴部下半が膨らむものがある。鉢形土器は叩き痕をもち、丸底のものが多くみられる。支脚形土器には突出状の受部をもつものがある。出土土器の特徴は後期Ⅲに時期比定されるものである。

S B03は出土量が少ないが、完形に近い鉢形土器を含んでいる。器種には壺形土器・壺形土器・鉢形土器・器台形土器がみられる。壺形土器は平底で、胴部下半に叩き痕をもつ。鉢形土器は丸みのある底部と叩き痕をもっている。出土土器の特徴は後期Ⅲに時期比定されるものである。

S B04は完形に近い2点の土器を含んでいる。器種には壺形土器・鉢形土器・高坏形土器・器台形土器・支脚形土器がみられる。壺形土器は平底や丸みをもつ平底があり、叩き痕も胴部下半にみられるものがある。支脚形土器は受部に角状の突起部をもっている。出土土器の特徴は後期Ⅲに時期比定されるものである。

S B05は出土物が少ない。器種には壺形土器と壺形土器がある。壺形土器の口縁部は「く」の字形状で、端部が曖昧な面になる。出土土器の特徴は後期Ⅱ～Ⅲに時期比定されるものである。

D K4は完形に近い幾つかの大型破片をもつ。器種には壺形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏形土器・支脚形土器がみられる。壺形土器は底部に平底で丸みをもつものがあり、胴部下半には叩き痕をもつものがある。支脚形土器は受部に角状の突起部をもつ。出土土器の特徴は後期Ⅲに時期比定されるものである。

D K5は大型の破片が少量出土している。器種には壺形土器・壺形土器・鉢形土器・支脚形土器がみられる。壺形土器と壺形土器の底部は平底から突出する丸みのある底部となるものがある。支脚形土器は受部に角状の突起をもっている。出土物の特徴は後期Ⅲに時期比定されるものである。

S D01は関連資料である。壺形土器は底部が平底で、胴部下半に叩き痕をもつ。出土土器の特徴は後期Ⅲに時期比定されるものである。

S D02は、器種に壺形土器・鉢形土器・高坏形土器・器台形土器がある。関連品には壺形土器が多くみられる。壺形土器には大きく広がり、端部が垂下するものがある。出土土器の特徴は後期Ⅲに時期比定されるものである。

S D03は完形品を含む大型破片があり、良好な資料といえる。器種には壺形土器・壺形土器・鉢形土器・器台形土器・支脚形土器・コシキ形土器がある。壺形土器は胴部下半にわずかではあるが叩き痕がみられる。鉢形土器は丸みをもつ尖り底で、叩き底がみられる。出土土器の特徴は後期Ⅲに時期比定されるものである。

以上より、桑原高井遺跡1次調査の各遺構の出土物は、全て後期Ⅲに比定されるものである。

つづいて遺構の新旧関係について考えてみる。S D02と03は切り合い関係にある（S D02が古く、S D03が新しい）が、出土土器の形態的差を求めるることは難しく、よって2つの遺構はわずかな時間差と考えなければならない。S B04と05は接しているが、これは形態差を求めるだけの資料ではなく、時間的な前後関係は判断できない。S B01とS B02は1mと離れておらず、同時存在は想定できない。両住居からは、良好な土器が出土しているが、形態差を求めるのは難しい。あえて求めるならばS B02はS B01よりも壺形土器と鉢形土器の底部に丸いものが多くみられることがあげられ、S B02は新しい土器様相をもつものである。

これら等より、桑原高井遺跡1次調査の主な弥生時代遺構は後期Ⅲ内で存在し、さらに、連続する2

つの異なる時間のものが検出されているものと考える。

(3)まとめ

以上、東本遺跡1~3次調査、桑原高井遺跡1次調査の主たる弥生遺構と出土土器の整理を行った。この結果、東本遺跡2次調査のものは後期II-2~IIIに、同3次調査と桑原高井遺跡1次調査のものは後期IIIに時期比定され、前者と後者の間には若干の時期差が存在している。さらに、桑原高井遺跡2次調査地内では若干の時間差が認められるのである。よって、時間の異なる3つの集落関連遺構が存在しているものと考えられるのである。

一方、松山平野の後期IIIの土器は、これまでに良好な資料が少ないため、その様相は明らかでない部分が多くあった。今回の資料では、後期IIIに器台形土器が少なからず存在することが分かった。後期IIIの器種構成は構成比率を別にすると、後期II-2の器種構成と大差ないことが明らかとなり、後期IIIの土器様相を一部知ることができた。

今後、後期IIIの編年が充実すれば、東本遺跡と桑原高井遺跡の集落構造は、短時間での変遷がより具体的に明らかになるものと思われる。

なお、本稿をなすにあたり、調査担当者である森光晴氏、松村淳氏には多くの御指導を賜った。また、作成にあたり水口あをい氏には多大な協力を得た。記して感謝の意を表すものである。

〔文献〕

森 光晴 1980 「浮穴、西石井荒持塗、東本II・III、桑原高井遺跡」松山市教育委員会

梅木謙一 1991 「松山平野の弥生後期土器—編年試案」「松山大学構内遺跡」松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

遺構・遺物一覧

一凡例一

(1) 以下の表は本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

遺構は水口あをい、遺物は梅木謙一、渡部明日香が作成した。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄()：復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) □→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。()の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長(1~4) 多→「1~4mmの大砂粒・長石を多く含む」である。焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

付 編

表165 東本2次 穫穴式住居址一覧

竪穴 (SB)	時 期	平 面 形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	床面積 (m ²)	主柱穴 (本)	内 部 施 設				周 壁 清	備 考
						高床	土坑	炉	カマド		
01	弥生後期	円 方 形	10.0×9.70×0.05	78.50	10		○	○		○	
02	弥生後期	長 方 形	9.00×7.25×0.30	64.80	7		○	○		○	

表166 東本3次 穫穴式住居址一覧

竪穴 (SB)	時 期	平 面 形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	床面積 (m ²)	主柱穴 (本)	内 部 施 設				周 壁 清	備 考
						高床	土坑	炉	カマド		
01	弥生後期	長 方 形	4.70×3.50×0.30	16.45	4		○	○		○	

表167 桑原高井1次 穫穴式住居址一覧

竪穴 (SB)	時 期	平 面 形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	床面積 (m ²)	主柱穴 (本)	内 部 施 設				周 壁 清	備 考
						高床	土坑	炉	カマド		
01	弥生後期	隅丸方形	5.70×5.16×0.28	29.41	7			○		○	床面積は入口部と壁 当り部は含まず。
02	弥生後期	隅丸六角形	8.10×7.75×0.39	50.50	7	○		○		○	
03	弥生後期	不 明								○	
04	弥生後期	隅丸方形	5.85×5.50×0.13	32.0	4			○		○	
05	弥生後期	長 方 形	3.80×2.60× a	9.88							

表168 桑原高井1次 土坑一覧

土坑 (DK)	地 区	平 面 形	断 面 形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	I 6・7	隅丸方形		2.40×1.80×0.71				
2	I・J 6・7	不整掘り形		3.00×2.20× a				
4	K3			1.20×0.60× a		弥生	弥生後期	
5	K2-3	菱方形		2.20×0.90× a		弥生	弥生後期	
6	H2	縦円形		1.20×0.80× a				
7	H2	横円形		1.20×0.90× a				
8	H3	横円形		1.20×0.95× a				
9	H6-7	横円形		1.80×1.50× a				
10	I 4	楕円形	舟底状	1.70×1.30×0.67				

表169 桑原高井1次 溝一覧

溝 (S0)	地 区	断 面 形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
01	H・I・I・2	混合形状	20.0×1.90×		弥生	弥生後期	
02	H・I・4・JK5	逆 台 形	20.0×0.40×		弥生	弥生後期	
03	I 5・JK5	逆 台 形	15.0×0.60×		弥生	弥生後期	

出土遺物観察表

表170 東本1次A区出土遺物観察表 土製品

番号	器種	重量(cm)	形態・施文	調査		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	器	11径(25.4) 残高 11.6	内面に縦をもって外反する口縁部。 口縁部はナメによりやや弧状。 腹部又は口部凸出。	◎ヨコナダ ◎ミガキ(ハケ) ◎ハサ・ナダ	◎ヨコナダ ◎ハサ ◎ハサ・ナダ	乳白色 乳白色	石・長(1~5) 金 ○		
2	器	口径 22.1 底径 6.1 高さ 34.2	内面に横をもって外反する口縁部。 長柄、平底。	◎ハケ→ヨコナダ ◎ハサ(6~7.4cm) ◎ナダ	◎ヨコナダ ◎ナダ(海綿状底部) ◎マツフ(ハサ)	赤茶色 赤茶色	石・長(1~3) ○	黒斑	
3	器	口径(15.0) 残高 16.6	内面に縦をもって外反する口縁部。 口縁部はナメ凹む。	◎ヨコナダ ◎ハサ(4本/cm・7 本/cm)	◎ハケ(4本/cm) ◎マツフ(ケズリ)	赤褐色 赤茶色	石・長(1~3) ○		
4	器	底径 1.7 残高 15.6	あいまいなちあがりをもつ、小 さい平底。	◎ハケ(12~13本/cm) ナダ ◎ナダ	ハケ(12~13本/cm) →ナダ	乳白色 灰色	石・長(1~5) 黄褐色 多 ○	黒斑	
5	壺	11径 20.0 残高 17.3	口縁部鶴鉢西線文3条、波文文4 ~5条3段。腹部堆粘直線文15条 以上、ナメ直線4条13組。	◎ヨコナダ ◎ハサ(8本/cm) ◎堆粘 ◎ハサ(8本/cm)	◎堆粘直線文有 ◎マツフ(ハサ) ◎ナダアゲ	赤茶褐色 赤茶褐色	石・長(1~5) 金 ○		
6	壺	口径(17.2) 残高 6.5	口縁部堆粘直線文4条、波文文5 条。	◎ハケ→ヨコナダ ◎マツフ(ハサ)	ハケ(6本/cm)	乳白色 乳白色	石・長(1~3) ○		
7	壺	口径(14.0) 残高 9.0	口縁部堆粘直線文3条。頸部に斜 等子付文の刻目凸起。	◎ハケ→ヨコナダ ◎ハケ(5本/cm)	◎ヨコナダ ◎ハサ→ナダ?	赤褐色 赤褐色	石・長(1~3) ○		
8	壺	口径(13.2) 残高 12.8	口縁部直線文。	◎マツフ ◎ハサ(8本/cm)	◎マツフ(海綿状底部) ◎ハケ(8本/cm)	乳白色 黄褐色	石・長(1~3) ○		
9	壺	底径 13.8 残高 6.6	くびれるたちあがりをもつ平底。	◎ナダアゲ ◎ナダ?	ハケ(12~13本/cm) →ナダ	淡茶色 赤茶色	石・長(1~4) ○		
10	壺	底径 7.8 残高 10.8	あいまいなちあがりをもつ平底。	ハケ(7本/cm)	◎ハケ(9本/cm)→ ナダ ◎ナダ	乳白色 赤褐色	石・長(1~5) ○	黒斑	
11	壺	底径 3.0 残高 11.6	やや直線の早い平底。	◎ハラナダ? ◎ナダ	◎ハケ(6本/cm) ◎ナダ	蔚色 乳白色	石・長(1~2) 金 ○	黒斑	
12	壺	底径 2.2 残高 16.8	たちあがりは小さく、中央が凹む 底部。	◎ハケ(9~10本/cm) ナダ ◎ナダ	◎ハケ(9~10本/cm) →ナダ ◎ナダ	乳白色 乳白色	石・長(1~4) 多 ○	黒斑	
13	鉢	口径 14.2 残高 8.5	内面に弱い縦をもって外反する口 縁部。縫合部はあいまいな面を もつ。平底。	ハケ(9本/cm)→ ナダ	ハケ(9本/cm)	乳白色 赤褐色	石・長(1~5) ○		
14	鉢	口径 12.6 底径 1.9 高さ 10.3	直口口縁。底部は面をもつ。丸み をもつ平底。	ハケ(10本/cm) + ミガキ ◎ナダ	ハケ(10本/cm) + ミガキ	乳白色 乳白色	石・長(1~2) 食 ○		
15	高杯	口径(25.2) 残高 1.3	受部部。縫合部はわずかに並張し縫 縫合直線文3条2段と竹管文入り圓 形浮文。	ハケ(7~8本/cm) + ミガキ ◎ナダ	ミガキ(マツフ)	乳白色 乳白色	石・長(1)少 ○		
16	器台	残高 10.5	脚柱部分。柱上部に工具押印によ る沈擦痕の段をもつ。	マツフ(ミガキ)	ナダ ナダ	蔚色 茶色	石・長(1~3) ○		
17	器台	残高 11.4	脚柱部分。円孔 5ヶ3段(φ1.1 cm)。	マツフ(ハサ)	マツフ	乳白色 乳白色	石・長(1~4) ○		

表171 東本2次SB01出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形・形・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
18	甕	口径(20.0) 残高 6.3	内面に縁をもつて外反する口縁部。 口縁端部は肩をもつ。	《④ココナデ ハケ(3~4本/cm)》	ハケ→ナデ	茶色 茶色	石長(1~3) ○		
19	甕	口径(17.8) 残高 4.1	内面に縁をもつて外反する口縁部。 口縁端部は肩をもつ。	《④ココナデ ハケ(10~11本/cm)》	ハケ	茶色 茶色	石長(1~2) ○		
20	甕	口径(13.6) 残高 5.1	内面に縁をもつて外反する。口縁部の口縁端部は肩をもつ。	《④ココナデ ⑤ハケ(3~4本/cm)》 ⑥ハケ(5本/cm)》	①ハケ(7~8本/cm) →ヨコナデ ②ハケ(5~6本/cm) →ハケ(7~8本/cm)	茶色 茶色	石長(1~3) ○		
21	甕	口径 14.1 底径 2.6 残高 14.0	内面に縁をもつて外反する口縁部。 肩が強く張り、平底となる。	⑦ナデ ⑧ハケ(8.4cm) ⑨ハケ(6~7cm:マガキ)	⑩ハケ(5~6本/cm) ⑪ハケ(3~4本/cm) →放ナデ	暗赤茶色 暗赤茶色	石長(1~2) ○	黒斑	
22	甕	口径(2.0) 残高 15.1	肩部が張る形態。平底。	⑫ナデ ⑬ヨコナデ ⑭ハケ(8本/cm: x-5 ~6本/cm)	⑮ナデ ハケ(17~18本/cm: x-5~6本/cm)	灰赤茶色 灰赤茶色	石長(1~3) ○		
23	甕	底径 4.0 残高 4.4	平底。	ハケ(3~4本/cm) ⑯ナデ	ナデアゲ(板状工具)	灰茶色 灰茶色	石長(1~4) ○		
24	甕	底径 2.2 残高 5.7	平底。	ハケ(7本/cm)→ ナデ ⑰ナデ	ナデ	灰色 灰色	石長(1~3) ○		
25	甕	底径 2.8 残高 3.6	平底。	ハケ(7本/cm)・ ナデ ⑱ナデ	ハケ(7本/cm)→ナデ	灰色 灰色	石長(1~2) ○		
26	甕	底径 3.3	横縞束縫文は、葉状紋状に木口痕を残す(8条1組)。	ハケ(9~10本/cm) →ヨコナデ ハケ(6~7本/cm) →ヨコナデ	ハケ(6~7本/cm) →ヨコナデ ⑲ヨコナデ	茶色 茶色	石長(1~4) ○		
27	甕	残高 4.1	縫合を欠く。横縞束縫文2組が残る。	ハケ(7~8本/cm) →ヨコナデ ハケ(7~8本/cm) →ミガキ	⑳ヨコナデ ハケ(5本/cm)	灰赤茶色 灰赤茶色	石長(1~3) ○		
28	甕	口径(16.0) 残高 4.7	縫合束縫文11条。	㉑ヨコナデ ㉒ハケ(7~8本/cm)	㉓ヨコナデ	乳赤茶色 乳赤茶色	石長(1~2) ○		
29	甕	残高 5.4	縫合束縫文4条。	㉔ヨコナデ ナデ	㉕ヨコナデ ナデ(縫合痕有り)	灰色 茶色	石長(1~3) ○		
30	甕	口径(16.0) 残高 3.5	口縁部無文。	㉖ヨコナデ ハケ(7本/cm)→ ヨコナデ	㉗ハケ(7本/cm)→ ヨコナデ	茶色 茶色	石長(1~2) 金 ○		
31	甕	口径(13.8) 残高 2.7	口縁部無文。	㉘ヨコナデ ハケ(7~8本/cm) →ヨコナデ	㉙ヨコナデ	黄茶色 黄茶色	石長(1~3) ○		
32	甕	口径(14.8) 残高 5.9	口縁部無文。口縁端部はナテ門ひ。 縫合ヨコナデ。	㉚ヨコナデ ㉛ハケ(7~8本/cm) →ヨコナデ	㉜ハケ→ヨコナデ ㉝ハケ→ナデ	灰赤茶色 灰赤茶色	石長(1~2) ○		
33	甕	口径(14.6) 残高 6.3	口縁部は長く、上外方へ回る。	㉞ヨコナデ ㉟ハケ→ヨコナデ ハケ	㉟ハケ→ヨコナデ ハケ	乳茶色 乳茶色	石長(1~2) 幅約32 ○		
34	甕	口径(11.9) 底径 2.7 残高 23.4	口縁部は長く、外反する。丸みのある平底。	㉟ハケ(5~6本/cm: マガキ) ㉟ナデ	㉟ハケ(6~7本/cm)	赤橙茶色 赤橙茶色	石長(1~3) ○	黒斑	
35	甕	口径(15.0) 残高 5.6	縫合束縫文13条、充満三角文2条、重縞文16条以上。	㉛ヨコナデ ミガキ	㉜ハケ(9~10本/cm) →ヨコナデ ミガキ	茶色 茶色	石長(1) ○		
36	甕	残高 4.8	頭部下半部直縫文8条。肩部に縫合直縫文8条。	ハケ→ミガキ	㉝マツツ ハケ(10本/cm)→ ミガキ	黄赤茶色 黄赤茶色	石長(1) ○		

出土遺物観察表

東本2次SB01出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査		色調 (外側) (内側)	墨 土 焼	備考	図版
				外 面	内 面				
37	壺	残高 1.7	肩部片。横指直線7条以上。	ミガキ(マツフ)	ハケ→ナデ	茶色 茶色	石・長(1) 多○		
38	壺	残高 4.9	肩部部か。3条の波継文。凸ぼんく、形態不明。	ナデ	ナダアグ(ケズリか?)	暗赤茶色 暗赤茶色	石・長(1~3) 多○		
39	壺	口径(17.0) 残高 3.1	口横溝印に凹線文4条。	ヨコナデ	ヨコナデ(一毫ハケ)	暗茶色 暗茶色	石・長(1~3) 多○		
40	壺	底径(6.6) 残高 11.9	人型品。たちあがりをもつ平底。	ハケ(6~7本/cm)→ ミガキ ④ナデ	ハケ(6~7本/cm)	暗茶色 暗茶色	石・長(1~4) 多○	黒斑	
41	壺	底径 2.8 残高 7.3	中型品。丸底をもつ平底。	ハケ(マツフ) ④ナデ	マツフ(ナデ少)	乳白色 乳白色	石・長(1~3) 多○		
42	壺	底径 4.0 残高 4.7	中~小型品。丸底をもつ平底。 「×」字状の縫合。	ハケ→ミガキ	ナデアグ(一部ナデ)	乳白色 乳白色	石・長(1~3) 多○		
43	壺	底径(4.0) 残高 3.4	中型品。丸底をもつ平底。	ナデ	ハナ(12~13本/cm)	乳白色 乳白色	石・長(1~3) 多○		
44	壺	底径 1.2 残高 3.1	小さく突出する平底。豊穣がやや 齊々。	ミガキ ④ナデ	ミガキ	乳白色 乳白色	石・長(1~3) 多○		
45	壺	底径 2.4 残高 2.6	小さく突出する平底。	ミガキ ④ナデ	ナデ(マツフ)	乳灰茶色 乳灰茶色	石・長(1~3) 多○		
46	鉢	口径(21.6) 残高 9.0	内面に縁をもって外反する円錐形。 縫合は網る。腹壁が深い。	④ハケ→ヨコナデ ハケ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ ミガキ	乳白色 茶色	石・長(1~3) 多○	黒斑	
47	鉢	口径 22.2 底径 2.4 残高 9.7	長い口縁部。縫合に丸底をもつ。 小さい立ち上がりに平底となる。	ハケ・ミガキ ④ナデ(一部ヨコ ナデ)	ヨコナデ→ミガキ ハケ・ミガキ	赤茶色 赤茶色	石・長(1~3) 少○		
48	鉢	口径(20.2) 残高 5.5	内面に縁をもって外反する長い口 縁部。縫合はあいまいな所をもつ。	マツフ	マツフ(ミガキ)	乳白色 乳白色	石・長(1~3) 多○		
49	鉢	底径 1.8 残高 2.5	小さく突出する平底。	マツフ	ミガキ	乳白色 乳白色	石・長(1~3) 多○		
50	鉢	底径 1.1 残高 8.3	小さく突出する平底。底盤の脇壁 が厚い。	ハケ(11本/cm) →ミガキ ④ナデ	ハケ(11本/cm + ヨコナデ)	赤茶色 乳白色	石・長(1~3) 多○		
51	鉢	底径 2.5 残高 8.4	丸底をもつ平底。	ハケ管(4本組)・マツフ ④ナデ	ハケ ④ナデ	灰茶色 灰茶色	石・長(1~3) 多○	黒斑	
52	鉢	口径 15.2 底径 3.1 残高 10.6	堅口口縁。縫合は縫を捲つ。あい まいな立ちあがりをもつ平底。	ハケ(8~9本/cm)	ハケ ④ナデ	茶色 茶色	石・長(1~3) 多○	黒斑	
53	鉢	底径 4.9 残高 2.3	縫円形の底部は平底となる。	ハケ・ミガキ ④ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	茶色 茶色	石・長(1~3) 多○		
54	高炉	口径(31.2) 残高 3.4	大きく外反する長い口縁部。縫合 は面をなす。	ヨコナデ ミガキ	ハケ→ミガキ ヨコナデ ミガキ	乳白色 乳白色	砂多 多○		
55	高炉	残高 3.8	耳懸部は段状になる。	ハケ→ミガキ(一毫 ヨコナデ)	ハケ→ミガキ	茶色 茶色	砂(1~2)多 多○		

東本2次SB01出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
56	高杯	口径(26.4) 残高 1.4	器台の坏部の可能性もある。 縁部に隕接痕状3条。	◎ヨコナデ ハケ(11~12cm/α)	ハケ→ミガキ	黄茶色 黄茶色	石長(1~3) 金○		
57	高杯	残高 6.4	円孔(12.5)以上(約10cm)。	ハケ(8本/cm)	◎ミガキ ◎ナデ	茶色 茶色	石長(1~5) ○		
58	高杯	残高 11.3	円孔4ヶ(約1.7cm)。坏痕合部には工具痕を有する。充填技法。	ミガキ(一部ハケ)	ハケ(5本/α・工具 痕有り)	茶色 茶色	石長(1~3) ○		
59	高杯	残高 7.0	円孔4ヶ(約2.0cm)。充填技法。	ハケ→ミガキ	滑溜表面透	茶色 茶色	石・灰(1~3) 金○		
60	高杯	残高 3.1	円孔2ヶ以上(約1.7cm)。	マメツ(ミガキ)	ハケ(13本/cm)	乳茶色 乳茶色	灰(1) ○		
61	高杯	底径(17.4) 残高 1.9	円孔1ヶ以上(約1.7cm)。縁部は丸み。	マメツ ◎ヨコナデ	マメツ	茶色 茶色	灰(1) ○		
62	高杯	底径(18.2) 残高 1.7	脚部。底部は底をもつ。	ミガキ ◎ヨコナデ	ハケ(9本/cm)	茶色 茶色	石・長(1~2) ○		
63	器台	残高 2.8	受部片。端部に北緯文3条。器盤 が厚い。	ハケ・ナデ(ヨコ ナデ)	マメツ(ミガキ) ナデ	茶色 黄茶色	石・長(1) ○		
64	器台	口径(25.6) 残高 3.4	受部片。端部は上下に粗張。	◎ヨコナデ ハケ(14~15本/ α)→ミガキ	ハケ(14~15本/cm) →ミガキ	暗茶色 茶色	石・灰(1~2) ○		

表172 東本2次SB02出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
65	壺	口径(7.6) 残高 5.9	口縁部粗文。	◎ヨコナデ ◎ヨコナデ+ミガキ	◎ヨコナデ ◎ハケ(マメツ)	茶色 茶色	石・長(1~2) ○	黒潤	
66	壺	残高 8.8	肩平地の器品。	ミガキ(マメツ)	ハケ(5~6本/cm・ 7~8本/cm)	乳黃茶色 灰茶色	石・長(1~2) 多 ○	黒潤	
67	壺	口径 2.8 残高 3.2	平底。	マメツ	ハケ→ナデ	乳茶色 乳茶色	石・長(1) ○		
68	鉢	底径 3.4 残高 1.7	小さい立ち上がりをもつ付底。	ハケ→ナデ	マメツ	茶色 茶色	石・長(1~4) ○		
69	壺	残高 2.7	直口口付。側面直線文5条、 肩部文2段。	ミガキ	ヨコナデ	半茶色 暗茶色	石・長(1) ○		
70	壺	残高 3.0	直口口付。側面直線文28条以上。	◎ヨコナデ	ナデ	暗茶色 暗茶色	黒(5~6) ○		
71	壺	口径(13.4) 残高 3.4	直口口付。側面直線文23条、新鋸 た屋の三角文。	◎ヨコナデ	ハケ・ミガキ	茶色 茶色	黒 ○		
72	壺	残高 1.6	肩部凸。側面直線文9条。斜線充 填の三角文、直線文7条。		ハケ(9本/cm)	茶色 茶色	黒(4~5) ○		
73	鉢	残高 1.9	直口口縁。口縁部は丸みのある U字状。	ナデ	ナデ	茶色 茶色	U・長(1) ○		

出土遺物観察表

東本2次SB02出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内側)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
74	高環	残高 3.9	柱部片。縦撹底部文3条以上、18条、1条以上。	ミガキ	ナゲ	赤茶色 灰色	白色板 ○		
75	高環	残高 2.2	柱部片。縦撹底部文5条、6条。	ミガキ	ハケ	茶色 茶色	密 ○		

表173 東本2次地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内側)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
76	壺	残高 4.6	吻生唇部。口唇端部に波状文1条。	④(脱)ヨコナデ ナゲ(一部ミカキ)	ナゲ(一部ハケ)	茶色 茶色	石長(1~3) 多 ○		
77	壺	残高 5.4	肩部片。大きい沈模文2条。吻生唇部。	ハケ(8~9本/cm)→ ミガキ	ハケ→ミガキ	茶色 茶色	石長(1~3) ○		
78	不明	底径 4.5 残高 5.9	筒条の肩部部分をもつ。器底・基部小形。	ナゲ	ナゲ	乳灰茶色 乳灰茶色	石長(1~2) 多 ○		

表174 東本3次SB01・P13出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内側)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
79	壺	口径 8.2 底径 3.1 残高 20.5	定形壺。直二口縫。器底はあいまいな點。小さい平底。	④ハケ(12本/cm) ④ハケ→ミカキ ④(脱)タタキ(12本/cm) ナゲ	④ナゲ ハケ→ナゲ	乳褐色 黄灰茶色	石長(1~3) ○	黒斑	
80	甕	口径 11.5 残高 8.5	定形甕。直二口縫。器底はあいまいな点。やりぎみの丸底。	④ナゲ ハケ(9本/cm)	ナゲ(一部ハケ)	茶色 茶色	石長(1~4) ○	黒斑	
81	壺	口径 (9.0) 残高 2.6	裏撹底部文3条(横状文状)、底状文3条。	マメツ	ヨコナデ	暗褐色 褐色	石長(1~2) 金 ○		
82	土器	口径 (4.3) 残高 3.8	直二口縫。平底。	ナゲ	ナゲ	黄褐色 黃褐色	石長(1~3) ○	黒斑	

表175 桑原高井1次SB01出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内側)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
83	壺	口径 14.3 底径 19 残高 18.4	口唇部を一筋くし、内面に軸をもつて吊るす山根部。腹部は面をなす。中尖部が凹む地輪。	④ヨコナデ ④タタキ ④タタキ→ハケ ④タタキ	④ハケ→ヨコナデ ハケ	暗褐色 茶色 茶色 茶色	石長(1~4) ○		
84	甕	底径 3.6 残高 11.8	丸みをもつ平底。丁寧な仕上げ。	ハケ(マメツ)	ハケ	乳褐色 淡褐色	石長(1~2) ○	黒斑	
85	甕	口径 13.1 底径 3.6 残高 5.6	直二口縫。平底。	マメツ(ナゲ)	ハケ(7本/cm) ④ナゲ	黄褐色 茶色	石長(1~3) ○		
86	甕	口径 (19.7) 底径 11.3	様をもって外反する口沿部。縫合は面をなす。	④ハケ タタキ→ハケ	ハケ	乳茶褐色 乳褐色	石長(1~1) ○	黒斑	
87	壺	口径 14.8 底径 3.0 残高 25.3	定形壺。枝をもって外反する口沿部。縫合はあいまいな面をなす。長財。	④ヨコナデ ④タタキ ④タタキ→ハケ ④タタキ	④ハケ ハケ→ナゲ ナゲ(二見風)	茶褐色 褐色 褐色	石長(1~4) ○	黒斑 朱付青	
88	甕	口径 13.7 底径 16.3	先形容。枝をもって外反する口沿部。縫合のしめが弱い。人みをもつ平底。	タタキ ④タタキ→ハケ ④タタキ	④ハケ ハケ(6本/cm) ④ハケ(6本/cm)・ナゲ リナゲ(複数個)	灰褐色 灰褐色	石長(1~3) ○	黒斑	
89	壺	口径 10.5 底径 12.2 残高 14.3	一列次縫。枝をもって外反する口沿部。小さい平底。縫合が薄い。	④ハケ(本/2cm) ④ミガキ ④ハケ	④ハケ(10本/cm) ナゲ	乳黄色 乳灰色	密 ○	黒斑	

桑原高井1次SB01出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外側) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
90	裏	口径 10.5 底径 2.0 器高 16.3	一部欠損。縁をもって外反する口縁部。尖端。縁部に折断部を残す。	① 指痕灰跡著 タキタキ タキ→ハケ	①(6)ハケ(7~10本/cm) ナデ(指痕灰跡著)	指痕灰色 灰青灰黑色	石-長(1~4) ○	黒斑	
91	底	浅高 2.6	複合口縁。	ナデ	ナデ	赤褐色 乳白色褐色	石-長(1~4) 金○		
92	亞	口径(13.5) 残高 2.1	複合口縁。	ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	深灰茶色 黄灰茶色	石-長(1~3) ○		
93	蓋	口径(13.1) 残高 7.5	内傾する長い直に外反する口縁部。 溶出は目をなす。	②ヨコナデ ハケ→ミガキ	②ハケ→ヨコナデ ハケ→ナデ	乳白色 乳白色	石-長(1~2) ○		
94	蓋	口径(11.2) 残高 2.9	外傾してたちあがる直口縁。縁部には丸い。	ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石-長(1) ○		
95	蓋	底径(7.0) 残高 8.3	中型盖。底面の厚い平底。	ミガキ(タケ) ④ナデ	ハケ(10本/cm) ハタ→ナデ	黄褐色 灰褐色	石-長(1~4) 金○	黒斑	
96	鉢	口径(34.0) 残高 3.1	大型盆。まるやかに外反する口縁部。 縁部は丸みをもつ。	③(6)ヨコナデ ハケ	ハケ	白茶色 白茶色	石-長(1~3) 金○		
97	鉢	口径(35.4) 残高 4.5	大型盆。外傾する口縁部。溶出はわずかに内傾し、丸みをもつ。	ヨコナデ→ミガキ ケズリ・ミガキ	ミガキ	乳黄色 淡黃茶色	石-長(1~3) 金○		
98	鉢	口径 8.3 底高 2.7 器高 9.8	口縁部。底欠損。ゆるやかに外反する口縁部。縁部は丸い。くびれの少し歪。	③ヨコナデ ハタ→ナデ ナデ	③ナデ ハタ→ナデ ナデ	淡灰黄色 淡灰黄色	石-長(1~4) 金○		
99	鉢	口径(11.5) 残高 3.1	縁をもって外反する口縁部。縁部は丸い。縁部は薄い。	④ハケ→ヨコナデ ⑤ハケ	ハケ・ヨコナデ	黄褐色 黄灰褐色	石-長(1~3) ○		
100	鉢	口径(16.5) 底径(3.6) 器高 7.8	直口口縁。縁部は直面をなす。丸みのある平底。	ナデ	ハケ	乳灰黄色 乳灰茶色	石-長(1~2) ○	黒斑	
101	鉢	口径(12.4) 底径(3.0) 器高 5.9	直口口縁。縁部はあいまいな面をなす。平底。	マメツ ④ミガキ	マメツ	淡黃茶色 淡灰茶色	石-長(1~3) 金の質化-金○	黒斑	
102	鉢	口径(12.0) 底径 3.2 器高 8.8	内溝する直口口縁。縁部は丸い。丸みをもつ。	ナデ	ナデ	乳黄色 乳茶色	石-長(1~2) ○	黒斑	
103	鉢	口径 10.9 底径 3.8 器高 8.1	直口口縁。溶出は細い。平底。	タキ→ハケ ④(6)マメツ	折痕灰跡著 ハタケズリ	赤褐色 灰褐色 灰褐色	石-長(1~6) ○	黒斑	
104	鉢	口径(12.4) 残高 6.7	直口口縁。縁部は丸みをもつ。突出する丸みのある底盤。	マメツ	④(6)ハケ(マメツ) ⑤(6)タケ	乳黄色 乳茶色	石-長(1~3) 金・安田石○	黒斑	
105	鉢	底径 6.9 残高 3.1	古鉢跡。大きくなりせる上口の台部をもつ。	ハケ	ハケ	乳茶色 乳茶色	石-長(1~3) ○	黒斑	
106	高杯	残高 2.5	不規形。大きく聞く口縁部。	マメツ	マメツ	黄褐色 淡灰茶色	石-長(1~3) ○		
107	橋台	口径(42.2) 残高 1.7	受鉢片。縁部は直下し、縁面に穴数。竹管文2段と竹管文付舟形脚丸。	④ヨコナデ ハケ・ミガキ	ミガキ→ハケ	茶褐色 茶褐色	石-長(1~7) 金○		
108	支脚	底径(9.6) 残高 4.0	滑跡付。ゆるやかに崩れ折れ。縁部は丸みをもつ。	ハケ・ナデ	ナデ(一部ハケ)	難解・難解 難解・難解	石-長(1~3) 金○		
109	支撑	底径(6.7) 残高 9.0	縫隙は中央となる。受部は一部が傾斜している。	ナデ ④木調整		乳黄色	青○		

出土遺物観察表

桑原高井1次SB01出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
110	支脚	底径(8.8) 残高 7.1	くびれの上部。受部は大きな凹みをもち、一部が壊損する。	ナゲ		黄褐色・茶褐色	石・長(1~3) ○		
111	支脚	底径(8.0) 残高 4.1	円形の形態。上部は、受部は平坦。	ナゲ(工具痕有)		淡黄褐色	石・長(1~3) ○		
112	支脚	口径(8.2) 底径(7.8) 残高 5.0	右側の形態。上部は、受部は凹む。	ナゲ		淡黄褐色	石・長(1~3) ○		
113	L-F-7	底径 3.3 残高 1.2	底部部。くびれの七面型。	ナゲ		淡黄褐色	石・長(1~3) ○		

表176 桑原高井1次SB02出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
114	器	口徑(22.4) 残高 4.7	縁をもって外反する口沿部。底部は曲をなす。	ハケ(一筋コナゲ)	マメツ	淡褐色 褐褐色	石・長(1~3) ○		
115	先	口径(20.0) 残高 4.5	縁をもって外反する口沿部。底部は曲をなす。	ナゲ ⑩ハケ→ナゲ	⑪ナゲ→ナゲ ⑫ナゲ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~3) 金 ○		
116	器	口徑(17.2) 残高 4.3	縁をもって外反する口沿部。	タタキ(内面有)	ハケ(指痕有)	淡褐色 白色	石・長(1~3) 金 ○		
117	先	口径(12.8) 底径(12.1) 残高 15.2	ゆるやかに立ち上がる口沿部。底部は彎曲する。制部のふくらみは強い。丸みをもつ平底。	⑬ハケ→トゲ/ガ ⑭ハケ→工具痕	ハケ	淡黃褐色 淡黃褐色	石・長(1~3) ○	弧度	
118	器	底径(2.8) 残高 5.1	大器品。丸みをもつ平底。	ハケ(4本/cm)	ケズリ	乳白色 茶褐色	石・長(1~3) ○		
119	器	底径 3.8 残高 3.3	中型品。平底。	ハケ ⑩ナゲ	ハケ→ナゲ ⑪ナゲ(指痕有)	黑褐色 褐褐色	石・長(1~3) ○		
120	器	口径(4.0) 残高 2.8	中型品。平底。	ハケ(10本/cm)	ナゲ(指痕有)	灰褐色 茶褐色	石・長(1~3) 金 ○		
121	器	底径 4.5 残高 3.1	中型品。平底。	タタキ ⑩未調査	ハケ→ナゲ	淡黃褐色 暗灰茶色	石・長(1~3) ○		
122	器	口径(3.0) 残高 4.0	中型品。平底。	タタキ	ハケ	黄褐色 灰褐色	石・長(1~3) 金 ○	黒斑	
123	器	残高 3.2	複合口沿。断面形状3角。	マメツ(ヨコナゲ)	ロコナゲ	黑褐色 黑褐色	石・長(1~3) ○		
124	器	口径(18.0) 残高 3.0	複合口沿。上部は無文。	⑪ヨコナゲ ⑫ハケ→トゲ	⑬ヨコナゲ ⑭ハケ	淡褐色 白黄色	石・長(1~3) ○		
125	壺	口径(18.0) 残高 5.6	外側に反する口沿部。底部はナチ凹む。	ナゲ	ハケ・板ナゲ	褐色 褐色	青石・長(1~3) ○	黒斑	
126	壺	口徑(15.1) 残高 4.5	外側に反する口沿部。底部はナチ凹む。	⑮ヨコナゲ ⑯ハケ→ヨコナゲ	ハケ・ナゲ	淡黃褐色 淡褐色	石・長(1~3) ○		
127	壺	口径(20.8) 残高 6.1	大きく外反する口沿部。底部はナゲ凹む。	⑰ヨコナゲ ⑱ハケ→ヨコナゲ	⑲ヨコナゲ ⑳ハケ→ヨコナゲ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~3) ○		

付編

桑原高井1次SB02出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外側 (内面))	胎土 焼成	備考	因縁
				外 面	内 面				
128	甕	口径(25.3) 残高 3.3	大よく外反する口縁部。腹部は板張り、側面横状文6条をもつ。	①ハケ ヨコナデ(一部ハケ)	ハケ(指壓痕有)	黄赤褐色 黄赤褐色	石・長(1~3) ○		
129	甕	口径(18.0) 残高 1.9	大よく外反する口縁部。腹部は板張り、側面横状文4条をもつ。	②ヨコナデ ハケ	ヨコナデ	乳黃褐色 乳黃褐色	石・長(1~3) ○		
130	甕	残高 4.1	長楕円の頸部片。横状文5条以上。	ハケ→ミガキ	ナナフ(ヨコナデ)	素面色 黄褐色	青(・長) ○		
131	甕	残高 5.0	肩部片。2条の横状文(深削り)。	ハケ(6本/cm)	マメツ(ナナフ)	灰褐色 灰褐色	石・長(1~2) 金 ○		
132	甕	残高 9.8	肩部片。張りの弱い肩部。	ハケ(工具痕有)	ハケ ②指壓痕有 ③ハケ→ナナフ	深褐色 深褐色/深褐色 深褐色/深褐色	石・長(1~5) ○		
133	甕	底径 3.2 残高 21.5	大型品。丸みのある平底。	タクキ→ナナフ ④工具痕有	ハケ(6本/cm) ⑤ナナフ(横割れ)	灰褐色 灰褐色	石・長(1~4) ○		黒斑
134	甕	底径 7.3 残高 7.0	大型品。小さく突出する丸みのある平底。	タクキ ⑥ハケ(ママツ) ⑦ハケ	ハケ ⑧ナナフ	黒褐色 灰褐色/灰褐色	石・長(1~3) ○		黒斑
135	甕	底径 6.6 残高 8.2	大型品。丸みをもつ平底。	タクキ→ハケ ⑨ナナフ	ナナフ→ハケ ⑩ナナフ	深褐色/深褐色 乳黃褐色	石・長(1~3) ○		黒斑
136	甕	残高 8.0	大型品。わずかに平坦部をもつ丸みのある底。	タクキ	ハケ(8本/cm) ⑪ナナフ(工具痕)	灰褐色 灰褐色	石・長(1~6) ○		黒斑
137	甕	残高 5.1	大型品。丸底。	タクキ	ハケ・ナナフ ⑫ナナフ	乳黃褐色 素面色	割(石・長)~ ○		黒斑
138	钵	口径(37.0) 残高 4.3	大型品。残をもって外反する口縁部。腹部に凹をなす。	⑬ヨコナデ タクキ	ハケ	黒褐色/深褐色 暗灰褐色	石・長(1~4) ○		
139	钵	口径(27.4) 残高 6.8		⑭ヨコナデ(一部ハケ) ⑮タクキ	⑯ヨコナデ ⑰ハケ	白茶色 白茶色	石・長(1~3) ○		
140	钵	口径(18.6) 残高 4.0	模様をもって外反する口縁部。溝部はナナフ込みをなす。	⑲ヨコナデ ⑳ナナフ(一部ハケ)	⑳ハケ→ヨコナデ ⑳ハケ	深褐色 深褐色	石・長(1~2) ○		
141	钵	口径(19.5) 底径(6.6) 残高 8.6	直口口縁。腹部はあいまいな凹をなす。立ち上がりをもつ平底。	タクキ(ママツ)	ハケ	玉筋色/深褐色 玉筋色/深褐色	石・長(1) ○		
142	钵	口径(18.3) 底径 2.8 残高 8.8	直口口縁。腹部は丸い。平底。	⑳ヨコナデ ㉑タクキ ㉒ケズリ	㉓ヨコナデ ㉔ハケ→ミガキ ㉕ナナフ	玉筋色/深褐色 玉筋色/深褐色 乳黃褐色	石・長(1~2) ○		
143	钵	口径 18.8 器高 7.4	直口口縁。腹部は丸みをもつ。わずかに平らな部分をもつ底。	㉖ヨコナデ ㉗タクキ(5本/cm) ㉘タクキ	ナナフ	灰褐色/灰褐色 灰褐色/灰褐色	石・長(1~2) ○		黒斑
144	钵	口径 2.0 器高 6.7	直口口縁。丸みをもつ平底。	タクキ→ナナフ ㉙タクキ	ナナフ	乳黃褐色 乳黃褐色	石・長(1~3) ○		
145	钵	底径 3.3 残高 6.5	丸みをもつ平底。	タクキ(3本/cm) ㉚ナナフ	ハケ ㉛ナナフ	暗褐色/白色 暗褐色/白色	石・長(1~3) ○		
146	钵	残高 3.7	丸底。	タクキ	ナナフ(工具痕有)	乳黃色 乳黃色	石・長(1~3) 金 ○		
147	钵	残高 2.8	丸底。	㉜ハケ	ナナフ	乳黃色/灰色 乳黃色	石・長(1~2) 金 ○		黒斑

出土遺物観察表

桑原高井1次SB02出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
148	鉢	直径 3.7 残高 1.9	小さく突出する平底。	マメツ	マメツ(ナデ)	茶褐色-栗褐色 黄茶褐色	石-長(1~2) ○		
149	高杯	残高 2.6	外脚片。大きくなぐる跡。	ハラ(ガタ→ヨコナデ ヨコナデ→ガタ)	マメツ(ヨコナデ)	淡褐色-茶色 黄褐色	石-長(1~3) ○		
150	器台	口径(36.6) 残高 1.2	受盤片。大きくなぐる跡。表面は削をなす。	ヨコナデ (ナデ)	ハケ×ヨコナデ	乳白色-茶色 茶褐色-青茶色	石-長(1~3) ○		
151	支脚	残高 8.3	受盤に2きの突起をもつ。背筋に1ヶのつまみ足をもつ。	ハケ ナデ		茶褐色	石-長(1~2) ○		
152	支脚	口径(11.0) 残高 4.7	ゆるやかに開がる鉢基。	ナデ(一葉ハケ) (ヨコナデ)	ナデ	乳白色 乳黄色	石-長(1) ○		
153	支脚	底径 7.7 残高 2.2	半径な受盤。上打底。	ナデ(深張直者)	ナデ	褐色-深褐色 深褐色-深褐色	石-長(1~3) ○		
154	支脚	口径 7.0 残高 3.0	团みをもつ受盤。平底。	ヨコナデ (ナデ)	ナデ	乳白色 青茶褐色	石-長 ○		
155	壺	口径(18.8) 残高 3.8	複合口縁。横掛波状支脚以上。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳茶色	石-長(1~3) ○	SB02-1 レシ-5 02-5+5	

表177 桑原高井1次SB02出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
156	瓦 石	完存		17.2	4.3	2.3	254.83		

表178 桑原高井1次SB03出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
157	甕	口径(19.1) 残高 4.9	あいまいな縦をもつ外反する口縁部。内部は削をなす。	ヨコナデ(型ハケ) (ナデ)	ヨコナデ→ハケ ナデ(マメツ)	赤褐色 茶褐色	石-長(1~3) ○		
158	甕	口径(17.9) 残高 3.3	ゆるやかに外反する口縁部。底部は削をなす。	ヨコナデ ハケ×ヨコナデ (マメツ)	ハケ→ヨコナデ (マメツ)	乳白色 乳茶褐色	石-長(1~2) ○		
159	甕	口径(15.6) 残高 4.3	ゆるやかに外反する口縁部。底部はあいまいな抜き裏をなす。	タタキ	ハケ(7本/cm) ハケ(5本/cm)	黄褐色 黄褐色	石-長(1~2) ○		
160	甕	底径 3.1 残高 2.7	中型品。平底。	タタキ +ハケ ナデ	ナデアゲ	灰茶褐色 茶褐色	石-長(1~3) ○		
161	甕	底径 (3.0) 残高 2.9	中型品。(少)底部外側にも叩き痕を取。	タタキ	ヨコナデ(一部ハケ)	灰茶褐色 茶褐色	石-長(1) ○	塗付有	
162	壺	口径(12.7) 残高 6.1	複合口縁部。横掛波状支脚2段。	ハケ(一部ヨコナデ)	ヨコナデ	乳白色 乳茶色	石-長(1~3) ○		
163	壺	残高 3.2	蓋交する點部に、外反する口縁部。	ハケ (6本/cm)	ハケ(6本/cm) ナデ	乳褐色 乳茶色	石-長(1~2) ○		
164	鉢	口径(20.0) 残高 7.5	あるやかに外反する口縁部。縁部はあいまいな曲をもつ。	タタキ	ハケ	灰褐色 乳黄色	石-長(1~2) ○		
165	鉢	口径 12.0 残高 1.6 器高 7.5	底二口縁。丸みをもつ平底。	ナデ(深張直者) タタキ	ハケ(6本/cm)	天褐色-栗褐色 黄褐色	石-長(1~6) ○	黒底	
166	器台	口径(26.9) 残高 2.7	受盤片。大きくなぐる跡。表面は削をなす。	ヨコナデ ハケ(一部ヨコナデ)	ハケ(一部ヨコナデ)	黄褐色 黄褐色	石-長(1~4) ○		

桑原高井1次SB03出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
167	平 刃	完 壴		1.77	1.03	0.35	1.07		

表179 桑原高井1次SB04出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
168	甌	口径(18.6) 底径 6.0 残高 6.0	あいまいな模をもって外反する口沿部。 縁部は丸みをもつ。	⑤ハケ→ヨコナゲ ⑥ハケ	ハケ(一部ヨコナゲ)	褐色 褐色	石・長(1) ●		
169	甌	口径 17.8 底径 4.4 残高 33.7	ゆるやかに外反する口沿部。縁部は 直をなす。口崩、平底。	①ヨコナゲ ②ハケ ③ミガキ	ヨコナゲ ハケ ミガキ	褐色 褐色 褐色	E・長(1~6) ●		
170	甌	高径 3.7 底径 2.9 残高 2.9	中大甌。たちあがりをもつ平底。	タタキ	ハケ	黄褐色 淡黄褐色	石・長(1~4) ●		
171	甌	底径(3.2) 底高 4.5	中等品。平底。	タタキ→ハケ ⑤ハテ	ナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~4) ●		
172	甌	底径 2.3 底高 3.1	中型甌。平底。	ハケ(6本/cm) ④ナデ	ハケ + ナデ	同様色 同様色	石・長(1~1) ●	黒模	
173	甌	高径 2.7 底高 2.9	中等品。丸みをもつ平底。	タタキ→ハケ ⑥ハケ	ハケ→ナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~4) ●	黒模	
174	甌	口径(17.8) 底径 5.5 残高 40.3	甌合。底、側溝状施文あり。	③ナデ ハケ(6~8本/cm)	⑦ナデ ハケ(6~8本/cm)	黄褐色 黄褐色	石・長(1~3) ●		
175	甌	口径(17.2) 底径 5.0	複合甌。L字溝は無文。	⑧ハケ→マツメツ ⑨ヨコナゲ(一部ハケ)	⑩ハケ→ナデ ⑪ヨコナゲ	乳白色 乳白色	石・長(1~2) ●		
176	甌	残高 2.4	壺部。斜削子目込みをもつ凸巻。	ハケ→ミガキ(マツメツ)	ハケ→ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1) ●		
177	甌	底径(4.1) 底高 7.6	立ち上がりをもつ底部。わずかに上 げた。	ハケ ⑥ナデ	ナデ	乳白色 灰白色	石・長(1~3) ●		
178	甌	口径(26.2) 底高 4.4	大甌。底をもって外反する口沿部。 縁部は圓をなす。	ヨコナゲ(マツメツ)	ハケ→ヨコナゲ (マツメツ)	乳黃茶色 乳黃茶色	石・長(1~3) ●		
179	甌	口径(15.0) 底径 3.4 底高 8.6	直口。底部は直をなす。立ち上 がりをもつ平底。	ハケ	ハケ	淡黃茶色 淡黃茶色	石・長(1~2) ●	黒模	
180	甌	底径 3.6 底高 2.1	立ち上がりをもつ平底。わずかに上 げた。	ナデ	ハケ→ナデ	乳茶色 乳茶色	石・長(1~3) ●		
181	甌	口徑(21.8) 底高 3.8	直口。底部は直をなす。	⑫ヨコナゲ 板ナデ ⑬ミガキ	⑭ヨコナゲ ミガキ	淡灰茶色 淡褐色	石・長(1~3) ●		
182	高环	残高 3.2	環状片。環状片はあいまいな段をも つ。	ハケ(一部ナデ) ⑮ミガキ	マツメツ(一部ハケ)	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) ●		
183	高环	残高 3.2	脚部片。円孔を2段以上もつ(約 1.7cm)。	ハケ + ナデ	ナデアゲ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) ●		
184	高环	残高 8.0	脚部片。円孔2以上(約1.5cm)。	マツメツ(ミガキ)	ナデ(マツメツ)	淡黃茶色 淡茶褐色	石・長(1~2) ●		

出土遺物観察表

桑原高井1次SB04出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
185	器台	奥高 1.6	受器片。縫合部を焼成。縫合部底付文2条。 口縁上部に導通状状文2条。	ナデ(マメフ)	ナデ(マメフ)	黄茶色 黄茶色	石・長(1~2) ○		
186	器台	口径(37.3) 残高 1.2	六面片。縫合部が少々欠損。縫合部に複数の火炎文有り。 上部に導通状状文2条。	ナデ	ハケ	近赤・稍紅 點狀・斜狀	石・長(1~2) ○		
187	器台	口径(31.0) 残高 2.1	縫合口縁の可燃性をもつ。底部に數枚の木片付する付灰付。下縫合部に6.4cm 二段様をもつ。	ハケ	ハケ	深褐色 深褐色	石・長(1~2) ○		
188	器台	口径(32.0) 残高 2.1	受器片。縫合部底付は上部が欠損。	ヨコナデ ハケ→ミガキ	ヨコナデ	茶褐色 黒灰色	石・長(1~2) ○		
189	支脚	各高 3.3	底部平底、受器片をもつ。	ナデ ④下具根有	ナデ	灰褐色	石・長(1~2) ○		
190	支脚	底径(13.4) 残高 4.9	縫合片。かるやかに広がる縫合。	ナデ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石 ○		
191	支脚		受器片。窓部をもつ受器。	ハケ→ナデ		灰褐色 灰褐色	石・長(1~2) ○		
192	土玉	長さ 1.4 幅 1.2	4/5の窓付。重さ1.6kg。成形前穿孔	ナデ	ナデ	黒褐色	石・長(1~2) ○		

表180 桑原高井1次SB05出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
193	光	口径(14.7) 残高 5.2	縫合をもって外反する口縁部。端部 はあいまいな小口面。	ハケ(15木/cm)	ハケ(16木/cm)	淡黃茶色 淡黃茶色	石・長(1~2) ○		
194	光	口径(13.0) 残高 5.3	ゆるくかに広く口縁部。端部は凹 をなす。	ヨコナデ ハケ	マメフ	淡褐色 淡褐色	石・長(1~4) ○		
195	光	口径(23.8) 残高 11.4	窓合口縁。縫合後状文2条。縫合 部下に縫合。縫合に斜格子目との割 合内有。	ハケ	マメフ(一部ハケ)	乳黃茶色 乳黃茶色	石・長(1~4) ○		

表181 桑原高井1次DK4出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
196	光	口径(14.7) 底径 3.7 残高 23.9	内面に縫合をもって外反する口縁部。 縫合部は直をなす。	ヨコハケ(マメフ) タクタキ→ハケ	ヨコハケ ④ヘラゲツリ ナデ	乳黃茶色 暗褐色	石・長(1~2) ○	黑斑	
197	光	口径(19.8) 残高 6.8	外縫合に縫合をもって外反する口縁部。 縫合部は直をなす。	ハケ→ナデ ④タクタキ→ハケ	ハケ→ナデ	暗褐色 乳黃茶色	石・長(1~3) ○		
198	光	底径(2.9) 中盤高 6.3	中盤高。平底。	タクタキ(一部ハケ)	ハケ→ナデ 卷指痕裂者	乳黃茶色 乳黃茶色	石・長(1~8) ○	黑斑	
199	光	底径 2.8 残高 4.1	口縁部にあいまいな2条の 底縫合。口縁部の内縫合には縫合をもつ。	タクタキ ④ナデ	ハケ→ナデ	乳黃茶色 乳黃茶色	石・長(1~5) ○		
200	光	口径(17.6) 残高 11.4	複合口縁。口縁部にあいまいな2条の 底縫合。口縁部の内縫合には縫合をもつ。	ヨコハケ(一部ナゲ) タクタキ→ハケ マメフ(ナデ)	ヨコハケ(一部ナゲ) タクタキ→ハケ マメフ(ナデ)	灰褐色 灰褐色	石・長(1~3) ○	黑斑 集付着	
201	光	口径(20.3) 残高 5.2	複合口縁。縫合後状文2条以上。	ナゲ ハケ(10~10木/cm) →ナゲ	ナデ(マメフ) ハケ	乳黃茶色 乳黃茶色	石・長(1~3) ○		

桑原高井1次DK4出土遺物觀察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形 塘・施 文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 燒 成	備考	因版
				外 面	内 面				
202	壺	口径 10.6 残高 15.1	直口の細長瓶形。器底削い。	ハケ・ミガキ (一部マツツ)	⑩ヨコナダ ⑪ハケ ⑫街頭標識若 ⑬ハケ	乳黃褐色 乳黃褐色	青 ○		
203	鉢	口径(13.7) 残高 12.6	ゆるやかに外反する二脚鉢。溝部は唇をなす。	⑩タケ ⑪タケ(8.5cm/cm) ⑫ハケ(15.6cm/cm)	ハケ(13.3cm)	黃褐色 黃褐色	石長(1~4) ○		
204	鉢	口径(20.8) 器高 12.4	直口。縁部は唇をなす。平底。	マメツ(一部タクキ)	ナデ	乳黃色 乳黃色	石長(1~3) ○		
205	鉢	口径 18.4 残高 3.0 器高 7.1	直口。縁部にあいまいな突きもつ。立ち上がりをもつ。平底。	ハケ(タキカキ)	ナデ ⑩ハケ(16~17cm/cm)	淡黃褐色 淡黃褐色	石長(1~2) ○	黒斑	
206	高炉	残高 12.8	筒状。円凹A+R柱上(φ1.7cm)。	ミガキ(一部ナデ)	ナデ(一部ハケ)	茶褐色 赤褐色	石長(1~2) ○		
207	支脚	直径 9.2 器高 4.9	受基は平坦。上口直。	ナデ	ナデ	乳茶色 乳茶色	石長(1~3) ○		
208	支脚	直径 8.5 器高 5.3	受部は平坦。上口直。	ナデ(指痕有)	ナデ	褐色 深褐色	石長(1~5) ○		
209	支脚	直径 5.6 器高 6.1	受部に突起をもつ。上げ直。	ナデ(指痕有)	ナデ	褐色 褐色	石長(1~3) ○	黒斑	
210	不明	残高 2.1	發泡窓の内孔をもつ。	ハケ	ハケ	淡褐色 淡褐色	青 ○		

表182 桑原高井1次 DK5出土遺物觀察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形 塘・施 文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 燒 成	備考	因版
				外 面	内 面				
211	壺	口径(19.0) 残高 9.7	内面に棘をもって外反する口被器。肩部に粗粒。	⑩ヨコナダ タクキ	⑪ヨコナダ ハケ(マツツ)	淡灰乳黄色 淡灰乳黄色	石長(1~2) ○		
212	壺	口径(15.9) 残高 7.6	筒合口鋸。口唇無文。颈部に斜毛子片の割目呂。	⑩ヨコナダ	⑪ヨコナダ(マツツ)	淡灰乳黄色 乳褐色	石長(1~5) ○		
213	壺	口径(18.7) 残高 7.4	二脚海螺はテグ倒む。腹部に刻目呂(一部を残すのみ)。	⑩ヨコナダ ハケ→ヨコナダ ハケ(5~6cm/cm)	⑪ヨコナダ(一部ハケ) ⑫ナデ ⑬タクキ	乳褐色 乳褐色	石長(1~3) ○	黒斑	
214	鉢	口径(12.2) 残高 7.4	免形鉢。直口。丸底。	ハケ(マツツ)	ハケ(マツツ)	乳黃褐色 乳黃褐色	石長(1~3) ○		
215	支脚	器高 4.6	免形品。受部は平削。上口直。	ナデ		青茶色	石長(1~3) ○	黒斑	
216	支脚	直径 8.5 器高 13.0	前を欠損。受部に突起を2ヶ、背部に小さい把手(2ヶ)をもつ。	⑩ハケ(一部ナダ) ⑪タクキ	⑪ナデ ⑫ハケ ⑬ヨコナダ	青灰色 淡灰乳黄色	石長(1~3) ○		
217	支脚	直径 10.7	受部に突起を2ヶ、背部に小さい把手(2ヶ)をもつ。	⑫ナデ ⑬タクキ	ナデ	淡青色 淡青色	石長(2~4) ○		
218	壺	直径(8.0) 残高 13.2	人型壺。肩部下に丸みをもつ。平底。	タクキ→ケズリ (一部ハケ) ⑭ケズリ	ハケ→ナデ ⑮ハケ	乳褐色 乳褐色	石長(1~3) ○	黒斑	
219	壺	直径 1.5 残高 2.4	中~小頸部。小さい平底。	タクキ→ナデ	ナデ	淡乳黄色 淡青色	石長(1~2) ○		
220	壺	直径 3.0 残高 5.7	丸みのある平底。	ハケ(6cm/cm) 工具痕有	ナデ(指痕有)	灰褐色 灰褐色	石長(1~4) ○	黒斑	
221	壺	直径 0.7 残高 6.0	丸みのある極小さい平底。	タクキ	ハケ ⑩ナデ	灰褐色 灰褐色	石長(1~3) ○	黒斑	

出土遺物観察表

表183 桑原高井1次SD01関連出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
222	燒	底径(3.0) 残高 3.5	小型品。平底。	タキ→ハケ 鶴ナゲ	ナダ'アテ'	乳灰青色 乳茶青色	石・長(1) ○		
223	燒	底径 2.2 残高 4.6	中型品。平底。	タキ 鶴ナゲ	ハケ → ナデ	黒褐色 黄褐色	石・長(1~2) ○	黒斑	
224	燒	口径(13.8) 残高 5.0	外側外弧する長い口沿部。腹部は面をなす。	ヨコナデ ハケ(11本/cm)	ヨコナデ ハケ(10本/cm)	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~3) ●		
225	壺	残高 2.0	複合口縁。複合部はコ字状。模様は弦文以來以上。	ヨコナデ	ナダ(一部ハケ)	灰系黄色 灰系青色	石・長(1) ○		
226	壺	口径(13.0) 残高 7.8	複合口縁。複合部はく字状。其上。	ヨコナデ	ナデ	淡茶褐色 淡灰褐色	石・長(1~2) ○		
227	壺	口径(16.8) 残高 1.2	生丁口縁。複合状弦文3条。	ヨコナデ	ヨコナデ	黃褐色 淡灰褐色	石・長(1~2) ○		
228	壺	残高 4.3	長腹壺。腹部に模様文23条。	ナデ	ハケ	赤茶色 赤茶色	雷 ○	黒斑	
229	鉢	口径(34.7) 残高 3.7	内肩に後をもって外反する口沿部。 底部は丸をなす。	①ハケ→ナデ ②ハケ	ハケ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) ○		
230	鉢	口径(10.2) 残高 4.3	内肩に後をもって外反する口沿部。 周縁は丸い。	ナデ	ナデ	淡乳黄色 淡乳黄色	石・長(1~3) ○		
231	器台	口径(19.6) 残高 1.3	受粘片。断部には複合状弦文4条。	ヨコナデ(一部ハケ)	ナデ	茶色 茶色	雷 ○		
232	器台	口径(22.8) 残高 1.2	受粘片。断部は口下する。	ヨコナデ ハケ	ハケ→ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1) ○		
233	器台	残高 5.6	柱部片。円孔2段以上(φ2.1cm)。	ハケ→ミガキ	ハケ(6本/cm)→ナデ	青褐色・乳白色 青褐色・乳白色	石・長(1~3) ○		

表184 桑原高井1次 SD02 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
234	壺	口径(18.0) 残高 5.4	複合口縁。口沿部に複合状文5~6条。 腹部に複合状文4条。	ハケ(一部ナデ) ②ハケ	ヨコナデ ②ハケ	黑茶褐色 黑茶褐色	石・長(1~2) ○		
235	壺	口径(21.6) 残高 7.1	口沿部は垂下する。腹部は複合状文2条以上。	④ヨコナデ ハケ(11本/cm)	ミガキ ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長(1~3) ○		
236	高杯	残高 3.8	环唇片。周辺部は後をもってマサヒギム。	ハケ→ヨコナデ ④ハケ→ミガキ	ミガキ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1~3) ○		
237	器台	口径(21.4) 残高 1.6	縁部は垂下する。縁部に半圓状管文2段。 管状文付き円形弦文2+1横。	ナデ	ミガキ	赤褐色 赤褐色	石・長(1) ○		
238	壺	残高 6.0	難割土壺。	ミガキ	ハケ(一部ナデ)	碧褐色 碧褐色	石・長(1~2) ○		
239	鉢	底径 0.7 残高 3.1	突出する汽部は、小さい平底。	マメフ(ナデ)	ハケ(2本/cm)	褐褐色 黄褐色	石・長(1~2) ○		
240	壺	口径(15.5) 残高 8.4	赤生野上唇。汽部に沈継4条・クテ 7条1組。	ミガキ	ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) ●		

付 編

桑原高井1次SD02出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
241	甕	口径(15.8) 残高 4.3	内面に棱をもつて外反する口縁部。口縁部分はあいまいな凹を6つ。	ハケ	ハケ	黒茶色 黒茶色	石・長(1~3) 金 ○	上面	
242	甕	口径(14.6) 残高 3.9	内面にあいまいな棱をもつて外反する口縁部。口縁部分は凹をもつ。	⑩ハケ ⑪タキキ・ナデ	ハケ	乳黄色 乳黄色	白・長(1~2) ○	上面	
243	甕	口径 3.4 残高 3.2	中～大型甕。平底。	タキキ・ナデ ⑫ナデ	マメツ(ナデ)	褐灰赤茶色 暗乳灰色	白・長(1~2) ○	上面	
244	甕	口径 1.2 残高 4.1	中～大型甕。丸みのある尖底。	ナデ	ハケ(11本/cm) ⑬ナデ	茶褐色 茶茶褐色	石・石(1~2) ○	黒斑 上面	
245	甕	口径(20.5) 残高 4.5	複合口縁型。横模波状文18条。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰茶色	白・長(1~3) ○	上面	
246	甕	口径(18.6) 残高 3.6	複合口縁型。複合部は「く」字状。裏文。	⑭ヨコナデ ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) ○	上面	
247	甕	口径(15.1) 残高 3.3	複合口縁型。接合部は「く」字状。裏模波状文2条。	ヨコナデ ⑮ヨコナデ・ミガキ	ナデ(指擦痕)	茶褐色 茶褐色	青 ○	上面	
248	甕	口径(16.6) 残高 1.8	底下1段。器面に横模波状文7条。	ナデ ハケ→ナデ	マメツ	淡褐色 橙褐色	白・長(1~4) ○	上面	
249	鉢	口径(34.0) 残高 4.2	内口に棱をもつて外反する口縁部。底部は面をもつ。	⑯ナデ ハケ→ミガキ	ハケ→ナデ(ミガキ)	褐灰褐色 乳茶褐色	石・長(1~2) ○	上面	
250	鉢	口径(17.9) 残高 2.7	東口口縁。口縁部分は先鋒り。	ナデ・ハケ	ハケ→ナデ	黒心(可塑性) 暗茶灰色	白・長(1~4) ○	上面	
251	高杯	残高 5.8	脚部分。柱部に口沿1段以上(約1.6cm)。	ミガキ	口其張・ナデ	黄茶色 黄茶色	石・長(1~4) ○	上面	
252	高杯	残高 4.5	脚部分。有段部をもつ。	ヨコナデ ⑰ハケorミガキ(マ メツ)	ハケ ⑱ハケ→ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~4) ○	上面	
253	器台	口径(23.7) 残高 1.4	受部片。直下口縁。端部に横模波状文5条。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色 乳茶褐色	青・白・長(1) ○	黒斑 上面	

表185 桑原高井1次 SD03出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
254	甕	口径 19.8 残高 28.6	かるやかに外反する口縁部。端部は凹をなす。	⑯ヨコナデ ⑰ハケ(8~8木/cm)	ナデ→ハケ(5~7木/cm)	乳黄色 乳褐色	白・長(1~2) ○	保付參	
255	甕	口径(21.2) 残高 14.1	あいまいな面をもつて外反する口縁部。端部は凹をなす。	⑪ヨコナデ ⑫ハケ→ヨコナデ ⑬タキキ・ハケ	ハケ(9~10木/cm)	茶褐色 茶褐色	白・長(1~3) ○		
256	甕	口径(16.1) 残高 7.8	あいまいな凹をもつて外反する口縁部。端部は面をなす。	⑭ハケ(8木/cm) ⑮タキキ・ハケ	⑮ハケ(8木/cm) ⑯ハケ(5~6木/cm)	淡黃茶色 淡黃茶色	石・長(1~3) ○	黒斑	

出土遺物観察表

桑原高井1次SD03出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
257	釜	口径 11.2 底径 3.9 高さ 18.0	ゆるやかに外反する口縁部。端部 はあいまいな衝突一部にもつ。	②ナデ(マツツ) ハケ(30~12.5cm)	①ハケ(ナダ) 泡指痕(眞珠型) ②ナデ(30~12.5cm) +ナデ ③ナデ	乳白色 乳黄灰色	石・長(1~3) 金 ○		
258	釜	口径(12.6) 底径 3.8 高さ 19.1	口縁部・邵欠損。ゆるやかに外反 する口縁部。端部は四をなす。下 底。	②ハケ(一部ヨコナデ) タタキ→板ナデ 巻ナデ	ハケ ②ハケ→ナデアゲ	黒褐色 黄褐色	6・長(1) 金 ○	東洋 深付釜	
259	甕	口径(15.8) 底径 4.9	口縁部に横をもつて外反する口縁部。 端部は四をなす。	④ヨコナデ ハケ(添木/内)	④ヨコナデ ハケ(添木/内)	淡褐色 淡茶色	黄(1~3) 金 ○		
260	甕	残高 3.6	複合口縁。飾筋成状6条。	ハケ	ナデ	淡褐色 淡茶色	石・長(1) 金 ○		
261	甕	口径(20.1) 残高 3.8	大きく開く口縁部。端部は面をな す。	ハケ +ヨコナデ ④ヨコナデ(10本/内)	ハケ +ヨコナデ ④ヨコナデ(10本/内)	暗茶褐色 暗茶褐色	石・長(1~3) 金 ○		
262	甕	口径(14.6) 底径 8.1	台付鉢。直口口縁。端部は丸い。	ミガキ(マツツ)	マツツ	明茶褐色 明茶褐色	石(1~2)・長 (1~4) ○		
263	甕	口径(11.6) 底径 5.8	直口口縁。端部は織る。先底。	タタキ→ハケ ④タタキ	ハケ→ナデ	乳黃灰色 乳黃褐色	石・長(1~2) 金 ○		
264	コシキ	底径 2.7 残高 3.4	底部に横成筋2ヶ所(φ7mm)をも つ。	タタキ→ハケ ④ナデ	ハケ	乳黄色 淡黄茶色	石(1~3) ○		
265	器台	口径(27.0) 残高 1.8	受部片。直口口縁。底部に斜傾左 右の三角文。	ヨコナデ(一部ハケ)	ハケ→ミガキ	乳茶色 石茶色	密 ○		
266	支脚	残高 13.7	受部は2ヶ所の大きなくりこみを もつ。	ナデ→ハケ	ナデ(一部ハケ) ④ナデ	黒褐色 黒褐色	6・長(1~3) 金 ○		

表186 桑原高井1次その他 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
267	支脚	底径 9.3 高さ 6.4	受部に4ヶ所以上の小突起をもつ。 上げ底。	ナデ	ナデ(3.只底有)	乳黄色 黑色	石・長(1~4) 金 ○	堅底	
268	甕	口径(21.1) 底径 2.0	柔口口縁。竹青文付きの河原泥文 1ヶ以上。	ヨコナデ(一部ハケ)	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	6・長(1~4) 金 ○		
269	鉢	口径(5.2) 高さ 6.6	直口口縁。先底。	マツツ ④タタキ	ハケ(タテ→ヨコ) ④ナデ	乳黃褐色 乳黃褐色	石(1~3)・長 (1~2) ○		
270	支脚	残高 11.1	中実の肩部。底部やや上がる。	ナデ→ハケ ④ナデ		黃褐色	石・長(1~4) ○		

桑原高井1次その他出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
271	鉢	口径(21.6) 底径 2.2 高さ 6.6	長い口縁部。底部丸みをもつ。 突出する小さい上げ足。	◎ヨコナデ ハケ	◎ミガキ ナデ	本桜色 乳赤褐色	青 ○	黒道	
272	盃	口径 13.4 基高 16.7	波状文4条→4条1幅のテテ沈線→ 木口による押庄村文2段。張部凸筋1、 及び下に木口押庄村文。	◎ハケ ◎ハケ→ミガキ	◎ナゲ ◎ハケ(10~11本/cm) ◎ハケ(9~10本/cm)	赤茶色 赤茶色	毛・長(1~2) ○		

表187 桑原高井1次その他出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
273	石臼	2/3	緑泥片岩	7.35	4.45	0.66	39.45		
274	石盤	ほぼ完存 (一部欠く)	緑泥片岩	7.7	4.4	0.45	34.16		
275	石 鉢	完存		4.0	3.3	2.0	34.54		
276	不 明	ほぼ完存	緑泥片岩	12.1	3.6	1.3	104.04		
277	不 明	完存		1.54	1.0	0.43	1.03		

第19章 調査の成果と課題

今回の調査では、弥生時代後期・古墳時代後期・中世の集落関連遺構を検出し、同時代の集落存在が明らかになった。特に、弥生時代の遺構では集落構造や住居構造の研究に一つの資料を提示するものとなっている。よって、本調査で検出した弥生時代後期末の堅穴式住居址の構造について分析を行うこととする。

ここでは、堅穴式住居址の炉、柱、小溝、「U」字状溝などを取り上げ、中四国地域の中で検討を行いたい。

(1) まず、炉について考える。本調査で検出した堅穴式住居址のなかには副次的炉（一つは燃焼部、他は炭のかき出し所）をもつものが4棟ある。弥生時代後期末のS B203・S B302と、弥生時代後期後葉～末のS B403・S B502である。この内3棟（S B203・302・403）には幾つかの共通点がある。炉は住居の中央より外に位置する。外側にある稍円形の掘り方は浅く、炭と焼土が検出される。中央部側にある掘り方は深く、炭や焼土は検出されないのである。

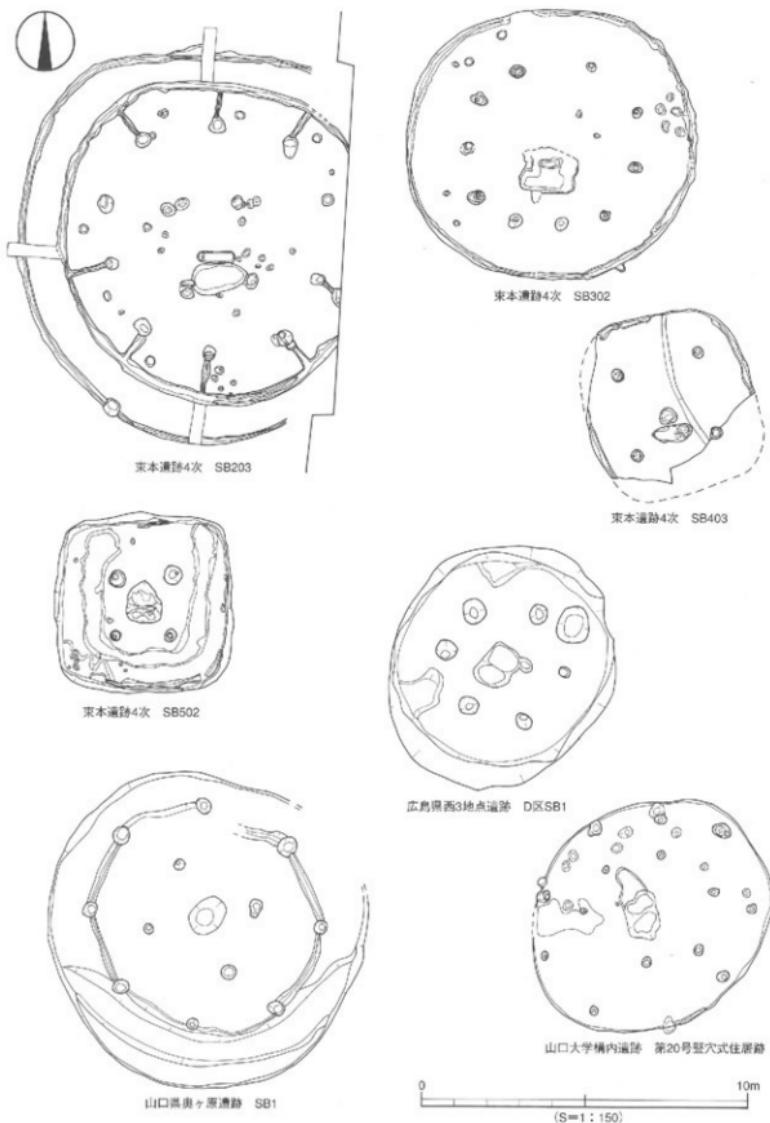
一方、S B502の炉は住居の中央に位置し、二つの掘り方の深さは等しく先の3棟とは違いがあるのであるが、埋土については北側の掘り方に炭と焼土があり同じ状況を呈しているのである。

このような副次的炉をもつ堅穴式住居址は松山平野のなかでは、本調査地5区Cの西側に位置する東本遺跡2次調査地に2棟と、宮前川北斎院遺跡岸田II地区に2棟検出されている（註1）。東本遺跡2次調査の2棟は、弥生時代後期後葉～末のもので大型円形住居（S B01）と方形住居（S B02）である。炉はともに住居の中央より外に位置し、中央部は方形で深く、炭と灰を検出し、外側のものは長方形で浅いものである。宮前川北斎院遺跡岸田II地区の2棟は、古墳時代初頭の中型方形住居址である。炉は住居中央に位置し、中央部のものは円形で浅く、外側のものは弧状の溝と隅丸方形で深い穴からなる。埋土からはともに炭が出土している。

このように副次的炉をもつ住居址は、松山平野では弥生時代後期後葉～古墳時代初頭に検出されている。この内、東本遺跡出土の副次的炉は、弥生時代後期後葉～末であり、炉は中央より外側に位置し、一方より炭と焼土が出土することを共通要素としている。

さて、副次的炉をもつ堅穴式住居址は中四国地域では1例であり、広島県西3地点遺跡D区S B1に報告がなされている。S B1は弥生時代後期のもので、平面形態は円形を呈し、規模は東西5.4m、南北6.2mを測り、中型の円形住居址である。炉の平面形態は2基の円形の穴が接する形で住居の中央で検出され、炉の周辺からは炭と焼土が出土している。西3地点遺跡D区S B1を東本遺跡S B502と比較すると、規模と炉の位置は同じであるが埋土に違いがみられる。副次的炉をもつ堅穴式住居址は現在までに、中四国地区では1例に限られ、松山平野での検出事例は特異であるといえる。今後、追加資料を得て研究課題としたい。

(2) 次に柱構造を考える。S B203（弥生後期末）は2重（内は4本以上）に巡る柱構造であり、外側に10本と内側に4本の柱をもつ。主柱が2重に巡り、内側が4本以上となる柱構造は松山平野では、東本遺跡2次調査地S B01に検出例がある。2次調査S B01は弥生時代後期後葉～末のもので平面形態は円形を呈し、規模は長軸10m、短軸9.7mを測り、大型の住居址である。柱は外側6本、内側4本の構造である。2次調査S B01と本調査S B302は時期、規模、内側の主柱数には大差なく、外側の柱数に違いがみられるだけである。このほか東本地区には、内側に1～2本の柱構造をもつ住居が3棟ある。



第233図 副次的炉と二重に巡る竪穴式住居址

東本遺跡2次調査S B02、桑原稻葉遺跡1号住居、桑原高井遺跡1次S B02である。

東本遺跡2次調査S B02は後期後葉～末の方形住居址で外側6本に内側1本、桑原稻葉遺跡1号住居は後期末の円形住居で外側9本に内側2本、桑原高井遺跡1次S B02は後期末の円形住居で外側6本に内側1本の構造になる。これら3棟は、規模は大型で、外側は6本以上の柱となることを共通としている。

さて、2重に巡る柱構造は中四国地域においてみると、山口県奥が原遺跡S B1と山口大学構内遺跡第20号竪穴式住居址に類似がある。奥が原遺跡S B1は弥生時代後期であり、平面形態は円形で、規模は径10mを測る。柱は外側8本、内側4本の構造である。S B302と比較すると外側の柱数が少ない。山口大学構内遺跡第20号竪穴式住居址は中期後半であり平面形態は楕円形を呈し、規模は径6.85～7.75mを測る大型円形住居址である。柱は外側8本、内側5本の構造であり、外側の柱は周壁の近くに位置する。内側の柱は5本と東本遺跡例よりは1本多い。

本調査のS B302と比較すると奥が原遺跡S B1は外側の柱数、山口大学構内遺跡第20号竪穴式住居は内側の柱数に違いが見られる。

2重に巡る柱構造の住居は、周防灘を隔て愛媛と山口にあり、松山平野では弥生時代後期後葉～末に大型住居址で検出されることが分かる。愛媛と山口との関係についてはこれから検出例を待ち検討を加えたい。

(3) 小溝について考える。小溝はS B203から検出された。小溝とは外側の柱穴から壁体に向かう溝(主柱10本の内8本から)のことであり、S B203は前文で述べたように柱が2重に巡る住居址である。S B203と同種の小溝は、松山平野ならびに中四国地域においても報告例はない。ただし、竪穴式住居内にみられる溝は幾つかの検出例がある。桑原稻葉遺跡1号住居には柱間を結ぶ溝があり、愛媛県朝倉村朝倉古谷遺跡S B3には住居内から外部に伸びる溝がある。本例についての性格や報告については課題としておく。

(4) このほか、本調査では特種な施設をもつ住居址が検出している。S B203では周堤帯が検出され、西日本では大阪府長原遺跡と鳥取県夏谷遺跡の2例が報告されているにすぎない。S B502の「U」字状の溝では、松山市筋道C遺跡で検出例があるが一般的ではない。これ等の住居址は弥生時代後期の竪穴式住居址の構造を研究する上で良好な資料になるものであり、今後の研究課題とした。

今回の調査では、東本遺跡における弥生時代後期末の集落域と構造、竪穴式住居の内部構造の一部が明らかになり、中四国地方の竪穴式住居址と比較分析することができた。本調査での成果は、周辺地域を面的に調査することで、より明確になるであろう。

なお、今回の調査で出土した遺物については、鉄器は村上恭通氏、弥生土器は梅木謙一氏、土師器は栗田正芳氏、石器は加島次郎氏に御指導と御教示を賜った。記して感謝申し上げます。

【文献】

- | | |
|---------|---|
| 梅木 謙一 | 1991『松山大学構内遺跡』松山大学・松山市教育委員会・松山市立思文化財センター |
| 森 光晴 | 1980『東本Ⅱ・Ⅲ・桑原高井遺跡』『松山市文化財調査報告書14』松山市教育委員会 |
| + | 1989『朝倉古谷遺跡』朝倉村教育委員会 |
| 和田 勝之 他 | 1992『奥ヶ原遺跡』(財)山口県教育財団・山口県教育委員会 |
| 河村 古行 | 1990『山口大学構内遺跡調査研究年報』山口大学埋蔵文化財資料館 |
| 脇坂 光彦 他 | 1992『賀茂学園都市開発整備事業地内(西高麗地区)遺跡群Ⅵ』(財)広島県埋蔵文化 |

化財調査センター

岡田 敏彦他 1990『桑原住宅埋蔵文化財調査報告書』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

(註1) 作田一耕 ((財)愛媛県埋蔵文化財調査センター) 氏の御教示による。

作田氏には報告書作成中にもかかわらず資料掲載に御協力いただき心より感謝致します。

表190-(1) 副次的炉をもつ竪穴式住居址一覧

遺跡	遺構	炉の位置	内側		外側		時期	住居形態	規模
			形	炭化物	形	炭化物			
東本4次	SB203	中央より外	長方形 圓窓	なし	楕円形 浅	反土	後期末	円形	大形
+	SB302	中央より外	長方形 圓窓	なし	楕円形 浅	燒土	後期末	円形	大形
+	SB402	中央より外	圓形 深	なし	楕円形 浅	反土	後期後葉～末	円形	中形
+	SB502	中央	楕円形 浅	燒土	楕円形 浅	反土	後期後葉～末	方形	中形
東本2次	SB 01	中央より外	方形 深	反灰	長方形 浅	なし	後期後葉～末	円形	大形
+	SB 02	中央より外	方形 深	反灰	長方形 浅	なし	後期後葉～末	方形	大形
北高院通跡 庄田Ⅱ地区	SI 01	中央	楕円形 浅	灰	温状塊	灰	古墳初頭	方形	中形
+	SI 02	中央	楕円形 浅	灰	猪丸瓦形 深	灰	古墳初頭	方形	中形
広島西3地点D区	SB 1	中央	圓形 深	なし	円形 深	なし	弥生後期	円形	中形

表190-(2) 柱が二重に巡る竪穴式住居址一覧

遺跡	遺構	柱		時期	住居形態	規模
		外	内			
東本4次	SB203	10	4	後期末	円形	大形
東本2次	SB 01	6	4	後期後葉～末	円形	大形
山口温泉ヶ原	SB 1	8	4	後期	円形	大形
山口大学構内	SB20号	8	5	中期後半	円形	大形
東本2次	SB 02	6	1	後期後葉～古	方形	大形
桑原稻葉	SB 1	9	2	後期末	円形	大形
桑原高井	SB 02	6	1	後期末	六角形	大形

報告書抄録

ふりがな	つかもといせき えだまついせき						
書名	東本遺跡4次調査・枝松遺跡4次調査						
副書名							
卷次	一本文編一						
シリーズ名	松山市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第54集						
編著者名	高尾和長・梅木謙一・宮内慎一・山木健一・水本完児・相原秀仁・大森一成						
編集機関	財団法人 松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター						
所在地	〒791 松山市南斎院町乙67-6 TEL:089-923-6363						
発行年月日	西暦 1996年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村・遺跡番号	北緯 ° °'	東緯 ° °'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
つかもと 東本4次調査	えひめんまつやましづかもと 愛媛県松山市東本	38201	33° 49' 45'	132° 47' 23"	1993.1.01 ~ 1994.7.31	12,000	道路建設
えだまつ 枝松4次調査	えりのりんまつやましえだまつ 愛媛県松山市枝松	38201	33° 49' 51"	132° 47' 22"	1993.1.01 ~ 1993.11.30	5,600	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
東本4次調査	集落	弥生 古墳 古代	堅穴式住居 掘立柱建物 溝、土坑	弥生土器、須恵器、 石器、鐵器、 ガラス玉、銅鏡	周堤帯をもつ堅穴式 住居、「U」字状溝を もつ堅穴式住居、銅 鏡、線刻土器の出土		
枝松4次調査	集落	弥生 中期	掘立柱建物 溝、土坑	弥生土器、須恵器、 土師器	茶釜の出土		

松山市文化財調査報告書 第54集

東本遺跡4次調査
枝松遺跡4次調査
—本文編—

平成8年3月31日 発行

編集 松山市教育委員会
〒790 松山市二番町4丁目7-2
TEL (089) 948-6605

発行 財團法人 松山市生涯學習振興財團
埋蔵文化財センター
〒791 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923-6363

印刷 原印刷株式会社
〒791 松山市山越4丁目8-15
TEL (089) 924-8823
